
まじこい！～『闇殺し』の少年の物語～

佐久紗府斉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじこい！〜『闇殺し』の少年の物語〜

【Nコード】

N6703X

【作者名】

佐久紗府斉

【あらすじ】

ありとあらゆる暗殺術を極めた歴代最高の暗殺者の少年がいた。でも・・・「違う！俺は暗殺なんかしたくない！！」少年の叫びは閉ざされた道を破ることが出来るのか！・・・

簡単に言うとチート主人公がまじこいの世界で猛威を振るう（汗）物語です。

まじこいのキャラですが、作者は原作をやってないので全てが力オスの極みです。文才も無いので・・・

「こんなキャラじゃない」と思った人はお引取り願います・・・
ヒロインは一子と燕で燕彙頁になっております。

プロローグ〈少年は暗殺のエキスパート！？〉(前書き)

ども、作者です。大して

原作を知りもしないのにやらかしてしまいました・・・

ッ更新はもう一つがメインですので遅めになると思います。

ではまずはプロローグから、どうぞ。(ノ。)

プロローグ少年は暗殺のエキスパート!?

ダアン!! 『バスツ!!』

ある男が頭をぶち抜かれ、大量の血を撒き散らしながら床に倒れ伏した。

俺はそれを見ている。……

自身が持っているスナイパーライフルのスコープから。

今俺がいるところは雑居ビルの屋上。標的のアジトから約五キロほど離れた高いビルだ。

本来ならそんな距離から狙撃をしても到底当たらない距離だ。

しかし俺はそれをいつものことのように難なくこなす。

他人が今の俺を見れば絶対びびるだろう。今の俺は完全な暗殺者モード。

目は鷹のようでも表情はとても冷たい。

「はあ……」

暗殺者モードから標準モードに『切り替え』、一息吐く。

俺の名前は「空裂 零斗」……変な名前だろ? ……

まあ今更変えようとも思わないが。

『ウラ』の業界に関わる者ならば知らない奴はいないだろうとまで言われてる。

・・・らしい。

自分で言うのもなんだが若干十六歳にして狙撃・接近・『気』の総量、使い方等々・・・

全ての面で『殺し』の頂点に上り詰めた。

ナンバーワンだよナンバーワン。・・・はあ(；- -)(=3・
・・・また溜息が出る。

今回依頼されたのは政府の重鎮・・・ではなく。とあるデカイ麻薬密輸組織の

リーダーを「やれ」と言われた。

依頼者はなんと・・・警視庁の上層部だけ？・・・黒いな警察も・・・(汗)

たまにこんな風に警察とかからも普通に依頼が来る。

・・・いくら捕まえ難いつつてもさあ・・・いいの？・・・

「・・・でも今はこうするしかないんだ。・・・標的の死亡を確認。
ミッシェル・コンフリー
任務終了だ。」

一瞬で俺の愛銃『L96 スナイパーライフル(通称レクロ) 零斗フルカスタム』を

バラし、でかいアタッシュケースに入れてごつい鍵をかける。

指紋、DNA情報を全て残さず『消し』、俺はビルを後にする。

夜の街を俺は歩いてうちに帰る・・・捕まる心配なんかねえ。五キ口先から撃ったなんて誰も気づかんし依頼者は警察側。捕まる要素ねえじゃん。

・・・ほんとに殺しなんかやりたくない。

俺だって高校生だ。友達と毎日馬鹿騒ぎしたい。恋だってしたい。今俺は川神氏の川上学園に通っている。・・・いるんだが。明日・・・いや、

今日から二年生だが。去年は一日に五件以上は殺しの依頼が来て授業になどぜんぜん出ていない。ごく稀に出てても「空裂くん。お電話です。」とまた殺せと命令される。ちょっと『もうやめて』的なことを言ったんで
もう普通に授業出れると思うんだが・・・

空裂家は代々殺し屋稼業らしい。『全く、零斗は家の誇りじゃわい。』

とかじーさんも言ってたわ。何かいつの間にか他のやつらには『地上最強の暗殺者』とか言われて畏れられてるし・・・他の暗殺者に避けられるって

どうなのよ・・・まあこれも運命だと思って諦め・・・無いッツ!!
殺し屋稼業からいつかは抜け出す!絶対!!・・・だってさあ・・・

違うもん！！こんなことしたくない！

「はあ・・・明日（今日）から二年生かあ・・・少しは『何か』が
変わってくれと

いいんだけどな・・・」

俺の呟きは誰にも聞かれること無く深夜の闇に溶けていく・・・

プログラグ少年は暗殺のエキスパート!?? (後書き)

はい。プログラグ長いですね・・・

まあこれからもぼちぼち更新しますんで

皆さんぜひぜひ応援よろしく!お願いします!!

第一話 「新たな日常の開始？」 (前書き)

ども、作者の佐久紗です。

第一話が始まりました……が！

早速作者の『原作殺し（シナリオブレイカー）』が発動したようです……

二年になって初っ端から川神大戦です。ちなみに途中留学の

クリスとかは一年の時に留学イベント そのまま二年へ……

と言う流れです。原作の途中参加キャラはもういると思って下さい。

まあそれではカオスな本編をどうぞ。

第一話 「新たな日常の開始？」

「へ〜ここが川神学園かあ．．．って．．．もう一年間はここの生徒だったよ．．．」

学園の入り口でそんなことを一人ごちる。や〜っと来れたよここに．．．

そこかしこで生徒達がわいわいやっていた。が、俺には友達が当然いない。

少ないんじゃない。居ないんだ．．．

「はあ．．．もう教室．．．Fクラスだったか．．．行こ．．．
．．．」そう言い、
校舎の中に入った。

本人は気づいてなかったがその場のほとんどが零斗を見ていた。
なぜなら．．．零斗があまりにも異質な気迫を放っていたからだ。

漆黒の髪は艶を帯び、少し癖っ毛が立っている。そして右のこめかみは

どす黒い赤に染まっている。ちなみに地毛。顔は端正でカッコいい
ほうだが

話しかけづらい雰囲気をかもし出している。そして持ち物は普通の
鞆と

いつでも『依頼』を受けられるよう、『レクロ』の入った大きくて
ゴツイアタッシュケース

を持っている。制服は丈は同じだが袖などの幅がかなり広い。オー
ダーメイドで

ピッタリだけどゆったり、という着流しのような格好でそれがまた
男女問わず

注目を集めていた。

「ほう……」

そして、注目していたのは生徒達だけではなかった。たまたまそこ
に居合わせた

学園長までも、いや、学園長のほうがまじまじと零斗に見入ってい
たのだ。

何故か。それは零斗から微量に漏れる隠しきれない濃密な『気』
だ。

量こそあるかないかの量だが何より質が尋常ではない。まるで触れればやけどをするような

濃い、ひたすらに濃い『気』。学園長はそれに魅入られたように零斗を見つめ……

「ほお……ほっほっ。面白い生徒がいるようじゃのう。」そう呟くのだった。

ある意味衝撃的なデビューを果たした零斗であった……

～Fクラスの教室～

「さつて、と席は……ここだな。」『レクロ』のケースを床に置く。

「ズゴンー！」と音がし、少し教室に振動が響いた。そう、俺の『レクロ』は普通のスナイパーライフルと比べて重量、大きさ、全てが規格外に出来ているのだ。

「ふう……っと！」席について皆が見ていることに気づき、机に伏せる。

「ははっ！やっぱ俺達是一緒だな！よろしくー！」「おう！

！」「うん！」

「そうね。」 「そうだな！」

そんな声が聞こえてきた。仲いいな……。「あ！あたしの席はここね！」

と、そこで隣に誰か座ってきた。「んあ？」誰だ？と顔を上げるとそこには……

赤っぱい髪の活気に満ち溢れたような少女がいた。

「あ、あたしは川神一子、よろしくね！」川神……ああ、川神学園……読めたぞ。

つてかこいつどっかで……あ。

「お前は……河川敷の……」

「……あ！もしかしてたまに河川敷でボーっとした人！？」

「……失礼な、あれはれっきとした修行だ。」

心を『無』にするための、な。心が無の状態だと第六感を著しく磨くことが出来るのだ。

しかしコイツ……純粋なヤツだな……心が洗われるようだ。

特に俺は人間の汚い部分をずっと見てたから余計に和む……

「でさ！あなたの名前は！？」

「……………空裂 零斗だ。」 「そう、よろしくね空裂君！」
「……………」 「なんだろう、ここまで言われると黙るしかない。」

「つてか俺こんなに話すの苦手だっけ？ 環境とは恐ろしいもんだな……………」

と、そこで先生が教室に入ってきた。「全員席に着け！」 はいはい、着いてるよ……………」

「さて、私はこのFクラス担任の小島 梅子だ。まあ皆は歴史の授業で知っているだろう。出席を取るぞ。」

……………つてゆーかさ、何で出席って必要なんだろう。空いた席見れば分かるじゃん。

あと教師がガチの鞭を持つてるってのはシニールすぎやしないか？

これがほんとの「ガチムチ」なんつってwww…はい……………ごめんなさい……………」

「……………」 はい！……………」 はい！……………」 だんだんと呼ばれていつてる。

「空裂零斗」「ほい。」「……………あ。やっべ……………」

『ピシッ!』と一気に教室の空気が凍った……………気がした……………。

『ヒュビュン!!』刹那、鞭の二撃が顔に迫ってきた。

だがこの程度のスピード、俺には止まって見える!

俺はダメージを殺し、その鞭を腕に絡めて一気に奪い取った。

「……………すみません。つい口が滑っちゃいました。」鞭を返しな
がら言う。

「ツツ!!……………まあ分かったのならいい……………さて、今日は
重大な報告がある。」

驚愕の色を隠せてない先生。ん?なんだ??

「いざこざの続いていた二年FクラスとSクラスの件だが、」

「……………ちょちょちょ!ちょっとまって!?まだ二年になってから一
日もたつてないよ!??」

「先生、まだ進級して一日目ですけど……………」誰かが言う。そ
う、その通りだ。

人殺し以外で力を振るうのはひさしぶりだな。

「では、これで終わる。」梅子先生の話が終わり、休憩に入る。・
と、

「く、空裂君凄いな！梅子先生から鞭を奪い取るなんて！！」何か川神が言ってきた。

なんだか興奮した面持ちだ。

「そうか。」と適当に返しておく。クラスの皆はとどど驚いてはいるが

俺の話しかけづらい雰囲気ので話しかけてこないようだ。

願ったり叶ったり・・・・・・・・・・・・・・・・じゃねーよっ！

無意識に意識が孤独を選んでた・・・・・・・・。気をつけねーとな・・・・・・・・。

side 一子

私の隣の席は今までに何回か見たことのある人だった。でも面識は無いに等しいけど。

その人は河川敷でたまに呆けたように遠くを見ている人だった。

最初、その空裂君が隣の席に座っていたのを見た時は一瞬「うっ」とたじろいだ。

それはあまりにも近寄りがたく、「来るんじゃない」と言わんばかりの

冷たい気迫だったから。

それでも私は少しだけ勇気を出していつものように話しかけてみた。そして、

「んあ？」と、顔を上げた空裂君の顔を見て私はとても驚いた。

やはり人を拒絶するような雰囲気。だけどその目は人とのつながりを強く望んでいるような

寂しがり屋の子供のような切ない目で。

そして、さらに驚くことが起こった。ウメ先生の出席確認で空裂君は「ほい。」と

間の抜けた返事をしてしまったのだ。直後にウメ先生の鞭が飛んだ。でも、一瞬後には

鞭は空裂君の手に治まっていた。クラス全員が啞然とする。もちろん私も。

私にはウメ先生の鞭の動きすら見えなかったのに！

授業中も私は彼の横顔を眺めていた。すると、ときどき彼の表情がふいにフツ……と

曇る時がある事に気づいた。そのどれもが「やりきれない気持ち」や「後悔」と言うような

表情だった。

彼に何が起こったのだろう。何が起っているのだろう。

もっと知りたい、そう思った。そして……もっと仲良くなりた
いと思った。

このずっと孤独に耐えてきたような瞳をしている彼を支えてあげた
いと思った。

私はファミリーの皆に、いろいろな人に支えられて楽しい『今』を
送っている。

だから……今度は私が、この人の孤独をといてあげたい。

そう強く思った。

side out

第一話 「新たな日常の開始？」 (後書き)

はい。一子にフラグ(の様な何か)が立ちました？早いですね・・・

まあこっからは長々と駄文を書く予定です。

この原作の崩壊度にあなたは着いてくれるか！？WWW
次はおそらく主人公紹介的な何かになると思います。

〜主人公設定〜（前書き）

ども。今回は主人公設定です。

零斗君はキモイぐらいのチートにする予定です。

最強だけど孤独・・・みたいなね？WWW

ではごーぞ。

～主人公設定～

～主人公設定～

名前

空裂零斗くわつれいと

誕生日

十一月二十五日（本人は忘れかけている。）

容姿
雰囲気。

端正な顔立ちだがどこか近寄りづらく、人を拒んでいる

髪は艶のある漆黒の髪でちょっと癖毛。

髪型と顔立ちは『ガンダム00』の『刹那・F・セイエイ』を少しだけ幼くしたような感じ。

右のこめかみの一部に生まれつきの赤黒い髪が生えている。
ちなみにこの赤黒い髪は特殊なもの。詳細はストーリーが進むにつれ明らかとなる。

声は普通の高校生の声だがやはり修羅場をくぐりぬけてきているだけあって
切れると誰もがびびるような迫力に満ちた声になる。

体型 背は普通。ほっそりとしているが無駄な肉が一切無く引き締まっている。

生い立ち 家は先祖代々『殺し』を生業としていて、物心ついたときから祖父に一流の暗殺者になるよう訓練された。先祖には忍びもいたらしく、回避術などは忍術の要素があるものも教えられた。

その内容はかなり鬼畜。

両親は物心ついたときにはもう亡くなっている。が、やはり両親も裏家業の人間だったらしい。

現在、『体人暗殺術』、『狙撃、銃器』、『気の総量、使い方』、そして

『状況把握、適応』、これら全てにおいて『歴代最高の殺し屋』の名を欲しいままにしている。

『暗殺者』モードに切り替えると表情が消え、戦闘力は減るが集中力や反射神経が爆増する。

『死の具現』などの二つ名も多々ある。

本人は幼いころ、「主要人物を殺すことでより大きな混乱を防ぐことが出来る。」

と刷り込まれ、それを信じてきたが今、『人を殺す』ことに疑問を抱き始め、

今では廃業して普通の高校生になりたいと強く望んでいる。

・・・が、幼少期から刷り込まれたことは簡単には抜けず、

戦闘自体は割り好み、戦闘中、ハイになってしまいそうになることもしばしば。

川神学園の二年生。一年生の時は以来を完遂するためにほとんど授業には出ていない。

制服は袖や裾の幅が広く、着流しのような感じで最大サイズを買った後で

丈を短くし、着流しのようなゆったりとしたものになっている。

理由がいつでも依頼を受けられるようにするものだと言うことは秘密である。

自分で稼いだ報酬で既に学園のすぐ近くの高級マンションの一室を借りて

一人暮らしをしている。

実家もそう遠くは無いが実家から逃げ出すことのほうが一人暮らしの目的。

家事スキルあり。

しかし実家から自分宛の『依頼』の電話は尽きない……。

〈補足解説〉

『Lクロ』
『L96・スナイパーライフル』の略で零斗の一番の愛用銃。

零斗専用のカスタムが施され最大射程距離が数倍に跳ね上がっている。

零斗の能力と組み合わせればほぼ無敵の銃。零斗の身長ほどもある。

いつもでかいアタッシュケースに入れて、常に零斗のそばにある。

〜主人公設定〜（後書き）

はい、もう見るからにどチートオーラが漂ってます……

こっからひたすら原作をぶち殺して進むのでお覚悟を……

ちなみに禁書のパクリなんかごく僅かですがあります。

ではでは〜

第二話 「『表』と『裏』」 (前書き)

どもども、

今回は『表』と『裏』両サイドあります。

なにげに長くなりました。ではどうぞ。

第二話 「『表』と『裏』」

～授業終了後～

「……………なんだこれは……………」

授業が終わり、皆がぱらぱらと教室から出て行っている中、俺は配られたばかりの教科書を

呆然と見ている。まあ最初の授業と言えども余った時間で少し内容はやったわけで…………

……………コレハナンダ？高校数学ってこんな鬼畜な内容だったか！？

まず数学、圧倒的に分からん。もはや揺るぎ無いほどの不可解さ。

英語、これも全く分からん。日本語もちゃんと理解して無い奴がいるのに

なんで外国語に手を出す！？もっかい鎖国してまえ！！

国語、まだいい、しかし俺の『まだいい』は常人が若干ヒクレベルである。

ゆえに決して侮ってはいけない。

これらのことから導かれた一つの答え……………それは

「……俺は勉強が出来ない。(通称はない)」

「……なんだ？この半年の間に何があった！？俺が『仕事』に専念してた間に！一体！何が！起こった！？あん！？」

「……駄目だ。(ありとあらゆる意味で)オウチニカエロウ……。」
完全に勉強面を捨て、ふらふらと教室を出ようとした時、

「ねえ、空裂君！一緒に帰ろ！？」

「……やけにテンションの高い声がかげられた。

ああ、川神か。

「別に構わないが……。」
「コイツは珍しいな。何で絡んでくる？」

「……いや、むしろ嬉しいけど。スゲー嬉しいけど。」

「ほんとに！？じゃあ帰ろう！！」
テンションMAXになってやがる。

「……」

と、何か後ろから妙な殺気を感じた。微量だが。極々微量だが。

「何でそんな奴と一緒に帰るんだ一子？」

俺を睨んでいた内の一人が川神を説得しようとしている。

まあ俺ははたから見れば『何考えてるか分からない奴』だろーからな……

……誰これ……確か……

「直江……大和……だったか……」

明らかに頭脳派なやつだな。彼のお仲間と思われる数人と一緒にこちを警戒している。

「ああ。お前は空裂零斗って言ってたな。」

明らかに不審者を見る目だ。……おい、流石に傷つくぞ？

「なによ、いーじゃない別に、隣同士なんだし。」

と川神が言つと

「そんなわけの分からねえ奴と帰るよりファミリーで帰ろつぜ。」
直江も言い返す。

「ファミリー？……」

「まあ昔からの遊び仲間のようなもんよ。」一子が説明してきた。
なんだよ……

『ファミリー』って聞いて真っ先に出てきたのがマフィアのヤクザで言つ『組』

って言う方のニュアンスだった。俺ももう大概やばいな……

「隣同士、気まずいままじゃ居心地悪いし、今日は空裂君と帰るわ。いいでしょ？」

空裂君？」

「あ……ああ。」断る理由も無いのでとりあえず一緒に校舎を出て、道を歩く。

ちなみに教室を出る時に

「あんなわけ分かんねえ奴と一子を近づけて大丈夫か？」とか

「ああ、まあどうせ一子も聞きやしねーんだしな。……でもそれで一子に

なんかあつたら俺は迷わずあいつをぶん殴る。」

つてな声が聞こえた。

「おお、大和、殺気が……」とか奴のダチであろう筋肉男が言
つてたが

俺としては「はあ？誰に向かって言ってるんだア？（笑）」って感じ
だ。

二人で学校から一緒に帰る。ああ、なんかこんな日常っていいなあ。
……そんなことを考えながら歩いていた俺。しかし……

(……気まずい。)

うん。メツチャ気まずい。どーしよ……

「えつとね……改めまして！川神一子だよ！明日からもよろしく
ね！」

あ、『一子』って呼んでね……！」

なして自己紹介？……こいつも案外テンパっているんだろーか。

「じゃあこっちも改めて、空裂零斗だ。『空裂』でも『零斗』でも好きに呼んでくれ。」
ただし殺しの二つ名はダメ、ゼツタイ。

なんやかんやで地味に話をする。ってか人とかうやって話すの久しぶりー(、。、)。

と、その時。

「ねえ、ずっと気になってたんだけど、その超ゴツイアタッシュケースは何?」

「!!!!」「やべー!

「見るな触るな触れるな話を出すな。これはパンドラの箱だ。」
嘘はついてないよ?

「わ、分かったわ・・・誰にでも知られたくないことのーつや二つあるもんね・・・」
・・・俺の場合ーつや二つどころじゃねーけどな・・・

「悪い。でもこれはどーしても言えん。」
言ったらもう俺の学校生活は終わる。オワタ的な意味で。
もしバレたら誰も寄り付かなくなるだろーな。

・・・隣で笑ってるこいつでさえも・・・

「・・・零斗、どうしたの?」「あ、顔に出てたか。

「い、いや、なんでもない。」慌てて答える。そこで会話は途絶え、沈黙が場を支配する。

そこで俺はずっと気になっていたことを聞いてみた。

「なあ、何であの時俺に声をかけた？俺の事はまったく知らなかったろ？」

すると、川神・・・いや、一子はクスツと笑い、

「だってさ・・・零斗・・・一人で寂しそうだったんだもん！」

「!!!」・・・驚いた。初対面だったのに・・・

「そんなにか？」

「うん。俗に言う『ボツチ』ってやつね。」

「・・・」

事実だ、事実である。俺は確かにずっと『ボツチ』だった。でも、そのことを指摘してくれた奴はコイツが始めてだ。

俺はそのことにちょっと嬉しい気持ちになる。

と、その時。

「~~~~~!!!」
ポケットに忍ばせていたケータイが振動を伝える。「!!!」

「あ、どしたの？メール??」川神が聞いてくる。本来ケータイや不要物は持ち込み

NOなのだがFクラスにそんなルールを守ってるやつはいない……
だろ。

メールを開く。と、そこには……

空裂零斗に 教の武装派テロリスト集団『××・×××』のり
ーダー、

『……』の殺害を依頼する。報酬は百十五万。

現在この川崎市に潜伏中……

やっぱりだった。『依頼』だった。その後には標的の顔写真と現在の
潜伏予想場所、

その他もろもろがびっしりと書き込んであった。依頼人は

『裏』の日本治安維持組織（裏ギルド）からだ。

一件穏やかに見えるこの国にも『裏』がある。ここなんか代表例か。

「名指しかよ……有名なこと……」思わず呟く。

「零斗??」不思議そうに一子が聞いてくる。

「っと!わりい。ちょっと用事が出来た。先に帰らしてくれ。」

「……分かったわ。じゃあまた明日ね!」
ちよっと残念そうな一子。スマン。

だが、こっからは一般人は立ち入り禁止。

『裏』での戦いだ。無論こいつに危険を負わせるなんて考えたくも無い。

こうして俺は『裏』の世界へと今日も駆けてゆく。

～一子side～

今日は思い切って一緒に帰ろうと零斗を誘ってみた。ファミリーの邪魔が入ったけれど、

零斗は『構わない』と言ってくれた。なんだか妙に嬉しかった。

帰る途中には、結構話が出来た。思ったより零斗はよく喋った。

アタツシユケースに触ろうとしたら怒られちゃったけど……

そしてさりげなく自己紹介をして、な、名前を呼んで欲しいと言ってみたノノノ

驚くほどあっさり承諾してくれた。その後もいろいろと喋りながら帰っていたが

ふいに零斗のケータイがなった。そして

零斗の表情が変わった。表情の無い、冷たい顔に。

「っと！わりい。ちょっと用事が出来た。先に帰らしてくれ。」零斗が突然言ってきた。

・・・表情を消した顔のまま。

「・・・分かったわ。じゃあまた明日ね!!」

なんとかさそういったものの、私の心は心配でいっぱいだった。

零斗の背中が薄暗闇の中に消えていく。私はそれを、言いよつの無い不安感を抱きながら見つめていたのだった・・・

side out

俺は今、標的の位置から五キロの位置に『Lクロ』を構えている。

標的の場所はメールに書いてあった位置と自分の推理で割り出した。

窓際にいる標的そっくり、と言うか本人の頭に照準をあわせ、
レティクル

一気にトリガーを引く。(バシュン！) 風によるブレも全て計算
しつくされた弾丸は

一寸の狂いも無く、標的の頭を射抜いた。

「標的の死亡を確認。ミッションコンプリート。」そう呟き、『い
つものように』

Ｌクロを収め、後始末をする

まただ。また殺した。いつまで殺ればいいんだ。

一刻も早くこんなことはやめないと。

いったん家に帰ったとき、電話でじいちゃんから「もう『裏ギルド』
以外の依頼は
受けるな。」と言われて少しは前進したか、と感じた。

『裏ギルド』からの依頼は基本治安維持目的だからな。

殺るのは必然的に死刑級かつ国際級の犯罪者に絞られるが……

でもまだだ。俺は『人殺し』をしたくないんだ。

絶対変えてやる、俺の人生を。

そう呟き、俺は陣取っていた廃ビルを後にし、

一人真夜中の闇に溶けていった……

第二話 「『表』と『裏』」 (後書き)

どつでしたか？零斗は少しは人を殺さなくて良くなったようですね。

次回からは川神大戦かな〜とか思ってます。

時間軸わやですが……では〜。

第三話 「開戦！」（前書き）

ども！始まりました川神大戦！！

はっきりいって主人公がどこまでチートかを

見せる目的もありますので頑張って書きたいです！

ではどじろー！

第三話 「開戦！」

一週間後、いや六日後、丹沢山地

さて、ついにこの日が来た。

ちなみにこの六日はほとんど登校しなかった。何か『裏ギルド』とかの

登録に時間がかかった。

どうやらあの日の依頼はランクを決めるテスト的なもんだっらしい。

人名使って技量テストなあ・・・まったく反吐が出るぜ。

結果は『ランクEX』。

・・・そりゃ通常の射程の五倍の距離から撃ち抜けりゃ当然ってもんか。

つてか『EX』は俺一人しかいないらしい。

裏ギルドの事務所（川神支部。場所は教えん。）に行ったら

そりゃあ喜ばれた（そして恐れられた）・・・ぜんぜん嬉しくねえよッ！！

でもこれで暗殺依頼は相当少なくなるな。ランク相当の依頼が来るようだから

依頼件数は激減間違いなし！また一步前進したな！！

ちなみに『気の無い返事をする俺。』とか言いつつ実際この戦いを
すげえ楽しみにしてた俺がいた……いや、いる。

だつてさ！正面切つて闘えるんだぜ！？

いっつも遠くとか死角から一撃必殺で殺つてたからさあ！！
狙撃とかけっこう空しいし！

しかもレプリカなら武器（暗具）OKと来たもんだ。最高じゃん。
俺の愛用の武器で『接近して』、『殺さずに』闘えるんだ！……
ここ重要。

え？愛用の武器が何かって？

Lクロ？違うわ。つまらんだろが。

拳銃？承認されんわWWW

刀？違う。小太刀も違う。だいたい小太刀とか刀は暗具じゃねえ。

まあ使うときに分かるさWWW……そこ！『えー！』とか言う
な！！

テンションがおかしい。人を殺すのは大嫌いだが純粋な戦闘は結構
いや、大好きです。

これが『刷り込み効果』つてやつですか？……

俺の前で隊が編成されていく。っと！希望を聞いてもらえるのか。

「おい。俺は一人で行かせてくれ。」 たつての希望を言ってみる。

「はあ！？死ぬただぞ！」 「何言ってるの零斗！いっしょに行こうよ！」

直江と一子が即座に反論してくる。

「希望聞くなって言ったじゃん！ガ
ン！！」

「……あ、聞くだけか？そうゆうオチなのか！？」

「わあーつたよ……じゃあ先陣で、いや先々陣で。」

「ねーよそんなもん！」……はあい……」

「すごすごと所定の陣形を取る。俺は先陣だ……ゆっくり行く。疲れるし。」

その時。「ダウン！バン！バン！！」ゲーム開始の信号弾が空に上がった。

ゲーム開始だ。

「「「「「うおおおおおー!!」「「「「「「え?」

「ほら!零斗もいくよ!」「……………待て待て待て待て待て待て待て!

え、こいつら馬鹿なの!?

「アホか。今から走ってついたら交戦するときにはもうへとへとだったの。」

ぶつかるとまでは最小の力でいく。ぶつかった時に本気を出せるよーにな。」

「「「「「た、確かに!!」「「「「「

一子に言ったはずの言葉に先陣の全員が(。 ;)みたいな顔で固まった。

「……………さすが零斗ね!」「見直したぜ!」「今まで変な目で見てスマンかった!」

そして何故か好感度が上がった……………おい。大丈夫なんかお前ら……………

後最後のやつ、どつゆつことだ?ああん!?

「はあ……じゃあ競歩ぐらいのペースで行こうぜ。」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

こうして俺は何故か皆の好感度と士気を上げ、敵陣に向かうのだった。

「しばらくして」

「見えたぞ！！突っ込め！！」 先頭で進んでいた一人が声を上げた。

見ればかなりの大部隊がこっちに歩いて、いや、走ってきていた。

こちらも一気に走り出し、あっという間に交戦状態となった。

「じゃあさ、一緒に行こうよ零斗！！」一子が話しかけてきた。

「おう、でも俺は走らない。手柄に焦ってる奴はたいてい死亡フラグを立てるからな。」

「……………分かったわ。一緒に歩いていく。でも……………零斗……………」
「ん？何だ？」

「死なないでね。」

一子に見事に言い放たれた。

・・・ちょ！それっでもろに死亡フラグじゃね！？

「・・・さあな。」と、口では言っておく。

それに・・・これは所詮『ゲーム』だ。実際に命をやり取りをしているわけじゃない。

明らかに緊張感が無い。『裏』だったらあつという間に全滅だな・・・
．．．
とか思っている間に俺の所にSクラスの一人が木刀を振りかぶり、
迫ってきた。

・・・甘い。

『ドスン！！』

木刀が振り下ろされる前に拳を鳩尾にねじ込む。ノーモーションで。
基本暗殺用の体術は一撃必殺。ノーモーションからの一撃で決める。

「さーて、かかってくる奴は誰だ？」

アブナイ笑みを浮かべながら混沌の戦場の中をゆっくりと、散歩で

もするかのように
相手の本陣へと向かう。

『はあっ！』『せえい！！』『おりゃあっ！』

三人の生徒が三方向から突っ込んでくる。・・・が、俺から一定の範囲内に入った瞬間

『ドサア・・・』と倒れていく。

「はあああああっ！！」 声が聞こえたのでふと見ると一子が薙刀で一気に二、三人を吹き飛ばしている。・・・www・そんな大振りじゃもたねーぞオー！！

二十分ぐらい経っただろうか。徐々にこちらが押されてきた。こちらの士気は十分だがあちらは数が半端ではない。次から次へと増援がくる・・・ちょっと多すぎね？

クラスメイトを見ると、数は半分ほどになり、誰もが疲れきっている。

・・・限界か。

「はあ……はあ……数が多すぎるっ!!これじゃいつかやられちゃうよお〜。」
一子も肩で息をしているな。

「皆、一旦撤退しろ!!」 Fクラスの『源 忠勝』だったな……
が叫ぶと同時に
皆蜘蛛の子を散らすように撤退していく。いい選択だ。

……さーて、本番はこっからだな(ニヤツ)
ポケットに手を突っ込み、迫ってくる大舞台の前に立つ。

「!零斗!撤退よ!!」一子が言ってくる。が、
……はあ?こっから楽しくなるんだろーが!

「お前は撤退してる。俺は進む。」「む、無理よ!!一人で!!」

「無理じゃない。」即座に言い放つ、と一子は

「む~~~~~~~~!!だったら私もいくわよ~~~~!!」

ちょっと迷った後でこっちについてくることを選んだ。

そんな一子を見て、理由は分からないがなんだかちょっと嬉しくな

った。

「ふふ………だったらお前の背中ぐらいは守ってやんよ。」
俺が言つと

「!!!／／零斗……零斗が笑ったあ！」 はい？

気づいてなかったがいつの間にか俺は微笑んでいたらしい……
つと！

「さて、話はこんぐらいにしよう。どこまでいけるかやってみよう
じゃんか。」

「うんっ！」満面の……なぜかすごくいい笑顔で頷く一子と

「さーて、いくぜえー！（黒笑）」またなかなかアブナイ笑みを
浮かべる俺。

目の前には大部隊、対してこっちは二人、はたから見れば絶望的な
闘いが
幕を開けた。

く一子sideく

今日の零斗はなんだかとても機嫌がよさそうだった。
ぜんぜん学校に来なかったから心配してたけど別に体調も悪いわけ
ではなさそう。

体操服を忘れてなお機嫌がよさそう。なにかいいことがあったのか
な？

隊列を組む時、思い切って「一緒に行こうよ！」と言ってみた。・
・と

零斗に（）。こんな顔をされた。なによ、そんなに私と行き
たくないの！？

ちよつとシヨックだった。そして大戦は始まり、先陣の零斗の提案・
・と言つか指示で
私達は歩いて進軍した。

そして乱戦状態になり私は思いつきり力を振るった。

薙刀を振り回しながらふと零斗の方を見ると、敵の一人がちょうど
木刀を零斗に
振り下ろそうとしていた。零斗は手足の力を抜き、だらりとした格
好で歩いていた。

「ッ！！！」声すら上がらない、そんな手遅れともいえるタイミン
グ。

でも、気づいた時には相手の鳩尾に零斗の拳がめり込んでいた。

……見えなかった。特に構えもモーションも無いのに食らった相手は一瞬で意識を刈り取られたようだった。

……強い。

しかもたぶん、ううん。確実に零斗は手を抜いている。完全に未知数の技量。

……知りたい。零斗の全力を知りたい。そう思った。

しばらくすると、こっちが数のせいでかなり押されてきた。自分もかなり疲れた。

「皆、一旦撤退しろ!!」　ゲンさんが叫ぶ。それを聞き、皆がわらわらと撤退していく。

そんな中、零斗だけは一步も退いていなかった。

「零斗！撤退よ!!」　そう叫ぶ。でも、

「お前は撤退してる。俺は進む。」　零斗は全く動じなかった。だけどー!

「む、無理よ!!!一人で!」一人で行ったらいくら実力があっても戦死は免れない。

姉さま級の実力者で無い限り。零斗が死ぬのは絶対にやだ。なのに、なのに。

「無理じゃない。」零斗は即座に言い放ってくる。もう、全く聞かないんだから!!

「む~~~~~!!だったら私もいくわよ!!」

迷った拳句零斗についてくることにした。

すると……

「ふふ……. だったらお前の背中ぐらいは守ってやんよ。」

零斗が笑った。とても優しい微笑を浮かべている。零斗のこんな顔、始めて見た……

他人の前では絶対に出さなかった笑顔、それを自分に向けてくれたと思うと、

とても嬉しくなった。と同時に零斗の「守ってやんよ」というセリフにちよつと
どきどきしてしまった。

「さて、話はこんなふうにしてしよう。どこまでいけるかやってみよう
じゃないか。」

自信満々に言う零斗。はっきりいって無謀だ。でも、

・・・零斗と一緒に出来るかもしれない。

そう感じ、私は・・・

「うんっ！」と満面の笑みを返すのだった。

第三話 「開戦！」（後書き）

どうでしたか？まだまだ零斗君は本気を出してません。

武器も何か分かりませんし・・・

・・・次回にご期待を！・・・ねむ・・・

でふぁでふぁ・・・zzz・・・

第四話「大戦中盤 打ち解ける心」(前書き)

どもども！作者です。

今回は零斗君がクラスの輪に入る話です。

ちょっと不自然なところもありますがそこは暖かい目で見ていただきたい……(m|m)

ではござ。

第四話「大戦中盤 打ち解ける心」

「はああっ!!」

「ふっ!!」

俺達は今、敵の増援部隊のど真ん中に居た。三百六十度敵である。否、的である。

ふははは!! 武道を少しかじった位で俺にかなうと思うてか!!

「おい一子、そろそろ疲れたんじゃねーか？」

「……………まだまだ! はあああ!!」 一子が叫ぶ。
……………それじゃ疲れてるのが丸分かりだぜ? ……

ちなみに俺は息すら上がっていない。暗殺術ってのはいかに最小の力で効率よく

ダメージを与えられるか、だからな。

実際今までの敵は全て首か鳩尾にキめてますから。

そうこうしているうちにあたりの敵は皆、屍(偽)へと変貌した。
おお、一子も頑張ったな。

ちなみに現在の位置は半分よりちょこっと相手陣よりだと思つ。

「さつとと。休憩だな。」

「は〜・・・めちゃうちゃハードねこれ・・・」　一子がぼやく。

「いいのか？今ならいつでも退けるぜ？」　ちよつとからかってみる。

「・・・やだ。私もどこまでやれるか試したいし。」

「よし、その意気だ。」・・・お、次が来たか。

向こうからSクラスの新手が来た。数は・・・まあまあ居るな・・・

・・・つと、今回は武将（的な奴）が居るんだな。

相手軍が近づいて来た。・・・運ばせてないで歩けよ・・・戦争だぞ？？

しかもなんだあの、んー、派手な浴衣的なのは・・・ここは祭りかつつーの。

・・・舐めてんの？え？舐めてんの？

「・・・ん？・・・敵・・・ふん！二名だけか。構わん！蹴散らして進め！！」

「で、ですが心様・・・奴らはここまで二人だけで進んできたようですが・・・」

「構わぬ。我が負けるなど絶対にありえぬのじゃ！！」

「ここからは行かせないんだからっ！」　一子が薙刀を構える。

「ふん、庶民ごときが我に勝てるとても思っているのか！」
「やな奴だな心様とやら・・・」

「勝てる！いつぱい努力してきたもん！（それに・・・零斗も居るし・・・）」

「??最後の方が急に小さくなったな・・・」

「は、何を言い出すかと思えば。努力？そんなものしたところで高貴なる我に

勝てるはずが無かろう！！」 明らかに人を見下した表情。それを見て俺は・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（プツッ！）とまではいかないが半切れ状態に進化した。

「なっ！だったら見せてやろうじゃない！」 一子が走り出そうとしたが、

「待ってくれ。ここは俺一人にやらせてくれないか。」 それを片手で一子を制する。

「！！だって！」 「いいから。遠くで見てろ。」 そう言い残し、俺は

両の手をポケットに突っ込んだまま敵の軍勢の中に歩みを進めた。

「ふん。一人で来てなんになるのじゃ（笑）、かかれい！！」

一気に全軍で襲い掛かって来る。

だが。

「バタバタバタッ！」 最初に襲い掛かってきた五人は一瞬の後に全員地に倒れ伏した。心様があっけに取られてやがる・・・あ、一子もだった・・・

全員の首筋にはレプリカの刺し傷（まあすぐに無くなるだろう）。
・・・そう。ここに来て俺は自分の武器を使った。

ポッケから抜かれた俺の右手にはキラリと光るものが。

それは・・・全長十五センチかそこらの『矢』だった。

・・・『打ち根』。投げずに使う刺突用の矢で『世界最小の短槍』と呼ばれる代物。そして俺の愛用の武器。

切れないが刺し味は度を越えて鋭く、最小の動作で敵を死に至らしめる暗具である。

・・・これはレプリカだが。

そのままゆっくり心様の前まで歩いてゆく。俺の通った道のりをなぞるかのようにな
バタバタと人が倒れていく。

すれ違い様に一刺。返す刀（？）で反対の敵を一刺。

戦力の半分ほどを殺った時にはもう半分の生徒も『恐怖』から完全に沈黙していた。

とうとう静まり返る戦場。

その中を俺はゆっくりと、『心様』の元へと歩いてゆく。

「ひいいい……来るな！」 顔を真っ青にしておびえる心様。そしてそんな心様に俺は告げた。

「おい……死にたくなければ一子に謝れ。」

「!~~~~~(ギンツ!!)(ごめんなさいごめんなさいごめんなさい~~~~!!」
心外そうにしていたので一睨み聞かせてやると素直に謝った。最初からそうしろ。

「そしたらさっさと行けよ……行けよッ!!」 叫ぶ。

「ヒッ!……撤退じゃ!急がなか!!」 怒鳴り散らして心様は退場して言った。

「……」 俺が誰も居なくなった戦場で沈黙していると、

「……あ、ありがとね零斗。こんな私のために怒ってくれて……」

「一子が何やらぐいぐいによじよじよじと言ってきた。

「まあ気にすんな。」そう軽く言ってから、

「それに・・・俺も努力してんだ。」と続ける。

「！！・・・そうだよな。努力を否定されるのは嫌だもんね・・・」

「・・・二人して黙ってしまおう。いかん、気まずいぞ・・・」

と、・・・???おかしいな・・・前方に敵の本陣が見えるぞ???

「・・・疲れてんのかな、俺・・・」そう呟くと、

「違うわよ!!」一子、ナイス突っ込み。分かっていますって。

「チツ・・・まさかここまで来てたのか・・・!弓兵まで揃えてやがる。」
「つてか・・・届くぞこりゃ・・・」

「弓兵、前へ!!」

そう思っていると弓兵を仕切っている軍人（？）的な奴が指示を出した。

刹那、空に一斉に放たれた矢がこちらに飛んできた。正直二人に対してこの矢の量は無いと思います。ハイ。

「でえやあああああああ！！」一子が薙刀で矢を弾き飛ばす。俺はというと・・・

「よっ！ほっほっ！っとお！」

矢と矢の隙間に入り、足さばきで矢をかわしていた。

基本俺は『受け止める』ってことをしないからな。その方が速いし・・・だけどこのままじゃジリ貧になっちまうな・・・そう思っているよ、

相手の弓兵が急に全員倒れた。矢の飛んできた方向を見ると・・・岩の上に一人の少女が立っていた。・・・椎名京だったな。

「京！！」一子が叫ぶ。

「っ！！狙撃主を狙え！」 矢が椎名に向かって放たれるが無論そんな距離では届きやしない。

「そんな弓じゃ届かないよ?」

そついい、椎名は弓を放つ。弓は着弾(?)すると同時に爆風で残った弓兵を一掃した。

……あれ?矢で爆風っておかしくね??

「私のは狙撃用の弓だから何でも射抜くよ!……いつかきつと大和のハートも……(照)」

……ツツコミどころが多すぎる……とりあえず一つ言っておくと

それは『射抜く』って言いません!見ろ!黒煙上がってんぞ!?

「京だけじゃねえぞお!」

声がかげられた。振り返ると……大量の自軍がこっちに押し寄せてきていた。

……そーだ。ほとんど戦力使ってねーじゃん。

「いやあ……まさか生きてたなんてなあ。ゲンさんが『あの二

「出陣したら戦死をもうとわぬ精神……まさに武士だな……」

「いや。戻るのがたいぎかったんだって……」

『クリステイアーネ』や風間、筋肉男……否、島津達や

Fクラスの奴らが次々に劣ってくれる。そして……

「全く、こつちの戦略をぶち壊しやがって……」 直江もなんか
言っています。

「……まあ結果オーライって事で……（汗）」
反省はしてない。

「そうだな……お前が居なかったらこの戦、勝てなかったかも
しれないからな……」

そう言い、直江は続けて、

「……いままで変な目で見てすまなかった、許してくれ。後、
これからはよろしくな！」

そついい、手を差し出してきた。周りを見ると、皆頷いたり口笛を

鳴らしたり

拍手をしたりしている。……この全員を代表してって事か。

……やった！やったぜ！これで晴れてクラスの一員って事だな！？

「……おっツー！」　そっいい、俺は直江の手をがっちりつかんだ。

「オオオオオオオオオオオオ！！！！」　歓声上がる。それは……

俺がこのクラスに『認められた』瞬間だった。

第四話「大戦中盤 打ち解ける心」（後書き）

はい、キモイぐらいのチートですね……

でも次回ではさらに化け物化すると思いますので……

口調とかが不自然に思える人が居たらごめんなさい……

良かったですね零斗君！残るは殺しをやめるだけです！！

……たぶん……

あ、『打ち根』は禁書をパクってます……

分かるかな……

では次回もお楽しみに〜

第五話「戦争終結と『延長戦』の開始」(前書き)

こんばんわ、作者です。

今回で川神大戦は終結ですが、実は延長戦が次回に残ってます。

零斗君が化け物になるのは次回です

まあではござ。

『天真爛漫』がピツタリくるような邪気の無い笑顔。

………結構ガチでドキツと来た。

「さ、さて！これで終わりだな！」 若干赤くなった顔を隠すように言う。

そうこうしている間にも敵の人数はどんどん減っていく。

これで本当に終わった……誰もがそう思っていたとき。

「ズガガガガガガアアン！！」 「！！！！」 なんだッ！？

突如、自軍の中に誰かが『切り込んで』来た。その周りの自軍はあっという間に壊滅している。！！？？

土ぼこりが晴れる……その先に居たのは……

「そろそろわたしの出番かと思ってなあ！！」

……誰だっけ……！！！！そうか！新聞で見たことあった！！

『川神百代』、圧倒的な戦闘力を誇る川神院の跡取りで『世界最強の武人』
とも言われる存在。

「…………ラスボスご登場ってか？…………いや、裏ボスか。」

「姉さま」「な、なんでモモ先輩が敵に…………！」一子や島津が
声を上げる

「決まっているだろう。こっちに付いた方が楽しめそうだったから
だ！！」

「…………面白いなこの人…………」

「楽しませてもらうぞ、愛しい仲間達！！」…………と、

「ああ、面白いな！姉さん？」直江が声を上げた。

「ほう？総大将を連れてくるとは、降参するつもりか。」

「いや、この戦、負けるのは姉さんだ。」

もう一度言う。負けるのは姉さんだ。」

「……………この私を怒らせたなあ？大和……………」

……………切れやすいな、オイ。

「モモ先輩、お相手いたします。」 「ほう、いい闘気だ、まゆまゆ。だが、お前一人では止められんぞ？」

「はい……………かもしれません……………しかし！！」 『まゆまゆ（本名しらね）』が言いきった直後、上からまた『ラスボス』的な『気』を持った人が降りてきた。

「この気は！！」 『先輩』でいいや……………が飛びのいた時、軍用ヘリから

人が『着弾（？）』し、回りの奴らが薙ぎ倒された。そして、

「ハツハツハツ！！九鬼揚羽、降臨であるっ！！」 おお、九鬼財閥の人か。

「や、ややっ！！姉上！！」 敵の総大将が叫ぶ。ああ、あいつもだつたか。

つてかなんで九鬼家は額に×なんだろうーか。そして言葉遣い古くね……………？……………？……………

「！！・・・九鬼財閥の九鬼揚羽を動かすとは。」

「これくらいの策が無いと姉さんを止められないからね。」

直江・・・すまん・・・全部計算してたんだ・・・

何気に罪悪感を覚える俺・・・

「だが私はその策すら打ち砕く！！」　　すげーな。

「お前のその鼻っ柱を折ってやる！！」

そしてもちろん俺も入るっ！！やっと本気で闘えそーだ！！

「そいつは・・・楽しみだっ！！」　　三人が空へと飛び上がる。

「ちよい待ち！！」　　俺はそんな三人の間に割って入った。

「！！！！」

牽制の蹴りを先輩（達）に放ち、いったん全員が降り立ったのを見て、

「Fクラス、空裂零斗も参戦するぜえ！！」

高らかに宣言する。

「ほう?・・・私に挑んでくるという事はそれなりに腕に自信があるのだな?

・・・いいだろう。全員まとめてかかって来いッ!」

・・・ほお?・・・

「じゃ、遠慮なく!!いくぜえええ!!」

『まゆまゆ』も『揚羽』さんとやらもいったん俺の実力を見てくれるらしい。

刹那、『表』の最強と『裏』の最強がぶつかり合った。

「たあらららららららあ!!--」

先輩が拳の連打を放ってくる。そのスピードはおそらく常人には捕らえきれないだろう。

しかし、俺はそれらを全てかわす。

こちらら銃弾見ながら生活してんだよッ!!

お互いいったん距離を取る。その距離を埋めるかのように『まゆまゆ』……

いや、『黛由紀江』というらしい……が刀を振るうが……

「見切ったっ！（はしっ）」先輩は二本指で真剣を受け止めた。

「そんな！所見で十二斬全てを！！」まずい、その隙はっ！！

「とりゃあっ！！」「きゃあっ！」わき腹にカウンターのハイキックを食らい

俺の近くに転がってきた。……今のコイツでは勝てん。そう判断した俺は。

「今のはきいたろ。ちよつと休んでな。」そういい、前に出る。聞こえたとは思うが

言葉を返せないだろう。それほどに威力があるのだ。

今は揚羽さんが闘っている。が時間がたつにつれ、徐々に押されてきた。

「ッチー！！」そう吐き捨て、俺も突っ込んでいく。あ、ちよつど揚羽さんが

吹っ飛ばされたところだ。

「たらあつ!!」 一気に懐に入り、一撃を見舞つ。
わざと遅めに。

「遅いつ!!」 カウンターのパンチが放たれる。が、俺はそれを狙ってたんだよ!!

「ところがぎつちゅん!!」 某アニメのようなセリフを放ち、
カウンターにカウンターを食らわせる。

「くうっ!!」 俺の拳をまともに食らい、後退する。そして俺の後ろにはまだ二人控えている!

「!!...ふっ...甘い!!」 しかし、それを見越した先輩は俺を素通りし、

「なっ!!」と驚いて一瞬反応が遅れた二人の腕をつかみ...

「もう覚えた!!左腕、川神流『炙り肉』、右腕、川神流『雪達磨』。

これで終わりだーッ!!」

「...まずい、アレを食らったら多分アウトだぞ!!ッ!追いつかない!!」

と、その時。「はあ!!」「!!ふっふっ!!」 おお、また乱入者だ。

「お前は!?!」

「東に強い武士娘が居るって聞いてね!」・・・いや、答えになつてねーし。

「あれは・・・四天王最後の一人・・・」　おお、そういうことなのか。

「松永燕、デビュー!?!」　そういつて二人は空中戦を始めた。

・・・そこ俺のポジション!?!

「・・・でもお!?!」　おお、『松永』さんが先輩を殴り飛ばした。

「そおりゃあ!?!」　そのまま追い打ちをかけようとするも、

「ツ!川神流、『星鳥』!?!」　「!?!」

失敗し、地面に降りる。

「行きます!」　そう言い残し、今度は復活した黛が先輩に突っ込んで行く。

・・・俺の出番エ・・・) ; ; ; ; ; (

そんなことを呟いていると。「不服そうだな。」揚羽さんに声をかけられた。

「不服だ。もう一人先輩が居ればいいのに。」と返す。

「あれ？君だれ？見ない顔だけど。」「空裂零斗だ。」松永さんにも返しておく。

「あつと、黛がやべえな。行こつと。」「いや、ここは我がゆく。」

「あたしが行かせて貰うよ!!」 はああ!？闘わせるよ!!

「や、ここは俺が・・・」 「いや、我が・・・」 「あたしだつて!・・・」

「おれ・・・」 「我・・・」 「・・・」
・・・埒が明かん。

「じゃいーよ!揚羽さんから行けよ!。。。」 「思わず言つ。

「ふん。当然だ!!」 「・・・じゃー次あたしね!」 「えー!・・・好きにしる・・・」

まあ最後の方が思いつきりやれるか・・・思いつきりね・・・フフフフ・・・

「九鬼雷神国崩拳!!」 「禁じ手、富士碎!!」 揚羽さんと先輩の拳がぶつかる。

「はあっ!」 そこに黛が割り込んだ。・・・え?おk??割り込みおk???

「まゆまゆ、いい感じで邪魔だ!!川神流『致死暮輝』!!」

「!!」先輩の放った気の技を刀で切り裂くが、

「それはフェイクだ!まず一人!」 土煙からの奇襲、そのスピードについて来れず、

「!!・・・かはっ!」 黛脱落。

「また遊ぼうな、まゆまゆ!」・・・いや、俺にも構って下さい!!

と、そこでふとあっちのほうを見ると・・・まずい!!

闘っている一子の後ろで生き残っていた兵が木刀を振りかぶっている!

「!!く、そ・・・ま、にあえええええ!!」

「ボヒュン!!」と音を立て、フルパワーで一子の元に向かう。

くそ！技で防ぐ時間はねえ!!

相手の木刀が振り下ろされる、一子はそこで気づいたが反応できない。

その間に俺は割って入り、肩で木刀を受けて一子を庇う。鈍い痛みが肩を襲った。

「ぐあっ!!」

「零斗!!」

一子が悲鳴のような声を上げる。らしくないな。

「ったく。あぶねー奴だぜ・・・」 そんな泣きそうな顔すんなって・・・

「れ、零斗・・・何で?・・・」 なんてって?・・・そりゃ・・・

「言っただろ?」お前の背中ぐらいは護ってやる『って。』
「ありのままのことを言う。」

「!?!?!?!?!..れ、零斗お~~~~」

「うわっ！どした！？涙目になってんぞ！？」

「！！！！な、なっていないよ／＼／＼！！」 必死に抵抗する一子。

「さつてと、あっちに戻るつ。気をつけるよ一子？」

「うん、あ、あ、．．．ありがとねっ！！」 顔を真っ赤にして言う一子。

その声を背に、俺は先輩の元へと戻っていった。

このとき、一子が真っ赤になってポーっとしていたのを俺は見えていなかった．．．

戻ってみると．．．いつの間にか二人も全員地に倒れ伏していた。

．．．どうしてこうなった！？

「．．．さすがは百代ちゃんだね．．．武神と呼ばれるだけはあるよ．．．」

「じほっ……そうだな……」 とうやら二人とも腹にキ
められたらしい。

「おおお……やっと俺の番だな先輩。」 「ふん……せいぜ
い遊ばせてくれよ?」

「(ムカツ)……ムカツ……じゃ、いくぜええええええ!!
!!」

「来おおおい!!」

一気に先輩にぶつかる……直前で

「ドン!ダアン!!ダアン!!」……ン?信号弾……あ。

「「あ (T T) ……!!」」先輩と俺が拳を寸止め
し、似たような表情になった。

「戦争終結!勝者、Fクラス!!」

「総大将、討ち取ったりい〜」

「「「「「「「「「「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」」

「ちょ、もう戦争は終わったんだ・・・」(黙れッッッ!!!!)(ヒイ!!!!)「」

ぶつぶつ言ってきた直江を黙らせ、

「じゃっ・・・改めていくぜ先輩・・・」 「望む所だ!」

「」 「うおおおおお!!!!」 「」

こうして、生き残った全員が啞然として見ている中、

俺と先輩の『川神大戦 延長戦』が始まったのだった。

第五話「戦争終結と『延長戦』の開始」(後書き)

ハイ。最近どっちかというともう一つの小説よりこっちのほうがメインになってきてる・・・

あ、あと申し送れました！評価を付けてくださった方や

お気に入りに登録してくれた方、本当にありがとございます！
これからも頑張ります。

そうそう、『ハーレムがいい』って意見が来たのですが

基本一子一筋のイチャラブ的なもんにしようと思っております。

そこんとござ承を・・・

まあ二人までならおkかな？・・・今度アンケートをとるかもしれ
ません！！

第六話「延長戦」(前書き)

ども、今回は百代さんとタイムマンです。

そして遂に零斗の本気が？……………

ではおひさし…

第六話「延長戦」

「「「だあああああああ！！」」

俺と先輩の拳が激突する。これでもう四回目ぐらいだ。

本来俺はこんな戦い方はしない。今は完全にストレス発散目的だ。

・・・でももうやめた。こんなやり方じゃ全力だせねえ！

『暗殺術』。

武道とは正反対に位置する『卑怯』、とも取れる体術。

だけど、これが『俺』だ。

・・・それに我流で行かないと・・・勝てる気がしねえ・・・
まあでも逆を言えば我流で行けば勝てる気がする。ってことだ。

「ツチ！先輩やりますね！！」「ふっ・・・お前もな！」そういつて
離れる。

「な、何だアイツ！」「・・・こんなに強かったとは・・・」

「ほお……………」

そんな俺らは周りでもよめきが起こっているの知らない。

ちなみに最後のは学園長だ。今回は見逃してくれるらしい。

「けどここからは俺流で行かせて貰いますよ。」 「面白い。やってみる。」

…………上から目線…………。

「分かりましたよ……………」

そういい、俺は体の力を完全に抜く。はたから見れば脱力しているだけだ。

「…………舐めているのかっ!! はああああ!!」

先輩が突っ込んでくる。神速の拳が俺に襲い掛かるが…………

「……………」

ふらふらと、だが無駄な勢いが一切無い動きで全てかわす。

「……………」 『ドゥン……』

「っぐ!!」 また少し後退する先輩。

「……………!!!」 「皆が驚愕している。そりゃそーか、

常人には『見えない』だろうからな。おそらく先輩の目でもギリギリなんじゃないか？

『威力』よりも『速度』を重視した最速の攻撃。『静』から一瞬だけ最大の力を加える
ことで『見えない』ほどの速度を実現する。

つつつても一般人なら気絶するぐらいの威力はあるんだが……
先輩防御力高エ……

「くっ!!川神流……」 「遅い。」

『ドゴス!』とまた鳩尾に拳が入る。

「技の名前なんかを叫んでるから隙が出来るんですよ?」
大体自分の技を相手に知らせてどうするっての。

「それが『武道』と言うものだろう……」

「すみません。でも俺は武道なんかやってませんよ?『闘って』るだけです。」

それに……この努力の末に手に入れた『我流』には俺は誇りを
持っている。

だからこそそんな俺の『誇り』を人の血で汚したくないんだ。

「！・・・そうだな。おりゃあああ！！」

また先輩が突っ込んでくる。また拳の連打だ。・・・さっきより小刻みになってるな。
警戒してるんだろーか。

「・・・・・・・・・・・そこっ！！」 「！！！」

ほぼ反射的に体をひねり、カウンターを見舞う！・・・いける！

と思っていた。俺が馬鹿だった。

『そこっ！！』と言う声『だけ』にとっさに反応した。いや、してしまっていた。

・・・先輩は『声』だけでまだ攻撃して来てなかったのに。

「！！！！！！！！」後悔してももう遅い。こっちに決定的な隙が出来ていた。

「(ズッドオオオオン!!!)ぐはあっ!!!」

地面と平行に吹っ飛ぶ俺。『気』まで纏ってやがる・・・『川神流』
だな・・・

「貰ったぞ!!!はあああああああ!!!『星鳥』!!!」

有無を言わず真空波みたいな攻撃が俺を襲う。

「ぐああああ!!!」それをまともに受けてまた吹っ飛ぶ俺。

基本俺は『避ける』事しかしない。なので耐久力はスピードなんかと比べて極端に
低い。・・・にしても・・・この人・・・攻撃力・・・高・・・
す・・・ぎ・・・

意識を手放しそうになる。『零斗!!!』一子の悲鳴じみた声が聞こえる。

この人は強い。・・・でも、

勝ちたい。

「そこまで！！勝者、川神……！」

止めをかけようとした学園長が驚いている。この場の全員も。

「……………」

俺は、満身創痍で、立っていた。再び闘志をみなぎらせて。

もう、出し惜しみなんてしない。

「やってくれましたね先輩……なら……ゴホッ！！……こつちも……………」

「全力全開！『フルスロットル』じゃああああああああああああああああああああ……」

「……ぐあああああああああああああああ……！！！」

本気の絶叫、そして。

「ゴバアアアアアアアアアアン!!!!」

「!!!!」

隠してきた『気』を一気に解き放つ。圧倒的な『気』の奔流は俺を中心に、

紅蓮の台風のように渦巻いている。

これが、俺が『裏』の最強である所以、『気』の総量だ。

それを俺は

(圧縮圧縮ウ!!!!体に圧縮ウ!!!!)……………某超能力者のようなセリフを吐きながら、

体……………ほとんど手足に『気』を全て圧縮していく、するど。

「ボツ！」と、

俺の周りの気がなくなると同時に、手足に『火がついた』。

音もなく手足が燃えている。無論熱くは無いが。さらに、

『れ、零斗！どうしたのその目！』

俺の右目に、光が灯っていた。比喻ではなく、右目だけに本当に灯っているのだ。

表すなら『モンハン』のナルガクルガの怒り状態の様な目だ。

そして、俺の髪にも変化が起きた。右のこめかみに僅かに生えていた『ドス赤い』髪が

左のこめかみを除く頭の全てを染めていた。どうやら『これら』は生まれつきの

『才能』らしいんだが。

そして俺は先輩に告げる。

「さて、行くぜ先輩。」と同時に行動を開始する。

「ゴバツ!!」 俺の足元の土が破裂した。と同時に俺はもう先輩の懐に居た。

「何!?」 驚く先輩の腹に一撃を入れる。

「(ズドオオン!!!) かはっ!」 吹っ飛ぶ先輩、先輩が地面に落ちる前に

追い討ちを食らわせる。

「(ズドドドドドドドドッ!!!) ~~~~~!!!」

声も出せない先輩。完全に一方的な展開になっていた。手に纏った『気』の助けで

威力も速さも跳ね上がっている。

「……………これで……………終わりだああアアアッ!!!」

思いつきり体重を乗せ、『殺し』の一撃を放つ。

「グシャッ!!」　　なんだかやばい音がして拳が先輩の腹にめり込む。が、

「（ぐにぐに・・・）　　???」　　感触がおかしい。と、先輩が口を開いた。

「こほっ・・・川神流、『人間爆弾』!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!っ!まにあえッ!!!!」

「ズ、ドオオオオオオオン!!!」

爆音が、辺りに響き渡った。

第六話「延長戦」(後書き)

はい、零斗君の本気は『化け物』でした。

まあ努力の賜物なんですけどね……

次回は決着編です!!あ、後アンケートも近いうちにやるかも!!

第七話「決着」(前書き)

はい、遂に決着編です！

零斗君の化け物度がパネエ・・・

ではごっご。

近くでありえない量の気を感じた。

煙が晴れても零斗は居ない。

「居ない!!……上かつ!!『星鳥』!!」

『ゴオツ!!』 波動が斬る………空気を。

「上でもない!?!」 百代が思わず叫んだ。刹那、

『ゴボン!!!!』

百代の『足元』が爆発した。

「!!」

一瞬後、すぐ目の前に、零斗の顔があった。

獰猛な笑みをその目に浮かべ、赤黒い髪と右目には紅蓮の光を灯し。

そして。

『ゴボン！！』

先輩の足元が爆発する。

そう、今まで俺が居たのは『土中』。

ウチのオリジナルの回避術だ。ほんとにはやりたくなかったが咄嗟にとってしまったものはしょうがない。・・・なんでやりたくないかって？

・・・見る、制服が土まみれじゃねーか！！

「！！下！！？」

完全に反応が遅れる百代。

もらった！！

「空裂流、『零式』奥義！ 『気突・蝕』！！！！」

空裂流の『零式』……俺が手の加えたオリジナルの奥義。『零斗式』って意味だ。

「とすつ」 と先輩の鳩尾に拳を当てる。『気』で燃え盛る拳を。

そこから一気に自分の『気』を先輩に流し込む。

そして、それで相手の『気』をぐちゃぐちゃにかき乱す……！！

『気』とは精神力の一種だ。それをかき乱してしまえばどうなるか。

良くて気絶は免れない。最悪植物人間だ。そんなことしねーけどな。

「（スオオオオ……）くふっ……がはっ……（ガク！）」

苦しそうに膝を着く先輩。

だが、この技の真の怖さはここではない。

「足止め」。それこそがこの奥義の目的。『奥義』で決めるのではなく、

『奥義』から地味かつ一撃必殺の技に繋ぐ。それこそが『零式』。

俺はそのまま先輩に向かって歩き、ポケットから『打ち根』を取り出す。

『キユガツ!!』 一気に踏み込み、首筋に突き立てる。

この動作が行われたのは僅か、1秒。

「ぐっは!.....(バタツ)」 気絶した先輩が地に伏す。.....
..やった..

『フツ.....』 『気』を解除する。

髪の毛の赤黒い部分が戻っていき、手足の炎が消える。そして、

『.....バタツ!.....』

目の光が消えると同時に、先輩の傍に倒れこんだ。『気』の助けがなければ立っていられない。

いほどに俺は消耗していた。

『姉さん!!..』

『零斗!!..零斗ッ!!..』

口々に声が聞こえる……その声を遠くに聞きながら俺は意識を手放した。

～子side～

必死に私は敵を薙ぎ払う。このままなら勝てる！姉さんも零斗達が止めてくれてるし。

……たかをくくっていた。油断していた……

後ろを見るともう敵が木刀を振りかぶっていた。間に合わない！

思わず目をつぶってしまった。でも、

『ドスッ！……グッ！』そんな零斗の声が聞こえたような気がして、

恐る恐る目を開けて、自分の目を疑った。

目の前で、零斗が木刀を肩でとめていた。

私を庇って、私のせいで……………。

「零斗っ!!」思わず叫ぶ。

「ったく…………あぶねーやつだぜ…………」 零斗が微笑む。

「れ、零斗…………なんで?…………」 思わず聞いてしまう。…………こんな、私なんかのために!

零斗は優しい、だから慰めてくれると思っていた。でも、零斗の言葉は私の予想を遥かに超えていた。

「言ったる?」お前の背中ぐらいは護ってやる『って。」「

「!!…………あ…………」 確かに零斗は言っていた。少し前にかけてくれた言葉。

…………覚えてくれてたんだ…………

『トクン…………』と心臓の鼓動が速くなった。

それは運動した後の『疲れ』とは似ても似つかない感覚。でもとても…………暖かくて…………心地よい感覚だった。

「うわっ！どした！？涙目になってんぞ！？」零斗が驚いたような声を出す。

「な、なんでもないよー！！」それだけ言っのがやっとだった。

「さつとと、あつちに帰ろう。気をつけるよー子？」

「うん、あ、あ、・・・ありがとねっ！！」顔が真っ赤なのが自分でも分かる。

零斗は姉さんの元へと戻っていった。

私もまた敵を倒す。でも今度は、

『後ろで零斗が護ってくれている。』そう思うだけで体が熱くなっ
た。

・・・負ける気は、しなかった。

）大和 side）

「なんだあれは……」 揚羽さんが呆然とした様子で呟く。

今俺達は姉さんと空裂との決闘を見守っている。

「はあ……すごいね……でもあれだけの実力者がなんでも有名にならなかつたんだろう……」

燕さんもあっけにと取られている……

今皆が見ているのは、姉さんと闘っている空裂だが。

「『化け物』……』 岳人が漏らした。

そうだ、奴は今、もう『化け物』級になっていた。

現に姉さんは完全に押されていた。

と言うか圧倒されていた。……と、その時、

「ごほっ……川神流、『人間爆弾』!!!!」 姉さんの声と共に爆音が響いた。

「零斗！」一子が叫んだ、だけど、

「勝負はついたな」一子に言ってやる。姉さんは『武神』と呼ばれるほどだ。

ここまで互角に戦ったこと自体既に空裂の実力は四天王かそれ以上なのだ。

しかし、煙が晴れると、そこには誰もいなかった。

「「「え??」「「キャップやクリスが疑問符を頭に浮かべる、俺も。」

その時、

『ゴボン!!』と言う音と共に地面が爆発、空裂が居たのは土の中だったのだ。

そして一瞬後には勝敗が決していた。

地に伏した姉さん。そして同じく倒れる空裂。

「……………タッチの差で空裂の勝ちだな。」キャップが呟いた。

「空裂零斗……なんてやつだ……」
「めくれ上がった
土、でかいクレーター。」

この惨状を見て、俺もそう眩くしかなかった。

第七話「決着」(後書き)

どうでしたか？一子が零斗に惚れましたね。

次回は・・・アンケート・・・かな？

どっちみち更新遅れます・・・スンマセン・・・

アンケート

アンケート

さて、こんにちは。今回はアンケートをとります。

本編の更新を楽しみにしてくれていた方は申し訳ございません・・・

アンケートの内容は、ヒロインの追加です！

本来は一子一筋ルートにしようと思っておりましたが、

『ハーレムルートがいい！』と言う感想が来まして、

「どちらにしよう・・・ああああ!!」><「と悩み
まくった挙句・・・

「・・・よしアンケートで決めよう!」ということにしました!

・・・で!議題はと言つとですな。

『もう一人のヒロインは誰か』 です！

とりあえず選択肢も用意しておきますね。あ、ヒロインは二人なん
で、

そこんところをよろしくお願いします。

?一子だけ、純愛(?)ルート。

?百代さん。バトルするうちに……みたいな。

?由紀江、……思いつかん……。

?まさかの燕さん。結構作者が好き。

?クリス……これも思いつかん……。

?その他

まあこっただけあげておきますね。作者の一票は「?」に入れておき
ます(、……)

他にも、思いつくものがあれば

ユーザじゃなくてもガンガン感想で送ってください！！よろしくお
願いします！！

第八話「戦後の団欒」（前書き）

ども、今回は保健室での1エピソードです！

ではごーごーー

・・・最近眠くて前、後書きがぜんぜんかけてません・・・

そこんとごう承を・・・

第八話「戦後の団欒」

「……………ん……………何処だここ……………」

「ああ、保健室か……………保健室ウ!？」

おかしい。さつきまで丹沢山地でバトルをエンジョイしていたと言
うのに、

ってか一回学園に帰ったんかい!

「……………結構時間がたってんな……………夕方が……………」
保健室には今は誰も居ない……………

「あ、零斗起きた!？」

「おう、起きたのか!」

「おはようございます!」

「や〜っと起きたようだな、なんかいらいらするからもう一回闘え。」
「

……………はずがなかった。もう放課後のようで、俺の回りは今
Fクラスの連中でいっぱいだった……………

「……あの人が百代先輩に勝ったっていう……」

「……何気にカッコいいんですけど……!」

見ればドアが少し開いている。どうやら入り口にもぎっしり居るようだ。

つてか、何気って何だ何気って、失礼だろ!

「……!……!……!……!……!……!……!」

「……まさか……ねえ……!」

各自がやいのやいのと騒ぎ立てている。

ちよつとやかましますぎんだろこれ……

「お前らちよつと黙れ。……で?何でこんなに居るんだ?」

「いや、ちよつと様子見に……」「嘘つけ。」

何でこんなに大人数かって聞いてんの!!

「いや……その……ね?ちよつと改めて……」一子がなかなか言ってます。

「改めてって何だ改めてって。」

「や、その……皆がさ、自己紹介とかしときたいって……
そういうことですか。嬉しいな。」

「……じゃ、改めてよろしくな、直江大和だ。」 「おう、よろしくな。」

「大和の姉、百代だ。さて、さつさとリターンマッチを……」
「落ち着け。」

後姉？姉貴分ってことかな？

「俺は風間翔一、キャップって呼ばれてるぜ!!」 「なしてキャップ??」

「」「さあ?」「」 …… オイ。

「僕は師岡卓也。よろしくね。」 「おお、よろし『島津岳人だ!』
『一子だよ!』」
『椎名、京。』 …… 被せんな!! 一子は分かってるから!!」

「で……」 「あたしは……」 「俺は……」

……いかん。このままだとクラス全員の名前を聞くことになりかねん。

もう覚えてんのに。

「静かにしろ!!」 大声で怒鳴る。

「「「「「.....」」」」」 よし静かになったな。

「あー・・・もう全員覚えてるから大丈夫。後は俺か。改めて、空裂零斗だ。

よろしくな。」

「「「「「おう!!!」(キーン・・・)」「」「」「」 うるせえ!ちょっとくらくとしただろーが。

と、そうこうしていると、

「(ガラッ!!) あー!!!いたよ!!!」 「おお!真だな!」

勢い良くドアが開き、燕(松永さんって呼んでた。)先輩と揚羽さんが入ってきた。

そして燕先輩が勢いよく俺の肩を掴み、

「ねえ!さっきのあれ何!!何の流派!?!」 楽しそうに聞いてきた。

「ちよっ、やめっ……揺するな!!」

先輩の手を払いのける俺。

「で、結局お前は何処の流派なのだ。」 「それは私もぜひ聞きたいな。」

揚羽さんと百代先輩が今度は聞いてきた。

「企業秘密です。」まさに企業秘密だな。

「……ええ……」 「やかまし!」

お前らもそんながっかりした目で見んな! 罪悪感沸くだろーが。

「ケチいな……まあそれはともかくとして! 零斗君! 『四天王』にならない!？」

燕さんが何か提案してきた。………までや。

「四天王って今いっぱいじゃないですか。」

「うん、だからもう五天王で良いやって思ってた……で、どうよ!」

期待に満ちた目で聞いてくる燕さん。ちよ、そんなキラキラした目

で見んな！
マジで罪悪感が！

……罪悪感とか言いながらすでに殺人罪やっちゃってるんだけどね……

「お断りします。」 丁重に断る俺。

「！……なんでさー！！」 燕さん……あんたは駄々っ子か？
「ほんとに何でだよ？」 大和も聞いてくる。……それ答えなきゃダメ？

「理由も言わないといけないんですか……」 「うん。それ相応のがあるんでしょ！？」

何でこんなにテンション高い？

「一つ、有名になりたくない。二つ、色々とめんどくさい。」
「……色々と『ね？』
そして、

「で、最後、四天王って『武道四天王』でしょーが。」

「それがどうしたの？」 「……気づけ。」

「分かんないですか。俺がやってるのは『武道』なんかじゃないからですよ。」

「……そんな生易しいもんじゃないんだよ！」

「……！……そうだな、あれは武道ではなかったな……構えもなかったし。」

「お、百代先輩が気づいたみたいだ。」

「そーゆうことです。まあそーいうわけで丁重にお断りします。」

「むう………捕まえて『遊べる』と思ったのにな………」

「あ、それ同感だ。」 「右に同じである！」

「やめる。」 「あんたら俺を一体なんだと思ってるの？あんたらの遊びに付き合ってたら過労死してまうわ！」

「まあそーいうわけで、もうそろそろ俺達は帰ろつぜ。じゃーな零斗。」 「おじ。」

大和が声をかけると

「おう、帰ろうぜい！」 皆は次々と帰っていく、

「しょーがないなあ・・・じゃ、またね！零斗君！！」 「さよなら〜（、、）／」

にこやかな笑顔で先輩方を見送る俺。・・・ふう。

残るは一子だけになった。何かさっき大和に『頑張れ』とか言われてたけど

どしたんだろーな。

「ふいー。嵐は去ったか・・・」 と一段落していると

「れ、零斗？」 一子が声をかけてきた。??

「あ、ありがとね・・・庇ってくれて・・・あの時・・・」
・・・ああ。

「気にすんなや。たいしたダメージでもなかったし。」

「そう、よかった。でもお礼は言っておきたいから・・・（ほんとに・・・嬉しかったし）・・・」

最後の方が全く聞こえなかった。もうちょい大きく喋れよ。らしくないな。

「あんだよ、らしくねーな。」 「!!!なにおう!!」

「……にしてもさ、零斗ってほんとに強いんだね！
姉さまに勝つなんて！びっくりしちゃったわよ。」

「どーも。」

「ねえ、今度私と一緒に訓練・『断る。』ええーなんでよおー
ー。」

なんでってそりゃ……暗殺術を同級生の女子に教えるって……
ねーだろ……

「ウチのは門外不出なんだ。もしこの秘密を知ったら殺されちゃう
ぞ〜?」

ちよつとからかってみると

「ひいー！やっばいいです……いいです……」
面白っ。

「はは、冗談だつて。」「むうー、騙したわねー?」

そんなたわいも無い話をする。

……何かこんな生活って……いいなー！

クラスの皆とも打ち解けて、めでたしめでたしだ。このままずっと
過ごしてーなー。

・・・そんなことを考えていると、ふと大事な事を思い出した。

・・・・・・・・・・クロ！！

「！！・・・やばいやばいやばい！！　なあ一子！俺のアタツシユケ
ース知らねえ！！？」

一子の肩を掴んで聞く。思わず顔の位置が近くなるが、そんなこと
構ってられねえ！

・・・あれ見られたら全てが終わるんだよ！！

で、そんな一子はというと、

「！！！！！！／＼／＼れ、零斗！？ち、近いよ／＼／＼／＼零斗の荷物
は全部そこにあるから。」

真っ赤になつて超おろおろしていた。・・・『そこ』??

テーブルの方を見ると、確かに俺の荷物一式（アタツシユケース含
む）が置いてあった。

「！！！！」　ベッドから飛び降り、アタツシユケースに駆け寄って中
身確かめる。

「中身！！・・・おｋ／＼、ほっ・・・」　どつちら誰にも見られ
てない。

・・・と、

「ねえ、零斗、その中何が入ってるの？」　一子がこっちに来た！

「！！！！（ボタン！！）い、いや？なんでもねーし！」　必死に隠す。

「あやしいわね〜」「い、いや！・・・そうだ、もう遅いし、帰るうぜ！・・・な！？」

「うん！いいよ！！！」

「・・・あつぶね！コイツでよかったあ・・・・・・まあもう帰るかな。」

「よし、帰るか。」　「うん！」

こうして、俺は晴れやかな気持ちで学園を後にしたのだった・・・

・

第八話「戦後の団欒」(後書き)

はい、どーです？

零斗は徐々に理想へと近づいていますね。

さて！次はドキドキのアンケート結果です！！お楽しみにー！！

あ、結果に文句やクレーム等はつけないで下さいね……

作者はメンタル弱いんです……でっはでっは

アンケート結果

こんにちは！今回はアンケート結果です！ たくさんの回答、ありがとうございました！

ここからの感想は一応締め切らせていただきました。

もう作者の中でストーリーは大体決まっております！！

・・・さて、いよいよ結果発表です！！結果は・・・

純愛ルート・・・3

+ 百代ルート・・・4

+ 由紀江・・・1

+ 燕さん・・・？／（／）。（／）。（／）。（／）。（／）。（／）。

。(ノ)。(ノ)。(ノ)。(ノ)

+ クリス・・・2

・・・と言う結果になりました!!

燕さんの圧勝です!!・・・圧勝過ぎんだろこれ・・・一人だけ二桁やねん・・・

でもってですね。ここからのストーリーは一子と燕先輩の二人ルートになると思います。

『天真爛漫な2人に振り回される零斗』にしようと思ってます。

この案をくれた近衛鏡也さん、ありがとうございます!使わせていただきます!

・・・どストライクな感じでした!いやまじで。

あ、後ですね、この物語が完結したら次もまじこいで書こうと思っ
てます。

(ほとんど同じような『裏』形の主人公で、またまた『心を閉ざし

た主人公』で、

こーゆうの大好きなんです。パクリだと思っ人は思えばいい！)

こんときのヒロインは燕さん一択にしようと思っていますので、まあよろしくお願ひします

・・・といっても『闇殺し』を止めるつもりはさらさらありませんけどね！

こっからも果てしなく続けていく予定ですのでご安心を。

気が早いか・・・でも、燕さん一択もマジで書いてみたかったんですって！

燕さんファンの人は乞うご期待？(もう二十歳すぎてるかもね w w w)

・・・さて、アンケートと言っものは多数決ですから、少数派の意見が無視するようない形になってしまいます。本当にすみません・・・

『不死川 心』など、？を選んてくれた人も、設定まで書き添えてくれた人も、

全部参考にしていくつもりです。ヒロインはしょうがないですが・・・

少数派だった人も、燕さんファンも（作者込）、アンケートを送ってきてくれた人全員に

感謝しております！本当にありがとうございます！！

しっかり更新していきますので、これからもよろしくお願いします！！！！

一作目としてESでまだ書いているのですがぶっちゃけこっちメイソンにします

～アンケートfin～

第九話「EXランク」(前書き)

ども！今回は『裏』面です！

EX初ミッションは鬼畜！

ではごーぞ。

第九話「EXランク」

「……………」俺は今、とあるマンションの自室にいる。

「……………」クラスの皆とも打ち解けて、めでたしめでたしだ」
「……………」

って思ってた時期もあったよ?……………」

そんなさっきの俺をぶっ飛ばしてやりたい。自分、『依頼』が無いからって
チヨージ乗ってました!

現在の俺はケータイの画面を見てわなわなしている。ケータイのがめんには『EXランク』
の依頼が一件……………」

現在、中東国……………」で大規模な紛争が発生中。国際連合の要請により、

「ふふ……元気かの？」 「黙れ糞ジジイ、今回はあんだあ!？」

何を隠そう、自分の祖父（俺を暗殺者にした張本人）だった……

「依頼が来ておるじゃろ。今回は大きいぞ……」

「……」 大きすぎるわ!!

「何であんたが知ってんだ!」

「そりゃーなー、政治の裏はわしが一番良く知っておる。で、今回の件だが、

日本政府は国連に貸しを作れてホクホクのようじゃ。というわけで、しくじるでないぞ。」

アンタどこまで情報通なの……ってか

「……なあ、俺はもう暗殺業はやめたといってずっと前から……

『駄目じゃ』

なんでだよ!」

「よいか、我が空裂家は代々暗殺業を生業としている。伝統なのじやよ。」

その伝統をお前の代で潰すのは許さん!お前はそんな中でも光る逸

材じゃから
なおさらな。」

・・・ブチッ！

「なんでだよ！俺の好きなように生きてっいていいだろ！！この・
わからずや！！」

「黙れ！空裂家の伝統を汚すな！お前はただ任務を遂行することだ
け考えておれば

よいのじゃ！！いいな！！」ガチャ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・これだ。口を開けば伝統だの誇りだの、拳句の果て
には聞く耳持たずだ。」

「・・・・・・・・昔はいい人だったのにな・・・・俺に『素質』があると分か
つてから

態度が一変しやがった。俺を道具みたいにしかあつかわねえ、ゴミ
ジジイだ。」

「・・・・・・・・チッ！いつかやめさせてやる・・・・」

そんな言葉を呟きながら俺は準備を始める。今回は人命救助に『鎮
圧』って事は

殺さなくてもいいんだ。

ならまだました。

そう思いつつ俺は物置として使っている小部屋に入った。そこには暗具や銃器、その他もろもろが並んである。（整理整頓はしてあるよ？）

「これにするか……」

俺が手に取ったのはその中でもひときわ目立つアクリル製の対銃弾防盾（二枚セット）だ。

形はよく機動隊が使っているようなやつ。大きさは……一枚目ははるかにでかい。

俺の全身を覆い尽くしてなおまだまだスペースが残っている。

二枚目はピッタリ俺の身長と同じくらいだ。

……この重装備を使う日がこようとは……

そしてもう一つ、対集団用の散弾銃、俗に『ショットガン』と呼ばれている銃だ。

名前は『^{スパス}SPAS』、12発の散弾はもちろんゴム弾だ。

そのほかに拳銃を二丁（同じくゴム弾）と『打ち根』を持ち出し、

オーダーメイドで作ってもらった超巨大なバッグ（てかカバー）に
詰め、

マンションを出る。どうやらへりで連れてってもらえるらしい。

「はあ……つと、しょーがない？のかなあ……」

そう呟きながら俺はマンションを後にした。

……あれ？俺って国際的に有名人？いや、今回は名指しじゃないか……。

日本政府からの名指しっただけだな……ふう……。

～数日後～

「……ここからか……」

軍用車両の中でポツリと呟く。現所在地は国連軍の車両の中にいる。
と、

「（なあ、さつきから気になってるんだがあの少年は誰だ？日本人
だよな……）」

「（ああ、なんでも日本から派遣されてきたらしいが……）」

英語で周りの屈強なアメリカ兵達が話していた。無論俺には何のことやら

さっぱり分からない。

「（おいおい、冗談だろ？こんなガキ一人をこんな激戦区にやるつてのかよwww）」

・・・お、何か笑った、・・・なんか・・・馬鹿にしてね？ と、その隣の男が

「（その辺にしておけ。）」とその場を沈めた。GJ!

「（日本は軍隊をあまり出したくないんだろう。こんな化け物を入送ってきたって訳だ）」

なにやら説明している。聞こえてないフリをしていると。

「あんだ、名前は？」

さっきの一人が聞いてきた。

「日本語喋れるんかい!」 「ああ、前は日本にいたんだ。そこでちよつと裏の仕事を・・・」

「Nice to meet you Reito!!」
「Nice to meet you...too...」

皆がメツチャ握手を求めてくる。やめてそうゆうの!!と、そつだ。

「あんたの名前は？聞いてなかった。」

「ああ、『ガルシア』だ、ちなみにこの部隊の指揮を執ってる。よろしくな。」

「！そうか、よろしく。」 握手を交わす俺とガルシア(さん)。

「他のみんなにもよろしく言っといてくれ。」 「わかった。()」

「OK!!」 「そ、そうかよろしく」

軍属なのに妙にフレンドリーな人たちだった

~~~~~

「きたぞ！皆、配置につけ！ゴム弾しっかり詰めとけよ!!」

ガルシアが叫ぶ。

「ガルシア、俺はまず住民を救助する。皆はまず鎮圧と足止めを頼みたいんだが . . . . .」

「おう!!任せろ!!」 「頼んだ!!」 そう言い、  
俺はまず小さい二枚目の盾を背中に背負った。この盾は後ろからの  
攻撃を防ぐためだ。

そして巨大な方の盾を左腕に装着、右手にショットガンを持つ。・  
・よし!準備完了!

「っしゃあ!まず俺は先に行かせて貰う!後は任せませ!」

「くくくくく(応ッ!!!!)」「」「」「」

・そして俺はバリケードを飛び越え、市街地を突っ切っていった・・・

「ガキン!」 飛んでくる銃弾を俺はかわし、受け止め、風のごと  
く自陣のバリケードを  
超えて戻った。

脇には子供三人とその両親、つまり一家族を連れて。

「おっしや！これで全部だったぜ!?」  
そう、既に市街地にいた住民はもうおそろく全て「こっちに運ん  
だらろう。」

「………なんて手際だよ………やっぱり噂どおりだな……  
零斗………」

ガルシアが感心したような声を漏らした。他のやつらとはというと……

「(………!!………!)」

何か感心というか感激していた………

「ども………嬉しくねえ噂だな………」  
「適当に返す………」

「(………)(………)」  
俺が救った家族  
の父親らしき人が

何か話しかけてきた。傍には男の子もいる。

言語はさっぱり分からないが、ひたすら感謝しているというのはす  
ぐに分かった。

なんだか少しほっこりした気分になった。………人助けて………  
………いいな………





そういつて俺はバリケードを飛び越え、一気に 軍のバリケード  
に向かった……

敵がアサルトライフルの集中砲火を浴びせてくる、だが俺は避けも  
しない、

それらの弾は盾に当たって全て跳弾に変わり、向こうを威嚇する。

しかしそのうちの一発は俺の髪を掠めた。

………これだ、この空気こそが『戦争』だ。武道だの川神大  
戦だなんて

遊びみたいなものだ。 気を抜けば死ぬ。これが戦場、これこそが  
戦場。

「ツツ！！（ダアン！！）」 一気に敵のバリケードを超え、スパ  
スでまずは近くの数人を  
気絶させる。

（ダアン……ガシャッ！ダアン！） すぐにポンプを引き、再び  
数人を薙ぎ倒す。

それをずっと繰り返しているうちにあっという間にそこに居座って  
いた大部隊の

半分ほどが気絶した。しかしそこでスパスも弾切れになった。

「まだまだあ！」　そう叫んで背中の盾を左手に装着しなおして突撃、

右の巨大な盾で数人を殴り倒す。『気』を地味に腕の強化に使っているので

あんまり疲れない。

「『ドゴツ！バキイ！メコツ！！』　ツハハー！あたらねえよ！！」

よし！残りは三分の一以下だ！

そう思い、俺はスパスと盾を両方とも捨てると同時に打ち根を取り出し、一気に相手集団の中に飛び込んだ。

『バタバタバタツ』と音がした後そこにあるのは屍（死んで無いけどね）だけになった。

スパスと盾を回収し、急いで自陣に戻る。とちようどガルシア隊（仮）も  
相手を制圧した所だった。

「お・・・同時だな。」

「一人と一個中隊で同時って・・・・・・やっぱスゲーよお前・・・」

「・・・ありがとよ。さて、静かになったな。いったん休もう。」  
と、水を飲んでいると、

「この市街地での銃撃戦は沈黙した模様です！」と声が聞こえた・・・  
日本語・・・

あれ？・・・戦況レポーターか・・・日本の・・・

「あ！あなた！日本人ですね！ちょっといいですか」「ちょっとよくない！」

・・・戦場だぞ！何のんびりインタビューしてんだ！

「あなたは日本から派遣されたんですか！？」・・・うぜえ・・・

「そーだよ！はいはい、もう撮んな！めんどくさい。あっち行けや！」

「あなたはまだ子供のようですか！？」・・・ムカツ！」

「・・・やかましい。『行け』と言っているんだ」

「!!!・・・は、はい！分かりました！失礼します！！」

ちよつと殺気を込めて言うつとそういつて若い男のレポーターは風のように逃げていった。

・・・やべ！これ映つたかも！！・・・やっでもーた！帰つて隠し通せるか・・・？

帰国後に一抹の不安の覚えつつ、アメリカ兵の皆と僅かな休息をとるのだった・・・

・・・結果、アメリカ兵の皆とメツチャ友達になれた・・・皆良い人だッ！

第九話「EXランク」(後書き)

はい、まさかの武力介入www

零斗君の実力は政府のお墨付きですね……

では、次回もお楽しみに!!

第十話「終戦とガチな疲労・・・」(前書き)

どもども！作者です！

今回で紛争編は終わりです。っていつても二話分ですがね・・・

零斗君は相当お疲れのようですよ・・・

では、本編をどうぞ。

第十話「終戦とガチな疲労・・・」

～七日後～

「ゼエ・・・ゼエ・・・終わったぜチクショー・・・・・・・・」

現在、俺達は二国間を飛んで周って両軍を制圧しまくった後だった。

今までほとんど一睡もせず。徹夜慣れしてても流石にきつい・・・

国連からの再三再四に渡る警告（脅迫）で今日やっと二国間に停戦条約が締結されたそうだ。

「・・・・・・・・さすがEX・・・・・・・・なんでもありなんだな・・・・・・・・」

一人ごちる。・・・と、

「くっ・・・・・・・・駄目だっ・・・・・・・・」

ガルシアが悔しそうな声を漏らしていた。そこを見ると、

「（隊長・・・・・・・・俺は・・・・・・・・役に立ちましたかね・・・・・・・・）」



「（馬鹿野郎！役に立ってないわけ無いだろ！！おい・・・おいつ！）」

兵士の一人がまさに今息絶えた所だった。他にも数人の負傷者が出ている。

「・・・・・・・・（ゴン！）くそっ！！俺がしっかりしていれば！！」  
悔やんでいるガルシア。・・・・・・・・戦争となれば犠牲も覚悟していたが・・・・・・・・

正直俺もやりきれない。

「ったくよ・・・・・・・・他国の戦争止めに行って死ぬなんて・・・・・・・・これじゃ俺達が馬鹿みてーだよな・・・・・・・・」

「ああ・・・・・・・・なんでこいつらが・・・・・・・・ッ！」

「・・・・・・・・ガルシア、悔しいのは分かる。けどな、アンタはこの隊のリーダーなんだぞ？  
帰りに強襲されるかも知れない。そんなときにアンタがそんな状態でどうすんだよ！

・・・・・・・・アンタはこの隊をこれ以上一人の犠牲者を出さずに国に導く義務があるんだ  
それは忘れんな。」きつめな声でガルシアに聞いたです。

「！・・・・・・・・そうだな・・・・・・・・ありがとう・・・・・・・・。よし！皆！国

へ帰るぞ！」

「「「「「OK「「「「

「おっと、俺は帰りはこつちだからここでお別れだ。．．．また会うかもな。」

「．．．そうか、．．．正直『紅蓮の疾風』はもっと．．．なんて言うか．．．  
冷酷なやつだと思ってたよ。」

．．．心外な！」

「悪かったな！あとその呼び名やめろ！．．．俺は殺し屋を廃業したいと思ってる。」

もう人を殺したくは無い．．．わがままかも知れないけどな。」

「！！．．．いや、人を殺すことで悦ぶようなやつよりよっぽどまし。」

また会ったら宜しくな！」

「ああ！」

俺は仲間の皆と握手を交わし、帰路に着いた．．．．．

．．．．．が、空港にて、

「ふゝ．．．終わった終わった．．．．．ってかショットガンとか絶対止められるよな．．．」

ただでさえこんなでかい盾で目立ちまくってるのだ。  
これじゃ帰れねーじゃねーか！

カパーはしてあるが  
・・・しかし、以外にもお咎めなしだった。どうやら日本政府が言  
つてくれていたらしい。  
機内に入る。

「ふい〜・・・シート柔らかえ〜・・・ちょっと・・・いや、爆  
睡しよ・・・」

そう言い、機内でふかふかのシートに身を預け、目を閉じた俺だっ  
たが・・・

「(・・・・・・・・!!・・・・)}!!・・・・!(・・・・)」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」  
!!「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

(・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・つるせえええええ!!!!)

俺の目の前の席では誰かが大喧嘩しているし、何か修学旅行かの集  
団が騒ぎ散らしていた。  
・・・・・・・・・・ぜんぜん眠れん！

俺が乗ったのは現地を離れた別国の空港、なので仕方が無いが……  
にしてもうるさすぎる！礼儀を知らんのか礼儀を……あ、しらね  
ーのか……

この人たち外国人だし……概念が無いのかな？……

そついい、普通に座っていた俺だったが……

……ぜんぜん治まらない……むしろ酷くなっている……  
周りを巻き込むな！……周りの奴らも妙にノるな！！

結局、フレンドリー集団の中で寝たフリ（ぜんぜん寝れてない）を  
していた俺は

閉口するしかなかった……

そして……

「……………」

周りがやっと沈黙した時、俺は徹夜明け特有の奇妙なテンションに  
なっていた。

「あ~~~~~……逆寝ねえ！」 一人機内で叫ぶ俺……

結果的に俺は一睡も出来なかったのだ……

（羽田）

「ね・・・眠い・・・過労死する・・・」

羽田に着き、嘆息する。・・・早く帰りたいよー・・・orz  
と、

「居ました！映像に映っていた少年です！！」・・・ン？

「あの、あなた 国に行っていましたよね！？」

「あの・・・！」 「あなたは・・・！」 「なぜ・・・」  
「どの・・・！」

あっという間にレポーターらしき人に囲まれてしまった・・・

「あ・・・」

・・・やばい！やっぱり映ってた！！

「・・・すみません、ノーコメントで」 有名人のごとく言ってみるも

報道陣はやいのやいのと騒ぎ立てる・・・ごっちは・・・眠いつのこやー・・・

「ちょっと黙って……黙れ。こっちは眠いんだよ！」と脅してみたが、

「では静かに聞きますね？あなたはなぜあそこに行っていたのですか？」

……いや、そうゆう問題じゃねーんだけど！？

……仕方が無い……逃げよう。

「それはですね……あそこの人に聞けば分かりますよ。」

そういつて俺は一点を指差す。と、

「……え？」「……報道陣の目が全て俺が指差したほうを向いた。

……GJ俺）（b

「ダッシュ！」その隙に俺は全速力で報道陣の間をかいくぐり、……逃げた。それはもう脱兎のごとく。

「あ、逃げたぞ！」遠くでそんな声が聞こえた。……遅いわ！！

「へへーん、……よし、帰る。って、今日学校か……」ど  
うしよっかな……

いっつかな・・・いくまっつかな・・・と悩んでいると・・・

「あ、出席日数やばいんじゃない!?」・・・決まったわ。

「学校・・・学校・・・」呪詛のように呟きながら俺は

家へと向かった・・・

～学園～

「・・・ツイタゾオ・・・ガクエンダ・・・。」

疲労のあまり片言になって呟く。

ここに来て俺の疲労はピークに達していた。・・・ほんとに過労死する・・・

「かはっ・・・もう授業始まつてるな・・・」そう言いながら

階段を上がる・・・これだけの動作が果てしなく苦痛を感じる。

そうこうしているうちに教室の前に来た。ドアを開ける。

「『ガラッ!!』ハア・・・ハア・・・おぐれですんませんで

しだ……」

「「「「「！！！！！！！！！！」」」」」

クラスの皆がざわつき始めた。……あれ？

もしかして……ばれてない？

「れ、零斗、どうしたの？」「お前……一週間も何してたんだよ？……」

「つつかお前どうしたんだその顔は！？」「酷い顔になっているぞ？」

……おお、ばれてないようだ。

「へ？……顔？……」ふとガラスに映った自分の顔を見る……と、

「うわ……ひでーな……」

確かに酷かった。幾重にも隈ができ、目は虚ろになっている。



死に掛けてるように見える・・・気もほとんど使い果たしたし・・・

「・・・まあいい、無断欠席の理由は後できつちり聞かせる。席に着け。」

今は歴史の授業だったようで梅子先生がいた。・・・ってか言うてなかったっけ・・・

・・・理由言えないんですけど・・・

「はい・・・」 ふうふうと自分の席に着く。

「(零斗、ほんとにどーしたのよ。死にそうじゃない。)(一子の問いに

「(ちよっと諸事情で・・・詳しくは聞くな。)(「テキストに答える。

こうして、俺の最後の戦い(真剣で。)(が始まった・・・生きて帰れるかな・・・

第十話「終戦とガチな疲労・・・」(後書き)

はい。一週間もぶっ続けて完徹とか良く学校いく気になりました  
ね・・・

次回は・・・燕先輩かな？・・・

乞うご期待！

第十一話「放課後」(前書き)

ども、今回と次ぐくらいは燕さんと零斗君です！

燕ファンの皆様……口調とか違ってたらすいません……

必死にwiki見てやったんでどーかお許しくださいませ……

ではどしどし。

## 第十一話「放課後」

↓授業終了後↓

「気をつけ、礼！」 号令がかかり、今日の学園は放課後に突入した。

「う………うぼあー………」

俺のライフは数学と英語？でとっくに0だ。

「零斗、帰ろ！」 一子が元気に声をかけてきた。……その元気を分けてくれ……

「おう、今日は俺達とも帰ろうぜ」

『風間ファミリー』の皆も声をかけてきた。が。

「わりい、今日は先に帰ってくれや。明日な。」

俺は今日、一歩でも少ない方法で家に帰るつもりだ。つまりは……

・

……電車やねん!!

「……そうか、じゃくまた明日な。」 「ばいばい零斗!」  
「うむ、またな。」

「おう、誘ってくれてありがとな。じゃな。」

一子たちが教室から出てからもしばらく席を立つ気になれなかった。

「うとううだー……よっし! 帰ろう! ……  
・ 電車で!!  
少しでも疲れないように……死なないように!!」

と、勢いよく教室のドアを開け放つ。『スパーン!』と良い音がする。

そして、俺はオレンジ色に染まる廊下へと歩を進めた……

……進めたのは良いのだが……

「ん? ……んん? ……あがつ! ……しまったあー」

「――!!」

気づいた、気づいてしまった……

「や、さ……」

「財布忘れたあああああああああああ……!!」

Orz……

俺さ……思うんだ……俺ってさあ……詰めが  
甘いよね

いっつも

「……」

もはや声すら出さず、俺はとぼとぼと学園を後にした……

ごめんね皆……

〜河川敷〜

「はあ、はあ……くっは……まだぜんぜんある……」  
延々と続く河川敷を歩く。自宅は学園からそう遠くは無いのだが・

今の俺にとってはね……地獄なんだよ……

「ああ……足が重い……早く眠りたい……『永眠り』でも良いから……」

自分では見えないが、今の俺の目からは艶が消えうせていることだろう。

思い体を引きずり、とぼとぼと帰っていると。

「あれ？……あー、零斗君だ!!おーい!!」

誰かが声をかけてきた。だれ……だ?……  
振り返ってみると、

……燕先輩が走ってこっちに来ている所だった。

「どーしたんですかせんぱい……(棒読み)」

「いやさー！せつかくだから一緒に帰ろうと思って！……っ  
てうわ！

どしたのさ！目が死んでるよ！？」

ちよ、大声出さないで……あれ、目が霞んで  
きた……

「えつと、じ、じょうがあつて……いつしゅう、かん、寝て  
ないんです……」

足元もおぼつかない……

「なんでさ……でも！そんなときにはこの……えと……  
これ！」

そついい、腰につけた鞆から何かを取り出す先輩。

「……なんすかそれ？……納豆？？」

「ふふうん。よくぞ聞いてくれました！この『松永納豆』！食べれ  
ばどんなに疲れてても

すぐに回復！『松永納豆』をどぞ御鼻真に！！！」



「まじですか」

「まじまじ。今の零斗君の死んだ目もあつという間に元通り！」

「やかまし。」

最低限の会話しかない俺。

「で？何でそんなにぼろぼろなの？一週間ぐらい学校にも来てなかったよね？」

「！何で分かるんです？三年でしょ？」

「……………（あの後毎日誘いにいったんだよ？『四天王になれ』って）……………」

「え？……………何ていったんです？……………あ、何でこんなに疲れてるのは言いません。言えません。」

「えー……………教えてくれても良いじゃん、そんなくらい。」

むくれる先輩。口を尖らせている姿はなんかすごい可愛かった。……でもな。

「言えないものは言えないんです……………っ！」

そんな事を話していると、急に体がグラッと傾いだ。……  
まずい！

方向感覚がつかめない。

「あ……………れ？……………」

「……………ちよっ！ほんとに大丈夫！？」

おかしいな……………先輩の声が三方向から聞こえる……………

そして、突然視界がブラックアウトした。

『ドザザザザー！』

足を踏み外し、派手に下まで転がっていった俺は何も言えずに意識  
を手放した……………

（燕 side）

私は授業を終え、川原を歩いていた。なんか面白いこと無いかなー。  
・  
・

「そつえば……零斗君……今日も来てなかったな……  
……」

私は三年からこの学園に来てるから詳しくは分からない、けど、

ここ一週間零斗君の姿を見てない。……不登校なのかな？？

なんだかあの大战から……零斗君に色々と『興味』を持つよう  
になった。

一つは……

……なんであんなに強かったのに……それこそ百代  
ちゃんに勝てるほどの  
実力を持つてるのに……今の今まで名前すら聞いたことな  
かったんだろ……

二つ目は・・・

・・・あんな闘い方、見たこともなかった・・・

格闘技とか武道ですらなさそうだった。

しかも・・・あの『気』・・・私を含め、あの場の全員が動けなかった・・・

・・・知りたい・・・

三つ目は・・・

・・・良く分からない・・・なんだろう・・・???

自分でもよく分かってない・・・けど・・・なんか・・・気になる・・・???

まあそういう訳。で、いつものようにのんびりと川原を歩く。と、

「ああ・・・足が重い・・・早く眠りたい・・・『永眠り』でも良いから・・・」

少し先を歩いていた人がそんな声を漏らした……どつかで聞いた……あ!!

「!! あー! 零斗君だ!! おーい!!」

そう、ちよつと先を歩いていた人は零斗君だった。今日は来てたんだ……

「どーしたんですかせんぱい……」

そんなことを言う零斗君に駆け寄ってみて……驚いた。

「いやさー! せっかくだから一緒に帰ろうと思って!……っ  
てうわ!

どしたのさ! 目が死んでるよ!？」

……零斗君の顔は、今にも過労死しそうな顔だった。……  
大丈夫!!?」

「えつと、じ、じょうがあつて……いっしゅう、かん、寝て  
ないんです……」

息も絶え絶えな感じで呟く零斗君。

足元もおぼつかない様子。

「なんでさ……でも！そんなときにはこの……えと……これ！」

話のネタ作りの為に商品の宣伝をする。

「……………なん……すか……それ？……………納豆？？」

「ふふん。よくぞ聞いてくれました！この『松永納豆』！食べればどんなに疲れてても

すぐに回復！『松永納豆』をどぞ御鼻屑に！！！」

「まじですか」

「まじまじ。今の零斗君の死んだ目もあっという間に元通り！」

「やかましい。」

そんなたわいも無い会話をする。あ、あのことも聞いてみよ。

「で？何でそんなにぼろぼろなの？一週間ぐらい学校にも来てなか

「つたよね？」

「！何で分かるんです？三年でしょ？」少し驚いた様子の零斗君。

「……………むっ……………分かってないね……………」

「（あの後毎日誘いにいったんだよ？『四天王になれ』って）……………なんでもないの！」

「え？……………何て言ったんです？……………あ、後

何でこんなに疲れてるのは言いません。言えません。」

「えー……………教えてくれてもいいじゃん、そんならい。」

「言えないものは言えないんです……………っ！」

。ねだっては見たが一向に零斗君は話してくれない……………。

と、そのとき。

急に零斗君の体がグラツと傾いた。

……え？

「あ………れ？………」

徐々に零斗君の体が傾いて行く。

「ちよっ！ほんとに大丈夫！？」声をかけても全く反応しない。

『ドザザザー！』

そして、足を踏み外したのか、零斗君は

派手な音を立てて土手を転がり落ちていった。

「………零斗君！零斗君っ……！」 必死に呼びかけるも零斗君は動かない。

どうやら意識も無いみたい。

「ッ！大丈夫！？」 土手を駆け下り、零斗君の体を揺さぶる。



……息はあるみたい。そう思うとほっとした。

「ど、どーしよう……そ、そっだ！ とりあえず家に帰って寝かせてあげよう！」

かなり焦っていた私は救急車を呼ぶという方法を全くもって思いつかなかった。

私は倒れている零斗君の体を起こし、

………背負った。

背中に人の重みとぬくもりが伝わってくる。

「う………／＼／」

つい顔が赤くなってしまふ。けど、今はそんなこと気にしてられない！

「………おりゃあああああああ！……！」

私は全速力で、零斗君を背負い、自宅へと走った……



## 第十一話「放課後」(後書き)

どうですか？燕さんは既に零斗君のことがちょっと気になってる

よじですね・・・可愛い・・・

展開がわやいのほ(も)見逃してね

既に燕さんは三年にいますという設定です・・・

次回は燕宅での話です。おたのしみです。

第十二話「休養（燕宅）」（前書き）

ども、今回は燕宅が舞台となっております。

相手の自宅に二人きりというのは書くとおアブナイですが

・・・何も無いからね？・・・作者は純愛好きなのッ！

・・・ではございませう。

第十二話「休養（燕宅）」

～燕side、続き～

「……………『パンツ!!』 ただいま! ……って誰もいないから  
良いか!」

自宅のアパートに着き、ドアを開け放つ。今は一人暮らし中なので  
部屋には誰もいない。

「……………よしと……………」

零斗君の体をソファーに寝かせる。零斗君はまだ寝ているみたい。

「ふう……………ビックリしたよ……………いきなり倒れるんだも  
ん……………」

そういつて零斗君を見る。完全に疲れきっている様子だ。

「……零斗君……一体何してたの……?」  
こんな疲れるまで……

「……ん……」

零斗君が寝返りを打った。眠っている零斗君の顔をふと見てみる。

「……か、かわいい……//」

いつも大人びた表情だけど……眠ってる時は無邪気で、  
ちよつと幼い笑みを浮かべていた……//

顔が熱い……

「//……て、テレビ見よ!」

自分で恥ずかしくなってテレビをつけてみた。……と、

「紛争が続いていた中東国　　と隣国である×××の  
大規模な紛争は昨日の日本時間で午前三時二十分に停戦条約が結ば

れ、完全に沈黙した模様です。この規模の紛争が一週間という短期間に終結する事例はきわめて稀だということですよ。さん。今回の紛争、なぜこんなにも早くに終結したのでしょう?」

「・・・はい、今回紛争を起こしたのは石油や鉱産資源の重要都市でして、そこで戦争されると困るわけです。なので今回は各地で国連の大規模な武力介入があつたようです。」

「ありがとうございます。で、ですね、今回の紛争について、気になるVTRがあるんですね。では、どうぞ。」

そついで、画面はレポーター達が喋っている場面から戦地の映像に切り替わった。

「(チラッ)……………つぶつぶ……………」

いつの間にかまた零斗君の笑顔を眺めていた私。  
はつきり言って全く内容を聞いてなかった。

しかし、またテレビの画面を見たとき、私の視線は釘付けになった。  
そこには……………

「『ズダダダダッ！』えー、現在両国の国境付近で両軍、そして介  
入してきた国連軍の

激しい銃撃戦が繰り広げられています。……………あ！？今誰かがバ  
リケードを超えて

戻ってきた模様です……………！！、少年です！日本人の少  
年が

避難民を連れて戻ってきました！！」

二つの盾と銃を持ち、一家族を連れて戻ってきた零斗君の姿が映っ  
ていた。

「え……………って！、なんで!？」



思わず叫んでしまう。！！???

零斗君は誰か外国人の人と話している。  
そして次の画面に映った。

「この市街地での銃撃戦は沈黙した模様です！……あ！！あなた！日本人ですね！ちよつといいですか！！」

「ちよつともよくない！」

……間違いなく零斗君の声だった。

「あなたは日本から派遣されたんですか！？」

「そーだよ！はいはい、もう撮んな！めんどくさい。あっち行けや  
！」

零斗君は取材を拒否った。しかし、レポーターの若い男も引かない。

「あなたはまだ子供のようですが！？」　と云うと、



零斗君の目がつつすらと開いた……

～零斗side～

「ん……ん……?」

だんだんと視界が広がっていく。

俺は……どーなったんだ?これ……?……

……ああ、俗に言う「過労でぶっ倒れました」ってやつか?……

……辿り付けなかったんですね……俺は……  
……ん?

……ここ家じゃん!……誰かの……

「???. . . . .あれ. . . . .?どじだ」. . . . .「

辺りを見回すと、

「!!お、起きた. . . . .?」

「なんと」

. . . . .燕先輩だった. . . . .つて!?

「ここ先輩の家ですか!？」 なして?

「う、うん. . . . .ダメだったかな. . . . .?」  
何故かすまなさそうにする先輩。???

「いや、助けてくれたのはありがたいんですけど、なんで病院じゃなくて自宅??？」  
素朴な疑問を聞いてみる。と、

「あ. . . . .」

「え?」 今気づいたの!?

「しょ、しょーが無かったんだよ！あの時は！あ、いやその……」

「……その？」

「……. . . . .忘れてました……. . . . .その選択肢を……. . . . .」

『ドーン……. . . . .』と効果音つきで凹む先輩。どうやら本気で忘れてたらしい。

「まあ……. . . . .その……. . . . .何と云うか……. . . . .ありがとございまして。」

「へ？」

「助けてくれて。あのままだったらたぶんのたれ死んでましたよ俺。」

「俺もだいぶ回復したし、今の俺は目にも生気が灯っていることだろう。」

「ありがたや……. . . . .」

「感謝の意を込め、微笑んでお礼を言っ。」

「あ／＼い、いいんだつてば！……」  
なぜそこで赤くなるんだ先輩……

「……と、零斗君、一つ聞きたいんだけど。」  
ん？急に先輩の目が真剣になった……

「？……なんですか？」

「これ……」

そう言つて先輩はテレビ画面を指差した……そこには……

インタビューされている俺の姿が……

……ガッツリ映っていた……。

や　っ　ぱ　り　だ　っ　た　。

「「ねどつゆつ」とさっねえ。」

「う……………(大汗)」 やばい……………っつか手遅れ……………

「……………分かりました……………ある程度は話しましょう……………」

さて、どこまで誤魔化せるかな

こうして、俺はぼつりぼつりとギリギリなラインで『事情』を話すことにした……………

第十二話「休養（燕宅）」（後書き）

はい・・・ちよつと調子に乗りすぎた感が否めません・・・

つてか燕先輩のキャラが大破してる・・・気がする。

燕さんルート一筋で書きたくなってきたなあ・・・

またアンケートとるかも ではありません。



### 第十三話「誤魔化し」（前書き）

ども、今回は零斗君の弁解です・・・

とはいえ誤魔化しですがね・・・

・・・さて！ついでに、ここでアンケートをまた取らせて頂きた  
く、

お題は・・・もう一部の方は分かっておられると思いますが、

・・・そうです！お題は、

「燕さん一人の純愛 にしても良いか」 です。

燕さん・・・書いてええええ！！

期限は長めで、「一言」どっちが良いか」を送ってください！！

間ってます！・・・再々アンケートですみません・・・

### 第十三話「誤魔化し」

「……………えとですね……………まず……………」

……………何から話せばいいんだろう……………『自分殺し屋でした！テヘツ』

なんて絶対に言いたくねーし……………ギリギリなラインって言っても……………全部アウトじゃね？

だらだらと冷や汗を流す俺。……………えと……………

「まず！あれは間違いなく俺です。」 「うん、知ってる。」  
……………orz……………

「何であんなところに行ってるのかは……………」

「かは……………?…?…?…」

うお、先輩の目が輝き始めた。好奇で。

「……………頼まれたからです。」

「誰に?..?」

「.....それなりな人に.....」

どうしよ、セーフな情報が何一つとして見つからねえぞ?.....

「まあ.....要するに.....俺はあ〜.....頼まれたことを  
する人だって

ことですよ〜」

.....歯切れ悪すぎるぞ俺.....

「それ結局答えになってないよ?.....なんであんなとこにいたの?  
今までの欠席は全部ああゆうとこに行ってたの?」

「いや、それは無いです。」 きつぱりと言いつつ切った。

あんな経験はぶつちやけ二度としたくない。

「じゃあ何してたの……?」

「……」

さて、どうしよう。まさか『人の頭ブチ抜いてました。』なんていえねーし……

「ちよつと……『仕事』をしてました……内容は言いませんが。」

「怪しい……やましい仕事なのかな?……」  
ジト目で先輩が見つめてくる……

「いいえ……そんな事は……」　ハイ、思いっきりやましいです!別方面で!  
その視線に耐え切れずに目を逸らした。

「……ま、まあ、結局俺は今回とある団体に頼まれて、人命救助(鎮圧)にいった訳ですよ!」  
これで信じてください……

俺がそう言つと、先輩はジト目のまま

「そんだけ？・・・学校サボって彼女とイチャイチャしてたんじゃないの??」  
と呟いた。

『ズルツ！ガンー!!』

「あだっ！!!」

「・・・思いっきりずっこけてしまった。・・・疑ってたのはそ  
ちですか!？」

「なんで紛争からそっちに行くんですか!？」

「ん〜・・・私にもわかんないよ!（だって・・・何か・・・気  
になっただんだもん）」  
すがすがしく言い切る先輩。ああ・・・無駄な心配してた俺が馬鹿  
みてーだ・・・

「でもさ、実際それだけなんだね？」先輩がなお追求してくる。

「はい。」

「ほんとに？」

「はい。」

「ほんとのほんとに？」

「はい。」

「ほんとのほんとの……」だあ！ほんとですよ！……」

ループしそうだったので断ち切っておいた。

すると、先輩はきゃははと笑い、

「うん。だったら良いや。安心したよ！」  
満面の笑みを向けてきた。

「! ! . . . . . はい . . . . . 安心して下さい . . . . . 先輩『は』」

. . . . . だめだ、この人に本当の事なんて言えねえ . . . . .  
この人は絶対に『裏』に踏み入っちゃいけない人だ . . . . .

俺は、先輩の安心しきった笑みを見て、罪悪感にちくりと心を刺された。

. . . . . でも、いや、だって . . . . . この笑顔は壊したくないも  
んなあ . . . . .

そんなことを思っていると、

「うわ! もうこんな時間だ . . . . . どうする? 零斗君、ここで食べ  
てく?」

先輩がさりげなく食事の誘いをしてきた。

「！！・・・いや、俺は帰ります。これ以上迷惑かけられませんし・・・」

そういつて玄関に向かう俺と、

「零斗君！」先輩に呼び止められた。

「ん？なんですか？」

すると、微妙に頬を朱に染めた先輩はやわらかい微笑みを浮かべ、

「また明日。」と言ってきた。

！！・・・面食らってしまった。顔が赤く染まる。

「！！／／／・・・はい、じゃ、お邪魔しましたあ！」

赤くなった顔を悟られないように、俺はさっさと玄関から退場した。

先輩はやっぱり笑顔が一番似合うな・・・／／／／／



零斗が出て行ったあと、燕は『ほう・・・』と溜息をついた、まだ顔が赤らんでいる。  
そして、

「別に・・・食べてつてくれても良かったのに・・・」

不満げに口を尖らせてそう言った。その咳きは無論誰にも聞こえない・・・

～翌日～

「いや・・・フル出席は久しぶりだ・・・」

俺は上機嫌な様子で学園へと向かう・・・最近学校が一番楽しく感じるなあ・・・  
そしてそのまま校門をくぐった。と、

『ザワザワザワ……ん？なんか大量に視線を感じるんだが……』

と、前方に風間ファミリーの姿が……こえかけよ。

「おゝい。」

「『『『『『！！！！！！』』』』』」

「え」

なんだ？どした？百恵先輩以外が固まったぞ？？

すると、島津……いや、ガクトと一子が急に近づき、肩を掴んでガクガク揺すり始めた。

風間ファミリーもこっちに来た。

「お前！…お前！…どつゆつことだよ！…」どつゆつこと…？  
零斗！…」

「（ガクガクガクガク）ちよ……やめーい！……あんだよ……？」  
と、



「はい。」 「大和君、どうぞ。」

「零斗君は何故あんな所に行っていたのですかー？」

「頼まれたからです。誰にかは言いません。」

「はい。」 「京さん、どうぞ。」

「一週間の無断欠席はこのせいですかー？」

「はい、そうです。」

「はいはい！」 「一子さん、どうぞ。」

「一緒に話してた人は誰ですかー。」 「ガルシアさんです。」  
「???'?」

「はい。」 「はい、百代さん、どうぞ。」

「面白そうなので、後で私と一試合」お断りします。」……………  
（……………）  
また過労死したくは無い。

「はい。」 「はい、……………???も かくん、どうぞ。」

「覚えてないんかい！！師岡だってば！！」 「冗談WWW。で?」

「なんだ……。学園長がこっちに来てますが、どうするつもりですかー？」

「D A S H!! 『ガシイ!』 なにい!!?」

「そう焦るでない。話を聞かせてくれ。」

走って逃走を図ろうとした時には首根っこを押さえられていた……  
強エ……(汗)

「の？良かるっ?」

「あは、あははははっはっはっは!!……タスケテ……  
……!!」

助けを請うもファミリーの皆は完全に沈黙。はくじょーものー!!!!

こうして俺はズルズルと個室に引きずられていったのだった……  
……

### 第十三話「誤魔化し」（後書き）

はい、まだ続きます。

ところで、作者は『みてみん』にも登録しているんで、

挿絵を入れられるんですが……絵心が皆無なんです……

（美術が10段階で……いえない）

どっか……イラストの描き方を初歩の初歩から教えてくれるサイト  
ないですか???? ぜひぜひ教えてください！

アンケートもよろしく！

## 第十四話「退学!？」（前書き）

どもども！作者です！

さてと、ちょっと短い気もしますがアンケートから結論を出しました！

結果・・・燕さん純愛 にはるかに分があったものの、

「あのフラグ立てといてそれは無い」という意見も  
たくさんいただきました・・・

結果、両方の意見を良い具合にごっちゃにして使うことに  
いたしました！

まず、ヒロインは一子と燕の二人のままです、ままなんです。

燕さん純愛 派の人の多さを考慮し、

燕さんを贖済することに決めました！！（開き直り）

ヒロインは二人、でもエンドは燕さん・・・みたいなの？

・・・良い例えが見つからん・・・けど！これは言えます。

・・・一子とのイチャラブはおそらく少なめです。

燕純愛『寄り』って事です。だいが寄つてると思いますがね・・・

一子フラグがぶち壊されてる気がしなくも無いです・・・

・・・つてかします・・・

どちらかというところ燕派の人にお勧めなSSにしていくつもりです。

思い通りになんなかつた人ゴメンネ・・・（；-人-）

とくに一子純愛 希望の方・・・申し訳ない！！

アンケートにご協力くださった皆さん、ありがとうございました！

これからも『闇殺し』をよろしく願います！！

長くなつてしまいましたね・・・では本編をどうぞ。





「!?!」 なんと!

「……………はい、たぶん学園長の予想であってます。……………俺は暗殺者です。……………快楽殺人者では無いですけど……………」

「やばりの。こちらでも調べさせてもらったぞ? 『空裂零斗』、裏の業界では最強と名高い暗殺者。裏の『日本治安維持組織』のEXランクに所属しており、これまでも数多あまたの依頼をこなしてきた。

……………こんなところじゃろ??」

「……………全くその通りです。」

「しかし、お主の態度を見るからに好き好んで暗殺者になったわけではなさそうじゃな。」

「!?!……………分かりますかそうですかさすが学園長そのとおりですあのクソジジイのせいですというか空裂家のせいではいそうですとも全ての元凶はッ!?!(ギリギリ)」

「ま、まあ一旦落ち着きなさい……」

「ハッ！」

……いかにかん。学園長が引いていた。

「しかし……今回は戦地に行ったのじゃろ？そして政府組織に所属……」

……まるで傭兵じゃな。「学園長が呟く。

「そう言うと思いました……まあ最近は何人を殺すような依頼は来てませんがね。  
EXランクになったのはまだ良かったと思ってます。」

……全くその通りだ。まあ今回でこのランクの依頼は鬼畜だとい  
うことが  
身にしみただけな……

……と、そこで学園長が再び口を開いた。

「しかし、これだけの秘密を隠しておくのは大変だったのではない  
かの??？」

「や、そんな事はありません。基本『裏』の情報は表には流れませんから。」

「……今回は例外ですけど……」

「そうかの……」と、学園長がさらに真剣な顔つきになり。

「さて、空裂君。やはり学園内に暗殺者がいるというのはいただけん。」

今日の職員会議で全員一致で空裂零斗に処分を与えることが決定した。」

「……分かってます。煮るなり焼くなり刺身にするなり、何なりとせよ。」

「ほっほっほ……」 学園長は少し笑い、言った。

「では、空裂零斗を退学処分に処すこととする。」

!!!!!!

「ッ!!.....そんな.....」  
呆然と呟く俺。と、学園長は悪戯っぽい笑みを浮かべ、

「なあに。めんどくさい教師達を黙らせるだけの形だけの退学じゃよ。」

これなら『依頼』があっても出席日数を気にする事は無いぞい。  
学園に来るのはOKじゃ、『生徒として』ではないがの。」

「.....なんだー.....そういつことかよ.....」

「それと、もう一つ条件がある。」

「!.....なんですか?」

「この学園の体育、武道の講師になって欲しい。」

「!!!!!!」 なんだと!!!?

「お断りします。同級生に暗殺術を教えるとかシユールすぎて笑えません。」

「初歩の初歩では一緒じゃよ。足捌きとかの。発展系ではなく武道とも通じる所を

鍛えてやって欲しいのじゃ。『気』の鍛え方とかな・・・面白そうじゃの・・・。」

・・・・・・待てや爺さん

「ええーーーーー・・・・・・でも・・・教員免許ねーし・・・・。」

「これは命令じゃ。従わないとほんとにここに来られなくなるぞい?」

「ぜひやらせていただきます。」

俺の安らぎの場を取り上げないで下さい!!! (泣)

「そうか。・・・もう一つ良いかの??」

「まだあるんかい!!!・・・ですか。」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

「求められた時は百代の相手をしてもらいたい。最近あやつは欲求不満のようでの。」

・・・・・・・・今日一番の爆弾発言来ましたよ・・・・・・・・

「お断りしま・・・」  
「ほう・・・・・・・・良いのかの?・・・・・・・・」  
「う・・・・・・・・」

分かりましたよ・・・・・・・・たまにですよ?・・・・・・・・」

それを言われては頭が上がらない・・・・・・・・生きていけるんだろうか、俺は・・・・・・・・orz

「ただし!これだけは聞いて欲しい。『裏』の依頼の時にはここには来られません。」

・・・・・・・・まあいつか殺し屋の看板なんかぶち割ってやりますが

ね………」

「ふおっふおっふお……両方とも分かっただわ。では、ごうい  
うことでのよいの??」

では最後の授業を楽しんでください。」

「はい………」 かなり損な取引だった感がなくも無いんだが・

……

……まあいいや、これはこれで楽しそうだし……

こうして俺は、『若先生』と『サンドバッグ』の称号を手に入れた・

……

でも、だんだんと表の世界に浮上してこれてるな。よしよし……  
ザマーミロジジイ。

（教室前）

「……しかし……今日で授業も最後とはな………」

ドアの前で呟く。………ん??………!!



気づいた。・・・自覚した・・・

「先生になる 学園には通える 先生 「勉強はしなくてもいい」・・・」

・・・

・・・キタ  
！！  
（。。（。。（。。）

ありがとう学園長！！損どころじゃなかった！お得すぎる！！！！  
改めて学園長様を尊敬することを誓う俺。

「よし、入ろう。」すがすがしい気分で教室に入場。

「遅れてすみませんでしたー。」

中に入ると、五時間目のLHRの時間だった。……あれ？もうこんな時間！？

「ああ、空裂か、ちょうど良い。皆が『空裂は何を聞かれているのか』と

やかましくてな。説明してやれ。私も知らんからな。」

「……ほーい。」　そっさい、俺は教壇に立って言った。

「ええーと……簡単にゆつとー……」

「今日で退学することになりました。」

「……………」

「」



クラスが騒然となる。

「静かにしろ！！LHRの続きをするぞ！」

梅子先生が皆を黙らせ、またLHRの続きが始まった……

……あれ？最後の授業が授業じゃないって……  
なの??

～放課後、河川敷～

「ふうふう……疲れたな……授業受けてないのに。」

河川敷を歩く、その横にはやいのやいのと騒ぐ風間ファミリーの面々が。

「しかしよー、零斗ー、退学になるほどの事っていったいなんなんだ？」

ふと翔一が聞いてくる。

「言わねーよ。これは言わねえ。絶対にだ。」

「でも焦っちゃったわよ……いきなり退学だなんて言いだすんだもん……」

「悪いな一子、でもまあ明日からも来るからな。」 「うん！」

……教師的な意味でね

「さーて……話は聞いたぞ零斗……私と決闘しろ……」

「ヒイ!?!」

……どうやら学園長はサンドバックの件をもう伝え(てしまった)たらしい。

……体がもたねえ……だが……

「俺に……拒否権が無いッッ!!! (泣)」

「そついつことだな……さあ始めようじゃないかあ……」

「ん？どついつことだ零斗？」 おお、ナイス質問大和。

「俺が退学になってなお来る理由の半分が先輩のサンドバッグだからだよ……。」

「……………ドンマイ……………」

「ありがとう……………」

「では、もう半分とはなんなのだ？」 クリス、鋭い。

「それは明日になってみりゃ分かるよ……つと！俺こつちだから、じゃなー……  
……ダアッッシュュ！！！！」  
一気に猛ダツシュ。

さりげなく決闘を回避することに成功。ふはは。拒否はしてませんよ？（屁理屈）

すっぱかされた先輩が（；・・・）な顔をしていたが、今回は引かせてもらう！  
戦術的撤退だ！

俺は皆と別れた後、本屋に寄り、武術系の入門編から上級編までを棚から一気に

ごっそりかつさらい、家に帰った。

一つ空裂流・・・いや、『零斗流』的なもんでも考えるか（基礎ね）。

こうして、俺は深夜近くまで武術の参考書を読み漁ったのだ・・・

・・・これぞ一夜漬け！

第十四話「退学!？」（後書き）

はい。急展開ですね。

一風変わった体育教師の誕生ですWWW

次からは『新・闇殺し』といっても過言ではありませんね。

新たな零斗君の教師（？）生活!と『裏』での生活をお楽しみください。



第十五話「初授業」(前書き)

どもども！今回は初授業！燕先輩のクラスから！

今回は長めです。ではどうぞ！



「いや、スーツとかふざけんで下さい。何で大人はあんなもん着れるんですか。」  
今のゆつたり制服気に入ってるの!!

「ほほ、まあよい。先生方には皆お主の処分内容を伝えておいた。ほれ、これが時間割じゃ。おぬしは『武道』専門じゃ。他はルー・イー先生が

教えられておる。お主は武道だけを、主に三年生に、たまに一、二年生に教えてやって

貰いたい。三年が一番武道の授業数は多いし、

割とこの学園も財政難じゃからの……給料は……。」

「人使い荒え……でもタダ働きで良いですよ?この学園に通えるだけで嬉しいですからね。」

大体金なら腐るほどある……実際腐った金だが。すると学園長が

「ほ、本当かね!!助かるぞい!!……これで武道の教師は雇わんでよくなった

の……ほくほくじゃわい(ニヤ(これでお主は『ボランティア』

というところで政府からもやいのやいのといわれんでよいわい。」

「……学園長？お顔が崩れてますよ？」

「まあそうでしょうね……でもま、金ならたまってるんで心配なく。」

「ありがたやありがたや……さて、ここが『職員室』じゃ。」

「……なんだとう？」

「あがつ……ま、まさか学園長……職員室なんですかい……？」

「当たり前じゃろ？お主の席は入り口から近くしといてやったぞい。」

「いや、そんなどや顔しないで下さい……すんな。」

「ハア……ねえ学園長……職員室は流石に息が詰まります、授業無いときは裏で寝てていいですか。職員会議とかボランティアには関係ないでしょう？」

「よいぞ。ただし、遅れるでないぞ？まあお主の脚力を使えば大丈

夫じゃろつがの。」

……そんなことで使わねえよ……

「あ、学園長。俺が教えるとなると模範的な道からそれますが良いですか？」

「好きに教えなさい。武道などは形だけでできておつてもダメじゃ。

その点

実戦の中で育ってきたお主は適任じゃろつて……さて、とりあえず

先生方に自己紹介しておきなさい。（『裏』の住人は世渡り上手じゃからのお。）」

「ほーい……!??!?!?もう入つてた!?!」

いつの間にか俺は流れで職員室を歩いていた。……誘導しおつたな……

「あ………あー………しよーがないか。」そういい、一番前に立つ。

「えと、空裂零斗です。退学して、ここに来ると引き換えに武道を教えることに

なりました。普段は裏の芝生にあります。どうぞよろしく。」

・・・パチパチと拍手を浴びる。先生方はその後でザワザワと騒ぎ出した。

「じゃ、後は学園長、お願いします。」

そう言い、学園長が上手く俺の事情を伝えてくれる（暗殺云々抜きで）のを聞き流す。

「では、今日も一日よろしくお願いしますぞ。」

「はい」「はい」「はい」「はい」

そついい、皆ぞろぞろと職員室を出る。どうやら俺が講師をするのが気に食わない

先生もいるようだ。・・・睨むな睨むな。と、

「ワタシも体育教師です。ルー・イーと言います。よろしく零斗君。」

「あ、よろしくお願いします。いつもは裏の芝生にいます。職員室は流石に息が詰まりますから・・・」

「ハハハ……では。」 おお、いい先生もいるもんだ。ルーさんね……

「さつてとー……最初の授業は……三年のFクラスか……」

……げ……ここって確か……百代先輩の……  
あー……（焦）

変な汗をかきながら、俺は初授業の3-Fに向かうのだった……

（3-F前）

『キーンコーンカーンコーン』チャイムが鳴る。

『なあ、どうして今日は教室なんだ？』

『なんでも、今日から武道の先生は新しい先生になるんだってさ！』

『ほんとに！楽しみだわあ〜』

『ほう……それはぜひ手合わせしてみたいな。楽しみだ。』

『百代ちゃんが相手にしたら死んじゃうよ……』





．．．ん？聞き覚えが．．．．．

「ああ、燕先輩もここだったんですか。」  
そうか．．．あれ？．．．．．この二人がいれば

．．．教えることなくね？．．．．．

「いや、そこまで驚かんでも．．．．．驚くか。さてと、自己紹介からしようか、  
名前は空裂零斗、ちょっと色々と『事情』がばれて昨日退学しました。」

「!?!?!?．．．どういうこと!?!」燕先輩、取り乱しすぎ．．．

まあまあ．．．で、学園に来ての良い代わりに『武道』を教えろといわれたんで

今日からタダ働きの武道講師といった所です。

無期限なんでよろしく。教えるのは素人だけだね。」

「え．．．．．零斗君ってあの百代さんを倒したっていう．．．」

「……………っていうかなんかつかっこよくない!？」

「あ、それ分かる）（目が良いよねー!。」

あざっす。なかなかの好印象のようだ。

「っしや。何か質問ある人!。」

『ババツ!』……………一瞬にしてクラスのほとんどの手が……………

「うおっ……………じゃ、じゃあ……………青木君。あ、俺もタメるけどそっちもタメて良いよ。後輩に敬語使うとかイラつくでしょ。」

「分かりました……………先生、何で退学になったの?」

「あ、『先生』はつけんだね……………。理由は言わない、絶対言わない。」

知ってんの学園長だけだから。」

……………答えになってねーか。

「はい。」 「ん、えつと……………谷さん。」

「好きな物なにー?後嫌いなものも。」

「好きなものは……うたた寝、昼寝でも爆睡でもなく。あと純粹な

闘いも好き。食べ物でいうと和食大好き、特に納豆と茶漬け。……

……こら、じじくさいとかゆうな。

嫌いなのは自分の爺さんと鯖とかぼちゃ。位かな……」

「随分詳しいですね……。」「こんぐらいはいわねーと。……他には……?」

「はい。」「はい……高峰君。」

「百代さんに勝ったというのは本当なのか??」

「ほんとーだ。つつつてもあれだ。数秒後に俺も力尽きたから際どいんだけどな。」

俺がそう答えると

「おおおおお……。」「え……あの噂ほんとだったの!??」

「スゲーー!」

すごい賞賛された……あり

「え、じゃあツバメちゃんとも闘ったの??」

「いや。まだ・・・というか闘う気も無いけど・・・」

「『『『『じゃあこんど闘ってみて!!』』』』」　　すげえ、五人八モリかよ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・だど。」　　燕先輩のほうを向くと

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「あら?何か不機嫌?」

「・・・・・・・・・・なんで退学のこと言わなかったのさ。」

「いや、昨日決まったばっかだから。しよーがねーよ?」

「んーーーーー!でもさあ!」　　「ま、過ぎたことだし良いでしよ。」

「他には・・・そろそろか。』はいはーい!』うお、テンション高!



余計に機嫌が悪くなっていた。……だから……機嫌直せって……

「何で制服着てるんだ？」

「誰がスーツなんて着るか。制服が一番！」　これは正論。と、そんなことを言っていると、

『キーンコーンカーンコーン』

「お、今日は自己紹介だったな。つーぎーはーっと、体育館だな。俺はだいたい

裏の芝生に居りまーす。

次回は何も持ってこなくて良いから。教科書もな。じゃ、号令！」

号令がかかり、授業が終わる。なかなかの好印象だったと思う。

「さて……かえろ……」……と

「ズサッ！」　周りを一瞬で囲まれた。

「速い!？」  
そして、

「ねえ!空裂先生!・・・いや!零斗先生!」 「あの噂は・・・」

「彼女・・・!!」 「百代先輩・・・」

「あーーーーー!!!つと!聞き取れねーよ!次々!次の授業でな!」

「はい・・・。」 「そういうと皆はわらわらと教室を出始めた。俺も出ようとしたが、

・・・まだ燕先輩は不機嫌面ですか・・・

「先輩、機嫌直してくださいよ・・・。」

「・・・。」

「・・・お昼ご飯食べましょう、今日。」 「・・・もう一押し。」

「・・・奢りますから?」 「・・・もーちよつと。」

「・・・じゃ今日一緒に帰りましょう。」

そのときにできるだけ詳しく話しますから……」

「……むふふ……よし！それで妥協しよう！……」  
打って変わって笑顔になる先輩。……。

「ったく……ずるがしこい人ですね……」

「器用といってほしいな」「器用な人ですね。」「よろしい。」

ふいふい……まあ機嫌が直ってよかった……。

「じゃ、また……」「うん、またあとでね！」

声も随分上機嫌だな……

やれやれと呟きながら俺は次の授業へと向かった……

これおんなじことを繰り返すって結構つらいね……

〳零斗の去った後〵

零斗が去った後の教室はまだ零斗の話題で盛り上がっていた。



そんな中……

「……………ふふっ」

嬉しそうに燕が笑った。と、

「そういえば、さっきは燕、随分取り乱してたな。珍しい。」

百代が声を掛けた。

「あんなに慌てたツバメちゃんを見たのは初めてだよ。」

女子生徒も大勢集まってきた。始めこそ苦笑いをしていた燕だったが……

「あー！分かったー！ツバメちゃん、空裂君のことが好きなんですよー！」

一人の女生徒が爆弾発言を投下した。

「ぶふっ！！？な、なな、何言ってるのさ！！？」「見事に取り乱す燕。」

「あーやっぱりー！確信だー！ー！。」

どんどん教室中がその話題になる。

「もう！ち、違っつてばあ！！」　もはや誰も静止は聞かない。

拳句の果てには、

「ほお、燕は零斗が好きだったのか。なるほど。」　百代まで納得してしまった。

「ちが、違・・・ちが・・・うっうっうっうっ！！！」

皆の視線と『違っ！！』と言い切れない自分に赤面してとうとう机に突っ伏す燕。

結局、燕は時間いっぱいからかわれたのだった……………

第十五話「初授業」(後書き)

どーでしたか?・・・燕先輩可愛え・・・

・・・誰かルー師範代の口調を教えてください!!!(涙)

ではまた次回

## 第十六話「新たな依頼」(前書き)

どもども！作者です！

ここで、アンケートでは無いですが、皆さんに聞きたいことがあります。

作者は現在、一話を2000〜4000文字ぐらいで投稿しております。

さて、どうでしょう？皆さんは10000文字ぐらいになってからの三日おきぐらいの更新が良いですか？それともできるだけ毎日の・・・つまり今のままが良いですか？

ぜひ参考にさせていただきたい！

まあとりあえず本編をどうぞ。

## 第十六話「新たな依頼」

～四時間後～

「ふいい……終わった……」

思わず溜息をついてしまう。今までの授業は全て三年生のクラスだった。が……

……結構同じことを繰り返すのって……きついね……

そんな俺は現在裏庭の芝生に寝転がっている。俺のベストポジションだ。

「ああ……もう昼か……そーだ、燕先輩来るんだっけ……?」

そうだった……俺の奢りだった……

若干のはめられた感に陥っていると、

「お、いたいた！ご飯食べにいこー!」

燕先輩が来た、やっぱりね。

「分かりました……」

「もちろん零斗君の奢りね!!有言実行!(バシバシ)」  
結構な力で俺の頭をはたいてくる先輩……

「ちょ、痛、叩くな先輩……それはそうと、ハメましたね……  
・?」

「……………(零斗君が悪いんだよ?)……………」  
先輩が何か呟いた。え?なんて言った?

「なんて言っただんです?」「零斗君には教えな―い!」「ええ  
――……………」

「ま、いいか、行きましょう。」「うん!」

こうして俺達二人はたわいも無い話をしながら食堂に向かった。

〈食堂〉

「さて、いただきます。」「」「チになりま―す!」「……………」  
「……………」

俺の前には山かけ定食、燕先輩の前にはAランチが並んでいる。

「うーん、何か足んねーんだよなあ……………?」  
何気なく呟くと、

「零斗君!そんな時こそこれだよ!」  
……………  
「うん?なんだって……………」

先輩が腰につけたバッグから『松永納豆』を取り出す。 ……!!

「……………それだ!」  
「ふふ、ほれ。」  
井の横に納豆を置いてくれる先輩。 ……しかも、

「……………サイズが違ってたとう!?!」  
明らかに前見たのよりもでかかった。

「よくぞ聞いてくれました!『松永納豆』は大中小の三種類!真剣  
でお腹が減った時、  
小腹がすいた時、おやつにも最適!」  
商品の宣伝を大声で始める先輩。

「イヤ、おやつはねーよ!後その中には納豆しか入れてないんです  
か?」

なんて商売魂のある人なんだ……

「うん、大体これしか入ってないよ？」

「まじか……）。。）（まあいいや、いただきます！」  
がつがつと井をかきこむ俺（With納豆）、そっぴやネバナネ系  
ばっかじゃん！  
と、

俺が食う姿を、なぜか先輩が凝視していた……

「んむ??（ゴクン）どうかしましたか？」

「!ノノノ、いやいや！なんでーもなーいよー（口笛）  
誤魔化すなよ。目が泳いでんぞ？おーい……」

「????……じゃ良いですけど……」  
しばらく二人で食べていると……

「??？」

先輩と俺は視線を感じ、振り向いた……すると、

「」「」「」……。「」「」「」「」うわあ



!?!」

食堂の大部分の生徒がこっちを見ていた……

「なんじゃこの注目度は……さっさと食いませう先輩。」

「う、うん……。」

いっそう食うスピードを上げる先輩と俺。

しばらくして食い終わり、先輩と俺はそそくさと食堂を後にした……

なお、注目されていたのは退学の噂が流れていた零斗と燕と一緒にいたことなのだが

そんな事には全く気づかない二人であった……。

しばらくして俺は先輩と裏庭へと歩を進めていた。

「ふー、ご馳走様です!」「……どーいたしまして……」  
ジト目で先輩を見る。まだそれを延ばしますか……。

と、

(~~~~~!!!)

俺のケータイが振動を伝えた。



移動方法、手段は・・・・・・・・・・到着目標刻・・・・・・・・

・・・・・・・・・・明日午前・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・ほらきた。これだよまた国外だよチクショーー  
ー!!!!」

しかも、俺に頼むって事は手に負えないってことたる!?

・・・・・・・・・・しかし、政府も俺が殺したくないと思ってることを  
察してくれているようだ。そこが唯一ありがたい所かな。」

一人で愚痴る。最近国外ばっかじゃん!・・・・・・・・まあ国内でもやだけ  
ど!

・・・・・・・・まあいくしかねーんだろーなあ・・・・・・・・どうやったら  
依頼を来ないようにできるか・・・・・・・・  
そんなことを真剣に考える。

とここで、俺は気づいてしまった・・・・・・・・

「明日午前!?!急すぎる!?!すぐ出ねえと!?!」

「何一人でぶつぶつ言ってるのさ???」

燕先輩が不思議そうな顔で聞いてくるが、ちよっと時間がリアルに

やばい。

「先輩、すみません！ちょっと今日は一緒に帰れそうにありません！！」

「ええー！ー！！なんで！？」 「急用ができたんです！また今度で！！」

「むー！ー！……でも急用なら仕方ないね！……いつてらっしゃい！……」

……今度は承諾してくれたか。

「ありがとうございます！じゃっ！ー！」

『ドシユン！ー！』、俺はとにかく全速力で走った。向かうは学園長室だ。

『パサリ……』

「あ、零斗君……」

何か燕先輩が言っていたが聞かなかった。時間がねえ！ー！

その時、俺が後ろポケットに納めていたケータイが芝生の上に落ちていたのに

俺は全く気づかなかった………。

あっという間に着き、ドアを蹴破る。ガチで。

「『バガン！』 つつ！学園長！！『例の物』は！？」

「ぬおっ！………もう少しゆっくり開けなさい………心臓に悪いわい………」

「すみません！………で？『例の物』はできてます！？後、午後には空けます！

『依頼』が来たんで！！」

「なんと！本当かね！？………分かった。もう出来て居るぞ？」

「本当ですか！ありがとうございます！」 「まあ少し落ち着きなさい。」

「・・・そうだな。少し落ち着いたほうが良いか・・・」

「・・・ふう・・・で、学園長、お願いします。」

『例の物』とは、

それは、昨日、後付で条件に入れておいたこと・・・昨日の放課後に、帰る前に学園長にあつて渡したものだ。

『いたいた、学園長。もう一つ条件をつけていいですか？』

『なにかの？』

『これとこれを・・・レプリカに登録して欲しいんです。』

これなら人を殺さなくてすみませうから。』

『ほう・・・分かった。明日には出来て居るじゃろつて。』

『いったいどんな技術なんですか・・・まあ、お願いします。』

『ほうほうほ・・・任せておきなさい。』

そんなやり取りを交わし、俺が渡したものは大きなアタツシユケース、

「……………そう、レクロだ。もう一つは……………」

手加減が出来なかった為に、使っていなかった対集団用の接近武器『打ち根』の前に愛用していた暗具だ。

「ほれ、持って行くが良い。」  
そういつて渡されたものは、アタツシユケースと、

「……………十本の鋭く研がれた、長い長い『鋼線』<sup>ワイヤー</sup>。

半端では無い細さで、動かしていると見えなくなる、『紐』ではなく、『糸』でもない。

「……………『線』だ。」

「……………俺は打ち根よりもこっちのほうを愛用していたが、これでは『殺す』ことしかできなかったのだ。」

「しかし……………武道の武器とはやはり違うのう……………」

「そうですね、暗具ははっきり言って『セコい』ですから。まあなんにしても、

本当にありがとうございました。行って来ます。」

「……………絶対に死ぬでないぞ。」学園長が呟く。……………っておい！

「死亡フラグ建てんで下さい！……………では。」

そう言い、一気に学園長室を出る。さて、本気で時間がねえぞ。確か今回はあっち側が迎えに来てくれるんだったな。場所は『裏ギルド』  
屋上のヘリポートが。

「っしや！急げ急げ！」

そう叫び、俺はタクシーを捕まえに学園を出たのだった。

と、

「零斗君…！」



切羽詰った声が飛んできた。振り向くと・・・・・・・・・・燕先輩がいた。

随分動揺した様子だったが、今は構ってられん！

「零斗君！！」

「すいませーん！！用事ならまた今度聞きますからー！！」  
思いつきり叫び、先輩に背を向けて再びダッシュする。

先輩はどうやら諦めたようだ。

俺はなぜか少し心にちくりと刺す痛みを覚えながら学園を後にした。  
・・・・・・・・

零斗が去った後、燕は呆然とその場で固まっていた。

「零斗君・・・・・・・・・・。」

動揺した声が出る。

その手には、零斗のケータイが、強く握り締められていた……

第十六話「新たな依頼」(後書き)

はい、燕にもばれる雰囲気満々ですね……

ちよつと急展開過ぎかなあ……とか思っています。

まあ次回もお楽しみに！前書きに書いたこと、

どっちが良いかできれば感想ください！（アンケートじゃんこれ……）

第十七話「逆襲と邂逅」(前書き)

ども！今回更なる真事実の発覚が！！

・・・まあネタバレは良くないですねWWW

ではどうござー！！

## 第十七話「逆襲と邂逅」

『バラバラバラバラ！……』

へりの音が遠ざかってゆく。現在俺は例のテロリストどもの巢食う拠点的な

ビル（ほぼ地下）の前にいる。

『援軍』もいるよ

「もうさっさと終わらそう！拠点一個目え！」

『バアン！』 鍵のかかった『はず』のドアを派手に蹴破る。

「！！！」 どうやら地下に大きく拠点は広がっているらしく、見張りが一人、呆気を取られている。

「とらあー！」

相手が何か発する前に、手に持っていた十本のワイヤーに『気』を込めて操り、相手をズタズタに切り裂く。死んでは無いんだけどね。相手から見れば何にやられたのかさっぱりなことだろう。

……そういえば前に一回だけ立ち読みしてみたライトノベ

ルに

こんなんあつたな・・・

・・・「七閃」だっけか??

そして、俺はすぐさま『援軍』を呼ぶ。

「ガルシア！取り押さえる！俺は進む！」

「おう！頼んだ！」

そういつてガルシアたちが突入してくる、もうどこの国が分かったも同然だな・・・

俺が気絶させた一人を捕縛しているガルシア隊を尻目に一気に奥へと進む。

「おらあああああああ！！」 わらわらと銃で武装した奴らが出てくる。

数多・・・流石は大組織だな。

『ガガガガガガ！』 通路で五人くらいがいつせいにマシンガンで弾をばら撒く。

普通なら蜂の巣にされてもおかしくない状況。しかし、

『シユラン！』と。

何も無いはずの空間で何かが瞬く。

一瞬の間をおいて、ぶち撒かれた弾丸は全て均等に半分になった。

もう一瞬後、やつらの服はずたずたになり  
全員同時に地に伏した。

この『気』が込められたワイヤーの切れ味は並の刀なんかとは比べ物にならないのだ。

「ふははははは！！無駄無駄あ！！」

どっちが悪役か分からないようなヤバイ笑みを浮かべ、俺はなお奥へと突き進む。

暗具をレプリカにもらったことで、俺のテンションはMAXに到達していた。

スペックそのままて人を殺さんでよくなるとかこれなんてチート？

「だらつつしやあ！！」『キラツ………ズバババツ！！』

薄暗い地下空間に蜘蛛の糸のような輝きが放たれる。そして俺の駆けた道をなぞるように

バタバタと人が倒れてゆく。ふはは、楽勝！

ワイヤーには『気』が込められているが所詮は線、ぜんぜんコストにならない。

ここが良いところなんだよなあ………。

「でも、前みたく過労死せんように節約しないと………」  
そんなことを考えながら暴れまわっていると、

『……零斗！戻れ！はめられた！こっちに……ぐはっ……』

服につけた通信用マイクからガルシアの切羽詰った声が飛んできた。つてか最後やられてなかったか？

しかし確かに、奥に進むにつれだんだんと人数が少なくなってきたな……

普通は逆なのに……。

「ちいつ！マジではめられたかこりゃ！？」

きびすを返し、入り口へと猛ダッシュする。『気』を脚力強化に使い、

屍を踏み越えてあつという間に戻る。戻ると、

「なんだこりゃ……おい！どうした！生きてるかガルシアっ！何があつたんだ！？」

自軍の半数が倒れていた。残っているのは後方で待機させている軍のみのはずだ。



死者もいるっぽい、その中にガルシアの姿を見つけ、飛びついて事情を聞く。

すると、ガルシアはゆっくりと口を開き、

「おう……俺はなんとかな……うかつだった、軍から情報が入った……」

偵察部隊によると……『本部』には誰もいなかったらしい……あつちは囷、こつちのが『本部』だ……大部隊が横に待ち伏せしてた……

気をつける……ここのを束ねる首領もいた……アイツ……半端じゃねえ戦闘力だ……。気をつける……」  
と言ってきた。

「！……だから！道理でごちゃごちゃ出てくると思ったぜ！やつらは今どこにいる！？そのボスの格好は！？」ガルシアに問い詰める。と、

「やつらの大部隊……おそらく全勢力だろう……後方の部隊を……」

ボスの風貌は……！！」  
ガルシアはそこまで言って少し黙り、俺を見て何かに気がついた様子で少し間を置き、  
口を開いた。

「風貌は……お前とよく似ていた……お前をそのまま

壮年にした感じだ……。」と。

「馬鹿言え！俺の親父だとも言つつもりか？もう親父は死んでるさ！」

思わず叫ばずにはいられなかった。

「だろうな……多分人違いだ……零斗、後方を……頼む……」  
援軍は既に呼んでおいた……」

「もう何も喋るな！分かった、任せとけ！」そう言い、俺は後方で軍が待機している

『はず』の地点に向かった……」



そして、その中心に一人、無傷無言で佇んでいる男が居た。

「あ、あんた……まさか……………」

声が震えた。そこにいたのは……………

俺だった。

いや、俺とそっくりな男だった。

しかも、そいつの武器は……………

「『打ち根』……………だと……………!？」



第十七話「逆襲と邂逅」(後書き)

どうでした?・・・はい、禁書です!なにか!? (開き直り)

次回、零斗の・・・!!が登場!!

お楽しみに!!あ、現在絶賛風邪引き中です・・・

ちょっと更新遅れるかもです・・・

第十八話「真実」（前書き）

はい、こんばんわ〜・・・いや、おはようございます・・・

今回は！零斗君の出生に関する『真実』です。

まあ相変わらずに駄文ですが、

しっかり付き合ってください！

あ、あと、改行とか『こうやれば読みやすいと思っ』っての

あったら下さい。自分も考えてますんで・・・

## 第十八話「真実」

「……………はじめまして。いや、久しぶりだな……………  
零斗。」

壊滅した戦場の真ん中にある男の声、それは……………  
いつかに聞いたことのある声だった。

そう、もう死んでいると、ずっと思ってきた、

人……………

「……………父さん!?!?!?」



そう、そこに立っていたのは、紛う事なき俺の父、  
『空裂くつびき貫斗かんと』だった。

「馬鹿な……嘘だろ……？死んだはずじゃ……」  
「？」

呆然と尋ねる。

「ふふ、甘いぞ零斗。」

「どういうことだッ！！」  
俺は確かにあのジジイから……！そこで、俺は一つの  
可能性を見つけた。

「アイツが……騙してたっというのか!？」

「し」名答。」

男……親父の返答に、俺の中の疑問が膨らむ。

「なんでそんなことをしてたんだ。死んだフリなんかしても、父さ

んには何の得も  
無いはずだ。」

すると、俺の問いに少し溜め、親父はこう返してきた。

「それはな……零斗、お前から『甘え』を取り去るためだ。」

「どづいづことだよ。」

「まだ分からないのか。お前は今、裏の世界では、ほぼトップの存在だ。」

何故そこまでにお前が強くなれたか分かるか？……そう、一切の『甘え』を私達が許さなかったからだ。思い出してみろお前の周りには人が居なかっただろう？」

「確かに……!!……じゃあ、もしかしたら母さんも生きてんのか!？」

後、父さんは何でこんなテロリスト集団のボスなんてやってんだよ!!」

俺の胸に僅かな希望が芽生えた。質問する俺の声が少し弾む。

しかし、親父の答えは、俺の想像をはるかに超え、また、俺の僅かな希望を消し去った。

「夜蝶やちようは……もう死んだ。俺が殺した。」

「は？」

思わず間の抜けた声が出た。今、この人は……なん  
て言った？？

俺が……殺した？……

「どづいつことだ！！なんでアンタが母さんを殺す！？」

「言ったはずだ、お前から甘えを取り去り、至高の暗殺者に育て上げるためだと。」

「。。」

親父の言葉に俺は絶句した。は？俺を育てるがために……母さんを……殺した！？

「な、なんだよ……何なんだよ……俺を生まれさせたのは……空裂家に新しい暗殺者が欲しかったからだっていうのか……?」  
一週まわって静かな声になる。

「まさしくその通りだ。空裂家は代々一人の子を産み、その子を暗殺者とし、空裂家を継がせることになっているのだ。だから、当時最強の暗殺者であった私、

空裂貫斗と同じく女で最強の暗殺者であった『夜蝶』……名字は捨てたそうだ……の子供を作ったのだ。空裂家の存続の為に。その後、俺と夜蝶は別の依頼で互いを殺すことになった……仕方が無いことだったのだよ……。

その後俺は渡米した。お前の前から消える為にな。……そこで気づいたのだよ。

この国には『変革』が必要だと。そこで俺は同じく『変革』を求める仲間と共にこのグループを立ち上げたというわけだ。」

なんでもないことのように真実を吐く親父、俺は、その話を呆然と聞いていた。自分の妻を殺して……この男は……。

『仕方が無いことだった』??

すぐには言葉が出ない。

「んな・・・・・・・・馬鹿な・・・・・・・・じゃあ・・・・俺に妙な『才能』があつたのも・・・」

全てに納得した。

と同時に俺の中で何かが壊れる音がした。俺は・・・・

家の為『だけ』に生まれてきた・・・・・・・・。

他に生きる目的も無く・・・・・・・・人を殺し・・・・・・・・次の礎となるために・・・・・・・・。

俺は・・・・・・・・・・・・・・・・

「はは、当たり前だろう？当時の最強同士を『掛け合わせた』のだから。

お前が戦闘好きなのも、小さい頃から気を扱えたことも、全て私と夜蝶の特徴だぞ？？」



人の殺せない武器……随分とぬるま湯につかっているようだな。」

「黙れ!! 黙れ黙れ黙れ!! お前なんかにつ!!」  
思わず叫ぶ。お前なんかに!!

学園を馬鹿にする権利は無いツツ!!

俺は一気に気を放出、圧縮した。側頭部から黒髪がじわじわと紅蓮に変わり、  
片目に怪しい光が灯った。

「ほう……! 何時の間にそんな技を習得した? はじめて見るな。」

「……に再び  
いまだ余裕をかましている父さん……とはもう呼ばない。男……  
肉薄、神速の斬撃を放つ。しかし

「!!!? ……避けられたツ! ?」

難なく……とは流石にいかなかったようだがほとんど避けられた。  
顔を掠めただけか。

……ここまで自分の父親が強かったとは思わなかった……が、

コイツは……俺が……殺す!!!

「おお……おお！良い気だ！その気だよ！最高の状態に近づいてるぞー！！」

目の前で男が歓喜している。最高の状態……負の感情によつて

力を最大限まで引き出している状態……つてことか……

そうなっていることを認識した俺は、圧縮した気を纏うのを『やめた』。

「！何故だ、何故全力を出さん！」

「喚くな。そんな感情に操られて全力を出した所で、アンタの思う壺だ。」

「……ふふ中々冷静じゃないか……だが、」



そう言うなり男はこっちの懐に突っ込んできた。打ち根を持って。だが……全く見えない速さじゃない!!

「見える!!」

打ち根の突きをかわし、カウンターにワイヤーで打ち根を持っているほうの腕を切り落とす!!

……貰った!!!!

……と思った。だが。

『ザシュッ!!!!』派手な音と共に切り裂かれたのは相手の上着だけ。

本来あるはずの腕が無い。

「甘い!」 鋭い声と共に蹴りが飛んできた。

「『ドゴッ!!』『ぐっ!!』」

うめきながら後退、男の腕を見る。胸部の服が膨らんでいる。アイツはあの一瞬で袖から腕を抜いていたのだ。

「ふう……ロックンロールな服にしゃがって……せいつ!!」

再び肉薄してくる。……ワイヤーじゃ無理だ!!

「くっそ！」 俺はワイヤーを全部放り投げ、ポッケから打ち根を取り出して  
応戦する。

「おりやりやりやりやりやりやあ!!」  
相手の突きをかわしつつひたすらに急所の位置を乱打する。  
が、こっちの攻撃もかわされる、

「くそ……くそおおおおお前……だけはあああああ  
あああ!!!!」

叫び、また距離が出来たアイツに突進する。  
また『負の感情』に押し流されそうになった。が、今度は抗わない。  
憎しみのままに闘う。だが……まだ全くまともに当たっていない。

と、

「ふう……そんなもんかア!!?」

急に男は咆哮を上げ、更なるスピードで突っ込んできた。

「ッ!!」かろうじてかわしたが・・・顔に一筋の血が垂れる。  
俺は男の顔を見据え・・・気づいた。

コイツも・・・戦闘狂だ・・・。

俺と同じような目をしている、いや、俺があつた男に似たのか・・・

「はあっ・・・はあ・・・かはっ！」  
息も乱れてきた。

「零斗、お前スタミナが無いな。もつと鍛えろ！もつと任務をこなせ！」  
そうすれば・・・強くなれる。そう、強くなれる!!」

「強くなれ！零斗！ひたすらに！何もかも捨てて強くなれ!!」  
強い語調で語りかけてくる、その言葉に、俺はまた我を忘れた。

「黙れええええええ!!」

俺は！何も捨てずに強くなつて見せる!!!!

「それが甘いといっているんだ!」

そして、再び俺は父さ……否、『敵』とぶつかり合った。

第十八話「真実」（後書き）

はい………悲しいですね……

零斗君は完全に動揺というか我を失っているようです。

次回は決着！お楽しみに！

## 第十九話「コイツヲコロス」(前書き)

どうも……………今回は親子の決着です！

中々グロイ描写になってしまいました…………まあこんなもんか。

そしてアポリオンさん！いつか、めどが立ったら

コラボもありだと思えます！！

では本編をどうぞ！



「『ガキツ!』……!!」  
避けるのは間に合わないと悟った俺は齒に気を込めて強化。  
顔に放たれた突きを齒で受ける。

「……………その気の応用力こそ、お前が最強である所以。  
……………だが!それだけでは勝てんぞ!」  
男がなお余裕(を装った)声で喋る。

「冗談言うな!!」いったん距離を取り、足元の死体が持っていた  
軍用ナイフを  
拾い、気を込めて投げつける。なんなく避けられた。が、

「それはフェイクだ!」 叫んで突っ込む。

「甘い、フェイクって自分で言っただけでどうする。」  
横に飛ぶ男、……………かかった!

「ツ……………!!」 男の足が宙に浮いた瞬間俺は、  
足で砂を蹴り上げた。男の目に向かって。

「……………つぐっ!」 見事にヒット。

「貰ったぜえええ!!」 打ち根で一気に首筋をツ!



しかし、男は、目を瞑っているにもかかわらず。ひょいひょいと連撃を裂けた、

「ふふふ・・・気は相手の察知にも使える。経験のなせる業だ。」

そして、打ち根を振りぬいて僅かな隙が出来た俺は、

「そらっ！！」

仰向けに組み伏せられた。しまった！！

「どうした、お前の力はこんなもんだったか？・・・やはり、学園に入ってから

明らかに腕が落ちているぞ・・・？」

そう言う、男は完全に勝者の笑みを浮かべている。

そして男はそのまま打ち根を振りかぶり・・・

・・・首を狙って振り下ろしてきた。



手にかかって!!!!!!

俺は反射的に、首を振って避けた。傍の死体の軍用拳銃を取って覆いかぶさるような体勢の男の首に押し付ける。

「!!!」男が一瞬、ほんの一瞬硬直する。そして、

引き金を引いた。迷いは無かった。そんなもの、捨てた。

290

『ダアン!』

耳をつんざく爆音が鳴り響くと同時、男の首の後ろからおびただしい量の血が噴き出す。上に噴き出した血は、全て下にいる自分の制服を染めた。

「.....」

あれだけ余裕を保っていた顔は驚愕の表情のまま停止。



仰向けのまま、しばらく大声で笑った、笑い転げた。

しばらくして、虚しさが全身を襲う。身体の怪我なんか比にならないほどに  
心が絶望に支配されていた。

ゆっくりと立ち上がる。『決着』がついた場所は最初に親父が居た、戦場のど真ん中だった。

「依頼……達成か……」 打ち根を手に持って佇み、呆然と呟く。

「俺は……どうすればいいんだ……  
……こんなこと……嫌なのに……  
……したくないのに……」

自分の思っていることが、言い訳にしか聞こえなかった。  
お前は……殺意を持って人を殺したじゃないか……。

動くという選択肢が頭に無い。本部はもうガルシアの呼んだ援軍によつて

もう片付いているだろう。

俺は死屍累々の戦場のど真ん中で、立ち尽くすしかなかった……

その後、何とか歩いてやってきたガルシアと他の生き残りの皆が見たものは、

屍の山の中心に無言で佇む一人の男……

……その光景は、奇しくも零斗が見た時の、父親の状況に酷似していた……。

293

「……零斗、帰還だ。病院に搬送しようか？」  
ガルシアがおおおと声を掛けてきた。

「……いや……いい……。帰る……」  
途切れ途切れに答える零斗。

ガルシアは続けた

「……零斗……こんな時に言うのも何だが……」

ありがとう。」

「……ああ、でも……もうこんなことはやりたくねえな……」

感情の消えかかった瞳で返す零斗。

「お前、本当に大丈夫か？……！！……まさか……いや、聞かないでおこう……」

全てを察したらしいガルシア、

「ああ……ありがとう……」

零斗はその一言だけを残し、後は帰国まで一切の言葉を放たなかった……

第十九話「コイツヲコロス」(後書き)

はい、お父さんは零斗君に殺されてしまいました……

でも零斗君の絶望も当然といえば当然ですね……

生きる目的がもう決められていたんだから……

では、次はいよいよ、燕先輩と再会します！



## 第二十話 真実（其の弐）（前書き）

今回は、燕先輩との再会……の、前に！

空裂家の秘密です。矛盾があるような気がしなくても無いですが

そこは目を瞑ってください……

ではどじろー！

## 第二十話 真実（其の貳）

『・・・・・・・・ボタン！』

自室のドアを閉める。思い切り閉めたはずなのに、閉まる時の音は随分遠くから聞こえたような気がした。

「もう・・・・・・・・学校が始まる時間だな・・・・・・・・・・・・・・・・」  
呟いてみたが、今は紛争から帰ってきた後のように学校へ行く気すらも  
起きなかった。

現在午前八時半。ぐらいだ。

「・・・・・・・・寝よう。」  
とりあえず現実逃避したい。そう漠然と思う。しかし、嫌だと思うほど考えてしまう。  
いろいろなことを。

「親父・・・・・・・・空裂家・・・・・・・・」  
空裂家の先代は今の俺と同じような絶望、この形容しがたい絶望をずっと味わってきたというのだろうか。

そもそも・・・・・・・・空裂家とは何だ？家系は？しきたりって何だ？  
親父の言っていた事は・・・・・・・・そこまで思考を進め、ふと  
呟く。

「調べてみる必要があるな……」  
自分の声に少しは意志が宿ったような気がした。とはいえ、

（分かっている……調べる『必要』なんか無いってことは……）

そう、必要な無い。それは単純な俺の願いだ。自分の生まれた空裂家、その過去がどうなっているのかが知りたい。

……実家に詳細な家系図が何かあったはずだ。小さい時、間違えてあの……たんすだったか押入れだったかを開けたら何か長すぎる……巻物？ではないがあった気がする。

「……実家に……行こう。盗みに。」  
さつきより明確な意志が宿る。

……過去を知った上で……俺は、空裂家を潰す。絶  
対潰す。

誰がなんと言おうと、一刻も早く潰す。  
親父のような人間を出すぐらいなら。俺が……この代で終わらせてやる。

立ち上がる。そして、俺は親父の血でべったり染まった制服を洗濯機に放り投げ、  
着替えてから実家へと向かった。

少し遠いが、行けない距離じゃない。

くしばらくして〜

「おし、着いた。」

電車を乗り継ぎ、川神市のはずれのはずれ、山のふもとにある実家の門前に俺は立っていた。こそつと。

「ヤツは……いないな……いない!?」

思わぬラッキーだ。暇なんだろうか……まあ一人ならそりゃ暇だろうな。

「『パリン!』」

一番目立たない所のガラスを割り、悠々と進入する。勝手知ったる家だ、構造は大体覚えてる。

「しかし……懐かしいな……悪い意味で。」

確かに懐かしかったのは懐かしかったが、その思い出が全部悪い思い出なので

複雑な気分だ。……さて、家捜しだ。といってもこの家、ただっ広いくせに

家具が異様に少ないからあつという間に見当がつく。スペースの無駄遣いというやつだ。

「ここここ。」ジジイの部屋に侵入、畳部屋にぼつねんと置かれた箆笥の元へ

急ぐ。箆笥だったか。……ここだよな??

がさがさと中身を漁る……が、

「……無いな。」

どの引き出しの中にも家系図らしきものはなかった。じゃあどこだ？さらに詳しく調べてみたが、どうやら筆筭ではないようだ。

「……じゃあどこにあるってんだ……」

候補が思いつかず、半分諦めかける。部屋を出ようとしたがそこで部屋の隅、

小さな卓袱台に気づいた。そこに……

「……あれ？……あれじゃね？……あれじゃね！？」

……置いてあった。やっぱり巻物だ。

「何でこんなところに……俺に見せる気だったのか？？」  
まあいい、ありがたく貰っていこう。

俺はそのなかなか大きな大きさの巻物を手に取り、急ぎ足で空裂家を脱出した。

「何か……あっさり終わったな……」

……こうして、なんともさえない侵入劇は幕を閉じた。  
……まいいか。目的の物は手に入ったし。

「またまたしばらくして」

『ガチャツ………パタン。』

自室のドアを閉める。今度はゆっくりと。心はだいぶ落ち着いていた。

「………さて。」

早速見せてもらうとしよう。にしても、この紙古いな……いや、

最初の方は新しい。どうやらちよつとずつ紙を継ぎ足していったようだ。

巻物的なものを開く俺。緊張はする、しかし、これだけは見て、覚えておかなければ。

巻物の最初は初代からではなく、結構最近のからだった。とはいえ、十………十五人ぐらいは書いてありそうだ。

「うおっ………随分詳細な説明だな………」

最初の家系図は飛ばして読むと、明らかに詳しすぎる。先祖様の紹介（？）が

書いてあった。すごいなこれ………人物年表??

ゆっくりと読み進める俺。なんと………か読める場所がほとんどで時間はむちゃくちゃかかる。が、だんだんとコツを掴んできた。

そして、読み進めるうちに俺の顔はどんどん曇ってきた。

「……………なんなんだこりゃ……………」  
家系図の内容は……………」

……………とにかくひどいものだった。

初代から書いてあったわけでは無いのでしきたりとかそういうのはよく分からなかった。が、それを差し引いてもこれは……………酷い。

何が酷いか。

「……………尊属殺が……………多すぎる……………」  
そう。異常なまでに尊属殺が多かった。ほとんどの人が自分の親を殺している。

「……………じゃ、じゃあ……………皆……………俺と同じよう  
な道を……………」

違った。俺が皆と同じような道を辿っているのか。

暗殺者として一人育てられ、親に絶望して殺し、結局運命から逃げられずに

自分の子の傍から消え、……………子に殺され……………。

「……こんなこと……あつて良いのか……?」  
ここまでとは正直思つて無かつた。俺は早くも読むのをやめた。見たくない。

……こんな事はやめたい。と、  
ずっとそう思つてきた。だが、そう言いながら、俺もきつちりこの中の皆と

同じことをしているじゃないか。  
親を殺して、運命を断ち切ろうともがいていた。それを、皆繰り返してきたんだ……。  
でも結局諦めて、同じような運命を辿る。いつか俺も……。

「はは……無様だなあ……空裂零斗……何が『殺し  
なんかしたくない』  
だ?……きつちり空裂家の一部じゃないか……」

呆然と呟く。何も変わつてない……。

俺はもう嫌になつて巻物を閉じた。と、

『ペラ……』少し巻物が転がり、一番最後が見えた。  
そこには……



『空裂零斗、歴代最高の逸材といっても過言ではない。親である空裂貫斗を殺し、空裂家を継ぐ。』

と書いてあった。俺だった。

ジジイの筆跡だ。これを書いてやがったのか！

「!!!!!!……馬鹿な!!!」

思わず叫んでしまった。そこに書いてあったのは、俺の未来だったからだ。

しかも、今の所間違っていない。実際に俺は親父を殺した……ジジイはまだ俺が親父を殺したことを知らないはずなのに……

「!……そうか、これは……当分前に書かれてる……

」  
予想されていたのか。

「な、なんてこった……このままじゃ……」

変えないと、いや、変えないようにしないと、自分を。

今の意志を持ち、空裂家を潰す。これを忘れないようにしないと……

「ふう……」

俺は再び空裂家撲滅を誓い、気分転換に河川敷へ出ることにした。

現在時刻は午後三時、もうすぐ夕方だ。

第二十話 真実（其の弐）（後書き）

はい、運命を断ち切るつもりでやったことが運命を造っていた  
ということでした。・・・頑張れ！

次回はやっと燕先輩との再会・・・だと思えます・・・

一子はまだ少し後に出しますね（withファミリー的）・・・

ではまた

## 第二十一話「再開と気づき」(前書き)

ども、今回は燕先輩との再会です！

でもって、ばねます。まあ前置きはこのくらいに(本音言いつと眠い)。

ではではさうびねー！

## 第二十一話「再開と気づき」

「『むむ』……はあ……」

思わず溜息をつく。今回はいろんなことがあった。あり過ぎた。

「しかし……」  
なんと言っても、今までやってきたことが全て無駄だった、どころかマイナスになっていると考えると……鬱になる。

「……」  
無言で、芝生の土手に寝そべったまま空を見る。空はそろそろ茜色に染まってきていた。

「……」  
空をぼんやりと眺め続ける。

「……」  
空をぼんやりと眺め続ける。

「……」  
空をぼんやりと眺め……

「……、！……！」

「………続けていると、ある重大な事を忘れていたことに気がついた。」  
「そう。」

「やば………ワイヤー………回収………してねえ………。」  
「………例によって詰めが甘い俺だった………。」

「………あああ（orz）」  
鬱ゲージ（？）がどんどん溜まっていく。あれ………ずっと使ってたのに………と、そこで、ふと思う。

「武器を………暗具じゃないやつにするか………いい機会だし………。」  
ちよつと真剣に考えてみる。ちなみにワイヤーが消えた（自分のせい）今、自分の中の武器ランキングでは圧倒的に打ち根が一位だ。異論は認めん。

しかし………暗殺者を辞めたいと思うのなら、まず暗具をやめるべきなのでは？  
「そう思い、もし他の武器を使うなら………と考えてみる。」

「飛び道具は論外だな。」  
「クロとかもろに暗殺者のそれだし。ちなみに、俺が最も苦手（使いにくい）とする武器は弓だったりする。」  
銃に慣れているので今更使えない。  
しかし、飛び道具以外となると………

「……薙刀……は一子と被る……刀……もか……  
じゃあ工具……は本職の方に失礼か……  
ぜんぜん思いつかん。ちなみに工具を暗具にしているヤツは結構居る。」

意外と殺傷力高いのだ。俺は好かないが。

「じゃあ……オリジナル？」

……なんにしようかな……まあ考えておこう。

しかし……ワイヤーなくしたのは痛かったな……あれ……お気に入りだったのに……

『だったら取りに行けよ！』というツツコミが聞こえてきそうだった、ので

ガルシアにとりあえず電話してみることにした。

え？……なんで知ってるんかって？

時々日本に来るらしかつたのでちよつとしたときに聞いておいたのだ。

さて、早速電話……

「あれ？……あ、制服か。」

そうだった、いれっぱだった。

「……」

やるものがなくなった。のでまた空を眺める。空はもう大方染まっていた。

「……」

しばらく無心で眺める。眺めていると、ぼつりぼつりと学園の生徒が

見え始めた。今日は金曜日だから、あいつらは廃ビルに居るのか。

と、遠くに見知った顔があった。

「あれ？あれ燕先輩だ……。」

あの活発そうな顔は見紛いようも無く先輩だな。しかし……  
……

「何か凹んでるな……。」

四日五日ぶりか？……に見た先輩はなんかそわそわしてるような  
しよげてる

ような複雑な感情をしていた。と、先輩もこっちに気づいたようだ。

「あ！零斗君！？」一瞬笑顔になり駆け寄ってくる先輩。相変わら  
ず自由奔放な人だ。

俺が時々『猫っぽい』と感ずるのは間違ってるはずだ。うん。

しかし、近づくにつれ、燕先輩の表情が人を心配するそれに変わっ  
た。

「零斗君……！」

あつという間に先輩は俺の横に来た、で、なぜか両肩を掴まれ高速  
で揺さぶられる。

あ……これなんかデジャヴ……

「『ガクガクガクガク！』……ちょ、いったん離して……  
なんですか？

何かあったん……？」



「大丈夫だった!？」

言いかけたところで声を被せられた。

「ええ……大丈夫ですけど……どうしました？」

すると、先輩はちょっと迷った後、こんなことを言ってきた。

「……だって……零斗君、アメリカに行ってたんだよね？」

「!?!?!?!？」

先輩の口から衝撃的な言葉を聞いた。

「……なんでだ。何で先輩は俺が『アメリカ』に行った事まで知ってるんだ!？」

『ガシツ!』『ひゃっ!?!』

俺は先輩の肩をつかんで逆に問い詰めた。

「何で知ってるんですか!?!！」

おそらく今、俺の顔は焦燥でいっぱいなことだろう。すると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で先輩は、腰の鞆の中から、

俺のケータイを取り出した。

「!!!!・・・・・・・・な、何で先輩が持つてるんですか・・・・・・・・  
そうか・・・・・・・・あの時落としたのか！」

だから先輩は俺が学園を出る前に俺を呼んだのか・・・・・・・・  
・・・・・・・・不注意すぎる。馬鹿か俺は・・・・・・・・なにやってん  
だ・・・・・・・・。

「じゃあ・・・・・・・・中身・・・・・・・・見ちゃったんですね？先輩・・・・・・・・

「  
恐る恐る聞いた。俺の行き先を知っているという事はそういうこと  
なんだろう。」

メールの着信履歴も消してない。・・・・・・・・つまり、そういうことだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ごめん・・・・・・・・でも、悪気は無かった  
んだよ？」

頭を下げてくる先輩。

「・・・・・・・・・・そうですか・・・・・・・・。」

そして、しばしの沈黙の後、

「……………はあ……………なんでこんなに……………うまくいかないかな……………」

無意識のうちにそんな言葉が出た。

本当に……………ずっと……………何もかも……………  
……………さて、

切り替える。どうやって誤魔化そう。これは難しいぞ？

そんな自分自身を嫌悪しながらも、俺はまた逃げる道を選んでいた。すると、

「零斗君。」燕先輩が真剣な表情で言ってきた。

「なんですか。」

「……………今度は隠さないでよ。きっちり教えてもらおうよ?」

「……………何故ですか。」と問うと

「!……………それは……………」

言いよどんだ先輩。よし、一気に畳み掛ける!

「これは、先輩が知らないといけないような問題じゃありません。俺の問題です。」  
冷たい目、冷たい声で言い放つ。

「!!…………でも!」

「知れば先輩にも危害が及ぶかもしれないんです。だから聞かないで下さい。」

トドメにそう言い、俺は立ち上がって先輩に背を向けて歩き出す。  
もう今日は帰ることにしよう……………、土手を登る。

さて……………何とか誤魔化せたか……………と思っていた、その時。

「……………!!なんでさ……………!!」

先輩の怒鳴り声が飛んできた。  
その剣幕に、俺は思わず振り返った。

「……………!!……………!!」  
そして、俺の動きが止まった。

先輩は、泣いていた。

うつすらと目に涙を溜め、それでもこっちを見据えてくる。  
いつもの朗らかな先輩は、ここには居なかった。

「  
零斗君の、馬鹿！・・・なんで・・・なんで  
・・・！！」

続けて先輩が言葉を発した。涙目で、

「  
なんで頼ってくれないの！！！」

「  
！！！！！！！！！！」

絶句してしまった。まさかそんな言葉が出てくるとは思ってもいなかったから。

「……………私は、こんなに心配してるんだよ？」

先輩のその言葉を呆然と俺は聞いていた。そして、それを聞いて自分の態度を恥じた。

誰も自分を助けてなんかくれなれな思っていた。ずっとそうだったから、  
でも、それは違った。

助けてくれる人はいた。今、ここにいる。他にもたくさんいたのかもしれないが。

見えてなかった。いや、見ようとすらしてなかった。

いつのまにか、自分から拒絶してただけだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツ！」

気づけば、俺の目にも涙が浮かんでいた。視界が涙でにじんでいる。

こんな俺を、真剣マッになって心配してくれる人がいたのが、嬉しくてそれをずっと無意識に拒絶して、勝手に嘆いていた自分が情けなくて。

『ドサ・・・・・・・・』膝を突き、再び座り込む。

「零斗君・・・・・・・・・・」  
先輩が隣に座る。

「ふふ・・・・・・・・馬鹿ですね、俺。」

本当にそうだ。何もかも上手くいかないと言ったさっきの俺をぶっ飛ばしてやりたい。

全部、自分のせいだ。自業自得だ。

「……ん……………全くだよ！さ、早く吐いちゃえ！」

・ 明るく茶化す先輩。……………そこは否定して欲しかった……………

しかし、先輩の顔には。確かな笑顔が浮かんでいた。それでいてつもと違う、優しい笑みだ。

「ふふつ……………」  
つられて俺も少し笑う。

「分かりました……………話します……………」

もう、絶対にこの人を拒絶するまい。傷つけまい。あの真剣な表情あの顔……………  
この人には到底適わない……………。

そう言い、そしてそう決意し、俺はゆっくりと『全て』を先輩に話し始めた。



## 第二十一話「再開と気づき」(後書き)

．．．．はい、次回に引つ張りました。

ちよつと王道でしたかね．．．．(汗)

．．．．あ、そういえば、言つの遅れました、10万PV超えました！

『闇殺し』をご愛読されている皆様、本当にありがとうございます！  
そしてこれからもよろしく願います！

．．．．暇になったら記念でアポリオンさんとコラボやるという手もあるな．．．。まあおいおい考えます．．．．

では次回もお楽しみに！

## 第二十二話「いぼねる罇」(前書き)

どうもっ！作者です！

今回は、最もやってみたかった話の一つです！

ま、とりあえず本編をどうぞ。

## 第二十二話「こぼれる雫」

「俺は・・・・・・・・・・・・・・・・殺し屋です。」

暗くなつていく河川敷に、俺の静かな独白が響く。先輩は、隣に座つて、

俺の言葉に耳を傾けてくれている。

「空裂家は代々殺しを生業としてきました。俺も・・・・・・・・生まれた時から

『こつ』なることは決まっていたんでしょね。

物心ついたときからありとあらゆることを叩き込まれましたよ。ずっと言われてきました、

『お前は今までで一番の人間だ。もっともつと上を目指すんだぞ。つてね・・・・・・・・』

心に浮かぶままに、言葉を綴る。

「ずっと、教えられている事は正しいと思っていました。

『主要人物を殺すことでより大きな混乱を防ぐことが出来る。』

・・・・・・・・ほら、耳に甘く響くでしょう？これこそが絶対だと、信じ

てきました。」

「でも、人を殺し続けてるうちに、疑問がわいてきて、迷った時期もありました

……こんなの、迷うまでも無く悪いことですよね……。」

俺は今、先輩を見ていない。先輩に向けて喋ってもいない。

ただ、自分に向けて、今までの感情をぶちまける。

「……今の日本の治安が良い、なんてのは嘘です。裏の世界で、目障りな人物や、治安を乱すようなやつを『狩って』るからなんです……。」

「……じゃあ……。」

「そのとおりです。親の言いつけで……60人以上ですよ？俺は、それほどのことをしたんです。」

「『気づいて』から、何度もやめようと思いました。でも……たぶん、心の奥では、迷ってたのかもしれない。親父達の言っていたことも……」

正論のような気がして……馬鹿だなあ……」

俺は……。」

「ですから、最近レプリカを使うようになりました、政府もそのことを察してか、

殺す必要は無いと言ってきてくれました……メール、新しくなるにつれて

殺害依頼が減ってきてたでしょ？

……でも、気づいた時には……」

「……だから、そこまで強いのに名前を聞いたことが無かったんだね……」

「そういうことです。」

先輩の問いに答え、なお続ける。

「俺の、父さんと母さんは、死にました。母さんは父さんに殺され……」

途中まで言いかけ、思い出してしまった。父さんを殺したのは俺。憎しみのままに、空裂家のピエロとなっていたあの戦場での出来事を……

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」  
言葉にするのが怖い。まだ、認めたくない。・・・・・・・・・・でも。」

どんな弱い所も、この人にだけは・・・・・・・・・・隠さないと誓ったはずだ。

さっきより、震えた声で言葉を紡ぐ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・父、さん、は・・・・・・・・俺が、・・・・・・・・殺しました。」

「!」  
隣で、先輩が驚いたのが分かった、それが分かって尚、やめない。絶対に。

「おととい、テロリストの制圧の為にアメリカへ行きました。そこで・・・・・・・・死んだと思っていた、親父にあっただんです。親父は、テロリストのボスをやっていました。そこで・・・・・・・・聞

きました。」

「親父が、俺を暗殺者にし、空裂家を存続させるためだけに、俺を産ませ、

俺の母さんを殺したんだと。」

「!?!?!」

「……………その時……………完全に切れました。

憎しみのままに闘って結局、俺は親父を殺しました。誰の手でもない、この手で。

……………俺は、あの時、自分が怖かった。でも、同時に……………

なんて言えば……………例えるなら、『諸悪の根源』を絶つたとも思っていました。」

「……………でも、それも違った。空裂家の人物のほとんどが、自分の父を殺していたことが分かったんです……………俺の行動も……………予想されていました。全て、書いてあったんです。」

……………悔しかった。自分のやっていることが全て裏目に出ることが。

・・・情けなかった。それを周りのせいにして、何とか逃げようとしていた自分が。

「・・・・・・・・・・・・俺は、空裂家から逃げられない。」

！！、自分でも気づかなかった、本音が口から漏れた。

これが・・・・・・・・・・・・俺の本心・・・・・・・・・・・・

・

「・・・・・・・・・・・・そんなことが・・・・・・・・・・・・」

「・

「全く、泣きたい気分です・・・・まあ、泣くことも許されないことをやっていたんですがね・・・・・・・・・・・・。俺は、

空裂家を継ぐため『だけ』の目的で、当時最強だった二人を『掛け合わせて』

作られた人間だったんです・・・・・・・・・・・・こんなもんですね・・・・・・・・・・・・」

自嘲気味に呟く。そう、これが俺の全てなんだろう。

そう思い、改めて虚しさを噛み締める。



「……俺の全ては、こんだけなのか、これだけの為に生きてきたのか。」  
「……そう思っていると、先輩が口を開いた。」

「……零斗君は、馬鹿だね。」

「!!」「ぐさつと刺さる言葉。……ストレートで先輩らしいな……」  
しかし、先輩の放った言葉には、罵倒や軽蔑といった感じは込められていなかった。

先輩が続けた。

「悲しい時は……泣けばいいんだよ?」

「!!!!」

予想外の言葉だった、目が見開かれるのが自分でも分かる。



て・・・・・・・・  
・・・・・・・・『そんなこと』と・・・・・・・・

この人は・・・・・・・・・・・・・強い。  
きつと・・・・・・・・・・・・・誰よりも・・・・・・・・  
強い。

その『強さ』が、俺には羨ましかった。

そして、  
何より、何より嬉しかった。そんな言葉をこんな殺人鬼にかけてく  
れたことが。

ふいに、視界が揺らいだ。

・・・・・・・・目に溜まった涙はあつという間に一筋・・・・・・・・二筋・・・・・・・・  
と、  
頬を伝って流れてゆく。

俺はこの日、

・・・・・・・・生まれて始めて涙を流した。

確かに幼少期、泣いた事はあった、だが、それは全て、怒り、悲しみ、寂しさから生まれた涙。

こんな、清らかな涙を流した事は無かった。

「……………うう……………く……………」  
口から嗚咽が漏れる。ガクリと膝をつき、うつむいた状態で、俺は泣いた。

ぼたぼたと、垂れる雫が土手の草を濡らしていく。

「……………」

先輩が、無言で俺の頭を抱いてきた、頭を撫でてくれる先輩。

……………暖かい……………

誰にも甘えたことが無かった俺には、その暖かさが余計に染みた。

「……………あう……………くく……………うう……………うう  
う……………」

俺は、必死に嗚咽をかみ殺そうとした。が、出来ない。

声を上げながら、無様に泣いた。

五年以上も溜められていた涙は、そう簡単に枯らす事はできなさそうだった。

## 第二十二話「こぼれる雫」(後書き)

はい、今回は………良かったね零斗君!! 回ですWWW

一子が出るのはもう少し後、この話しが一段落ついたら

10万PV記念です!

アポリオン殿の『とある死神の娯楽遊戯』と

コラボします!(矛盾だらけ)

まあまだ話は何も考えてないんで。

ぼちぼちに待っててくださいー!

第二十三話「こぼれる雫（燕サイド）」（前書き）

ども。今回は、燕編です！

零斗の真実を知り、燕は何を思っているのか！……っぐんぐん！

## 第二十三話「こぼれる雫（燕サイド）」

（燕 side）

とぼとぼと河川敷を歩き、自宅へ向かう。最近、授業内容がぜんぜん頭に入らない。

その分、頭の大半を占めているものがあつた。

「零斗君……今日も来てなかつたな……」

武道の授業は今日もルー先生だつた。先生に聞くと『諸事情』としか言わない。

でも、もう見当はついていた。

あの時……零斗君が落としていったケータイを出来心で開いてしまった時に。

そこには、零斗君が今まで秘密にしてきたであろう『事情』が全て書かれていた。

『依頼』、その内容を見ただけで、零斗君が何者か、大体分かつてしまった。分からないほうがおかしいといえる内容だつた。

……不安。

零斗君の身の安全ももちろんだけど、今まで私に接してきてくれた、あの優しい零斗君が全て『嘘』だつたのではないかという不安。それが、私の心を満たしていた。

「……」



河川敷にいと、零斗君がいるような気がして、つい探してしまっ。まあそんな事はないって事は分かってるんだけど……それでも辺りを見回しながら帰っていると、

「?……!?!」

零斗君が、土手に座ってこっちを見ていた。いた、ほんとにいた!!

「あ!零斗君!?!」 思わず顔がほころぶ。

思わず駆け出した……駆け出したのはいいんだけど……

……どうやって聞くといいんだらう。零斗君の『事情』を……

……ええい!ままよ!

「零斗君!?!」

零斗君の肩をつかんで揺する。

「ちょ、いったん止め……」

「大丈夫だった!?!」

零斗君が何か言うのも聞かず、大声で叫んだ。

……とりあえず、良かった……と、そこで気づいた。

……零斗君の表情が、明らかに落ち込んでいる時のそれだということに。

そして、何かに耐えているような目をしていることに。

「ええ……大丈夫ですけど……どうしました?」

絶対にそんなはずはない、だって……零斗君……

私は、少しのためらいを断ち切り、言った。

「……………だつて……………零斗君、アメリカに行つてたんだよね？」

「!?!?!?!?!」

零斗君の顔が青ざめた。やっぱり……………と、

『ガシッ!』

肩をつかまれた。思わず声が漏れる。

「ひゃっ!?!」

「何で知ってるんですか!?!」 焦りでいつぱいの零斗君の声。  
私は、おずおずと零斗君のケータイを差し出した。

「!?!!……………な、何で先輩が持つてるんですか……………」

そうか……………あの時落としたのか!じゃあ……………中身……………」

……………見ちゃったんですね?先輩……………」

呆然と聞いてくる零斗君、罪悪感に一瞬押しつぶされそうになった。

「……………ごめん……………でも、悪気は無かつたんだよ?」

素直に頭を下げる。すると、

「……………そうですか……………」 零斗君は一瞬、完全に諦め切つた、

自虐的とも取れる笑みを漏らした。

「……………はあ……………なんでこんなに……………うまくいかないかな……………」

「零斗君。」 勇気を出して、言う。

「なんですか。」

「……………今度は隠さないでよ。きつちり教えてもらおうよ?」

「……………何故ですか。」

「!……………それは……………」

私の問いに対して帰ってきたのは、予想外の答えだった。思わず言いよんどんでしまう。

そうこうしていると、零斗君はさらに追い討ちをかけてきた。

「これは、先輩が知らないといけないような問題じゃありません。俺の問題です。」

冷たい目、冷たい声で言い放つ零斗君。

「!……………でも!」

でも、それでも、私は零斗君の力になりたい。  
なのに。

「知れば先輩にも危害が及ぶかもしれないんです。だから聞かないで下さい。」

零斗君の口から出た言葉は、私に頼るといふ選択肢ではなかった。くるりとそのまま私に背を向け、ゆっくりと離れていく零斗君。

零斗君の背中が遠くなる。

……………頼られていない、自分は、零斗君に頼られていない。

無理しているのに、そんな顔、そんな目で、今にも壊れそうな脆くて儂い自分を

押えつけて。それでも自分を頼ってくれない。

その事実を認識した瞬間。私は急に悲しくなった。

「……!! なんてさ!!……!!」  
思いつきり叫んだ。視界は涙で若干歪んでいる。

「?……!!……!!……!!」  
立ち去ろうとしていた零斗君の動きが止まる。

「……!!……!!……!!」  
零斗君の、馬鹿!……なんて……なんて……  
止めようとした、でも、止められない。私は、周りの目も忘れて、  
感情のままに叫んだ。

「なんで頼ってくれないの!!……!!」

「……!!……!!……!!」  
零斗君の体が、いや、目に見えない何かが、ぐらっ……と傾いた  
のが  
確かに分かった。

「……!!……!!……!!」  
私は、こんなに心配してるんだよ?」  
そう……!!……!!……!!」  
私は、こんなに心配してるんだよ?  
ドクドクと自分の胸は張り裂けそうに痛い。零斗君は私の言葉を呆  
然と聞いていた。

「……!!……!!……!!」  
そして、不意に零斗君の目に涙が溜まり始めた。  
『ドサ……!!……!!』とその場に膝を突き、再び座り込む零斗君。

「零斗君……」

思い切つて零斗君の隣に座ることにした。並んで、しばらく二人の間に

沈黙が降りた後、

「ふふ……馬鹿ですね、俺。」

零斗君が呟いた。

……全く、こんなになるまで自分を傷つけて……

「……ん……全くだよ！さ、早く吐いちゃえ！」

明るく茶化した。でも、私を頼ってくれた。他の誰でもない、この私に。

そう思うと、急に嬉しくなった。

「ふふつ……」

私につられて零斗君が少し笑い、私はもっと嬉しくなる。

「分かりました……話します……」

零斗君の『事情』、それがどんなに酷いものでも、今はもう、昨日とは違い、

聞き遂げる自信が私にはあった。

（しばらく後）

「……ですから、最近はレプリカを使うようになりました、政府もそのことを察してか、殺す必要は無いと言ってきてくれました……メール、新しくなるにつれて

殺害依頼が減ってきてたでしょ？

「……でも、気づいた時には……」

ドカツと、悔しそうに地面を殴る零斗君。

私は、ほとんど無言で零斗君の言葉を聞いていた。

「……なんて……」

なんていつたら言いのか分からない。と、いつか上手く言い表せない、

零斗君の抱えてきたものは、それほど大きく、また、あまりにも重いものだった。

「……だから、そこまで強いのに名前を聞いたことが無かったんだね……」

「そういうことです。」

続ける零斗君、その言葉はどちらかという、自分自身に放つ戒めの言葉にも聞こえた。

「俺の、父さんと母さんは、死にました。母さんは父さんに殺され……ッ！」

零斗君は、さらに言いかけ、途中で止まり、泣きそうな表情になる。そして、直感で察した。

「……きつと、これが零斗君の心を苦しめる、一番の原因なのだと。」

「……父、さんは……俺が、……殺しました。」

「……！」  
零斗君の言葉に私は言葉を失った。零斗君はさっきよりも震える声で、

全てを打ち明けようとしていた。

「おととい、テロリストの制圧の為にアメリカへ行きました。そこで……死んだと思っていた、親父にあったんです。

親父は、テロリストのボスをやっていました。そこで……聞きました、

親父が……俺を暗殺者にし、空裂家を存続させるためだけに、俺を産ませ、

俺の母さんを殺したんだと。」

「……！」

……そんな、そんな、ことって……だから……  
零斗君は。

「……その時……完全に切れました。

憎しみのままに闘って結局、俺は親父を殺しました。誰の手でもない、この手で。

……俺は、あの時、自分が怖かった。でも、同時に……

……なんて言えば……例えるなら、『諸悪の根源』を絶つたとも思っていました。

……でも、それも違った。空裂家の人物のほとんどが、自分の父を殺していたことが分かったんです……俺の行動も……予想されていました。全て、書いてあったんです……

「……」

そついい、付け足すように

「……………俺は、空裂家から逃げられない……………!」

と、呟いた。私ももちろん驚いたけれど、何より零斗君が一番驚いているようだった。

きつと、自分でも無意識のうちに出た、本音なんだろう。

「……………そんなことが……………」

「全く、泣きたい気分です……………まあ、泣くことも許されないことをやっていたんですがね……………。俺は、空裂家を継ぐため『だけ』の目的で、当時最強だった二人を『掛け合わせて』

作られた人間だったんです……………こんなもんですね……………」

自嘲気味、いや、完全に自分を見捨てるような調子で呟く零斗君。震える唇を噛み締めている。

ここまでの『事情』を……………一人で……………」

「……………零斗君は、馬鹿だね。」

「!」

私の言葉に驚いたような表情になる零斗君。ほんとに……………馬鹿だよ。

君は。

「悲しい時は……………泣けばいいんだよ?」

「!」



そう続けると、零斗君の目が見開かれるのが分かった。

「……………無理しちゃって……………」  
少しは、弱くていいんだよ？無理なんか、しなくていいんだよ？

「……………」  
零斗君の動きが止まる。

「ありがとね、話してくれて。正直、ここまでとは思わなかったよ……………」  
でも、これで悩むのは一人じゃない。それに……………多分みんな……………」

「そんなことで、零斗君を嫌ったりしないよ……………もちろん私も。」

精一杯の気持ちを含めて、言った。

「!!!!!!……………あ……………」

零斗君の動きが止まり、身体が小刻みに震え始めた。

やがて、その目が涙であったという間に満たされてゆき、はらはらと頬を伝って

こぼれ落ちる。

「……………うう……………く……………」  
零斗君の口から嗚咽が漏れた。

ガクリと膝をつき、うつむいた状態で、顔は見えないが光る涙が次々と

土手の芝生を濡らしていく。

今までの全てを洗い流すかのように、清い涙を流して泣いている零斗君。

………良かった。

自然と微笑み、幼い子供のように震える頭を、私はそっと抱きかかえた。

……小さい頃、泣いていた時はよくお母さんがこうしてやってくれたっけ。

……腕の中で、泣き続ける零斗君。そのサラサラの髪をゆっくりと撫でながら漠然と、あることを考えた。

今日、今、私に悩みを打ち明けて、いや、『全て』を教えてくれた零斗君。

………本当に嬉しかった。

今も、嬉しい。……ずっとこのままでいたいほどに。

そして、思う。ああ、これが………

『好き』ってやつなのかな………

始めは、ただの興味だったと思う。でも、そのうちに………『未知の実力者』からこの『空裂零斗』が気になるようになって。

今は、零斗君がいないだけでものすごく寂しいし、逆に、ふとした瞬間に

隣にいてくれるだけで。心が………とても温かくなる。

いつも零斗君を見てしまっし、今日も、今まで生きてきた中で、一番不安だったし一番嬉しかった。

やっぱり、このキモチこそが・・・『好き』ってやつなんだろう。

「・・・・・・・・あう・・・・・・・・くく・・・・・・・・うう・・・・・・・・うう  
う・・・・・・・・」

ぬくもりに縋り付くように腕の中で涙を流す零斗君。

私は、ゆっくりと目を閉じて、静かに零斗君の頭を撫で続けたのだ  
った・・・・・・・・

第二十三話「こぼれる雫（燕サイド）」（後書き）

はい、先輩は自分の気持ちに気づいたようです。

次回の次ぐらいが記念回になるかな〜・・・

## 第二十四話「これから」(前書き)

ども、零斗君の涙編は一応これで終わりです。

零斗はこれから、どうやって生きるのか！

ではどうぞ。あ、あと改行少なくなりました。

どっちが読みやすいですか？



「とりあえず、殺害依頼はもう絶対に請けません。しかし……」

確かに、もう殺害依頼は二度と受けないだろう。だが、長年続けてきたことで

築き上げられた信用は、もはや簡単には無くなってはくれない。

『信用』、案外マイナスに働くこともあるもんだな。

それに……俺は……

「多分、俺は『依頼』自体は受け続けると思っています。」

「!……なんで？」

「それは……今まで殺してきた人の数だけ、今度は人の命を救うために。」

……ただそれだけの理由ですよ。」

落ち着いていたせいかわ、すらすらと言葉が出た。しかし……そう、こんなことをしても自分がやったことが消えてなくなるとは思わない。

所詮自己満足の世界だ。……だが、それでも、それでも俺は何かがしたい。

綺麗事だと罵られようが、何を言われようが、俺はやる。

それに……あの時『あの時』の……

『~~~~~!~~~~~』

あの時……助けた家族の父親の言葉と、子供の笑顔が、忘れられなくて。

そう、『あの時』とは、初めてガルシアと共闘した紛争の制圧戦だ。感謝の言葉の後、手を繋いで帰っていく家族を見て……  
・  
……初めて、『依頼』を受けて、本当に良かったと思った。殺すことしか出来なかった自分が、初めて助けた命。あの父親の顔が、まだ心に残っている。

「……ま、いいんじゃない？でも、先生もちゃんとやるんだよ？」

「！……わ、分かってます……」

ちよつと詰まったのは仕事を忘れていたというわけでは無い、断じて。いやマジで。

……もう空はすっかり暗い。先輩と会ってから随分経つな。と、いう訳で俺はそろそろ帰ることにした。

「先輩、そろそろ帰りましょう。もう真っ暗です。」

「そうだね、もう遅いし。」

そっくり、俺と一緒に立ち上がって土手を登ろうとしていた先輩だったが、

「……！」

不意に、その身体が後ろに傾いた。

おそらく長い間座っていて、急に立ったのでよろめいたのだろう。

「よっ」「……」

なので、軽く背中に手を当てて体勢を戻してあげる。

……ライトノベルとかなら抱きかかえて転がって至近距離の見つめ合いになって『あっ……』ってな感じになるんだろう。

……しかーし！空裂零斗は紳士なのだ。女性にそんな真似はしな



い。

しない………しな………あれ？

「………ありがとう………ありがとう………むー

」

なぜか機嫌を損ねてしまった。全くもって訳がわからん。

口を尖らせてしまった先輩。………どーしよ。

………ちなみに燕は

(………もうちょっとなんかしてくれても良かったじゃん………手を掴むとか………)

と照れつつむくれていたのだが。口に出していないので無論零斗には伝わらない。

「よっし、今日はありがとうございました。また月曜ー」

「………うん。じゃあねー！」

先輩と別れてしばらく歩き、俺は自宅に着いた。あ、先輩………送ってきや良かったかな………不良に絡まれたりしたら『嫌』だし………

「ま！あの人の実力なら大丈夫だな！」

思いなおし、テレビの電源をつけた………と、

「現在、川神市に連続殺人犯で現在全国指名手配中の逃亡犯である『岩見祥吾』

容疑者が潜伏していることが分かりました。身体的特徴としては

般若の仮面をつけ、老若男女問わずイライラしたという理由で標的を惨殺するという

人間で、現在警察が行方を追っています………」  
と言うニュースをアナウンサーが読み上げていた。

「わお………狂ってるんだろうか。」

簡単に言ったが、実際に殺人狂だとしたらこれほどに厄介な相手もいないだろう。

なぜかって？基本、『全国指名手配犯』と言うのは最上級の警戒レベルだと思って良い。日本国民の全員にチクられるんだからな。

しかも、コイツは身体的特徴で余計に分かりやすい………やす過ぎる。

『連続』と言う事は五人か………もしかすると何十人もやっているかもしれない。

………というか、非公認の殺し屋と言う説もあるな、聞いたことは無いが。

で、話を戻すと、そんなだけのことをやっていて、セキュリティレベルMAXの

なかを悠々とかいくぐり、潜伏できる。………

というほどの実力がこいつにはあるということ。なのでコイツが殺人狂だと少々

厄介なのだ。

。一回人を殺した人間は躊躇がなくなるっていうしな（人事では無い）

「………ま、俺は依頼されなきゃやんないけどね！。

依頼されたとしても標的の殺害ならどっちみちやんねーけど。」

結局そんな消極的な意見にたどり着いた俺は、テレビを消し、

「……………どうせなら……………ウチのジジイを殺してくん  
ないかな……………」  
という縁起でもないことばをはきつつ、夕飯の支度を始めるのだっ  
た……………

## 第二十四話「これから」（後書き）

はい、零斗君は人助けをして生きることになったようです。

・・・さつて！次回はアポリオン殿とのコラボ企画！

矛盾の中を突っ切って書いていきます！あ、あと明日は更新しないと  
思います・・・もう一つのほうを更新しないとね・・・

ではまた〜（・・）ノ

## 第二十五話 「十万PV記念」(前書き)

ども！

いやはや・・・随分と更新が遅れてしまいましたね・・・  
試験が終わりましたのでまたぼちぼちやっていきます。  
今回からの数話は、アポリオン殿とのコラボ企画です！  
また駄文に戻っているのは勘弁して欲しいです・・・  
ではござい！

## 第二十五話 「十万PV記念」

「ん……あふうー……今日は土曜かあゝ」

ベッドから出る。なんというさわやかな寝起き！久しぶりだ。

現在午前九時……なにやら久しぶりにちゃんと休んだ予感がするぞ。

「やつぱ……悩みを打ち明けたからかな……先輩に。」

今更なんだと言われそうだが……今考えてもめちゃくちゃ恥かしかつたな。

まあいいか。今日は……何するか……

「今日は……今日……きよ……」

……(ピシッ)「

トーストを半分口にくわえた状態で硬直する俺。ここに来て気づいてしまった……

……『暇』という最大の天敵が俺を待っていることに……

「ほーひひよ(どーしよ)……」

もごもごと口を動かす。何を隠そう、俺は暇なのが大好きなのだ。なんかしていたい

人間なのだ。……うーん……

「町をうろついてみるかあゝ……」

トーストを飲み込んで一息つく。……お！



馬鹿な！？いやそんなはずは無いちょっと待ちなさい？と記憶をめぐらす俺。

「……………ほとんどねえ……………え？じゃあこれケータイって言うて良いの？」

もうこれ俺のは『端末』でよくね？(orz)

「……………まあ、その……………な？」

しかも、気まずそうな声が受話器を通じて聞こえてきた。

「……………お前絶対目え逸らしてるだろ！こつち向け！オイ！！」

もう声からありありと想像できたわ！……………まあこつちってどつち？と聞かれると

分からないが……………

「……………まあいいや。ちよつと預かつといてくれ。」「OK！」

よし、これで一安心……………と思っていたとき。ガルシアが不意に

「しかしお前……………変わったな……………」

などと言ってきた。

「は？」

「いやー、声だけでも分かるぜ。前にあつた時は『暗殺のプロ』みたいな時々

棘が見える口調だつたんだが。普通の少年の声に戻つてゐるみたいだな。

なんかあつたのか？」

ガルシアが続けてくる。はい、心当たりあります。メツチャありま



す。

「まあ……色々……な？」  
そんなことを言っただけ誤魔化しているよ

「ふん、さては恋人でも出来たか。」  
ガルシアさんがなんか言ってきたよ。

「!!!……おいやめろいややめてくださいさっさと爆弾発言投下すな。」

「……怪しいな……ジョークのつもりだったんだが。」

「!……/」

はめられた。それはもう見事に……まあ居ないんだがね。

「……いや、でも実際居ないからな？」

「つまんねー」

「ヲイ。」

「まあ気にすんなw」

「ヲイ。」

ヲイ。

と、ガルシアはそんなたわいもない話で俺をからかっていたがふと真面目になって

「でもよ。お前は恋人の一人でも作ったほうが良いぜ？特に『お前は』な。」

ずっと孤独だったんだろ？飽きたろ？孤独。俺は既婚だが

本当に大切な人ってのが隣に居てくれるのは良いもんだぜ？たとえば俺達が

生きるか死ぬかの戦場に居ても絶対に生きて帰りたいと思えるよう

な『人』。

お前高校生だろ？恋ぐらいしろよ？  
と言ってきた。

．．．．．俺は』か．．．．．確かな．．．

この世で最も大切な『人』．．．．．は、現れてくれるんだろう  
か．．．．．

．．．それとも．．．俺の近くにもう居るのだろうか．．．．．

「ま、こんぐらいにするわ。じゃ、しっかり預かっておいてくれ  
じゃな。」

「おう。」

互いに電話を切る。．．．．．

「．．．．．ふう．．．．．外出てみるか．．．．．」  
とりあえずワイヤーがあったことは分かった。えかったえかった！

俺は制服に着替え、（実は制服が一番好き。）　ふらふらと街中に  
出て行った．．．．．

「……………むーん。」

町中を歩きながらふと呟いた。

この独り言を聞けば俺がどんな状況下にいるかが一発で分かるだろう。

……暇だ。やっぱり暇なのだった。

「うーん……………」

気がつけば、俺は気の向くままにふらふらと路地裏に入っていた。

無意識である。

そしてそのまま進んでいると……………

「……………」

……………なんだろう。この胸踊る感覚は……………スゲー楽しくなってきたんだけど。

なんかこうゆづさ、狭いところか細い道とかを探検(?)するのってわくわくしてくるよね。

「……………」

気分は完全に(……………)こーんな感じである。

でもね、こんな薄暗くて細い道って大体の確立で……………

『ドーン』

「お?」

「ア、ア?どこ見てんだア!??」

ほらきたこれ。

目の前にはお前はいつの時代の人だ？、と言いたくなるような、あからさまな

不良集団。俺はそれを一瞥し

「あ、さっせんしたw」と、

あくまで穏便に済ませる（笑）ことにした。

「テンメエ・・・謝る気ねえだろ!？」

はいそうですが何か。

「いやwwwそwwwんwwwなwwwこwwwwとはw」

「（ブチ・・・）ほお・・・だったら誠意を見せてもらおうか。有り

金全部

ここにおいてけや!」

あっという間に囲まれた。まあ俺はこの程度で傷害事件起こしたくないし？

ここはおとなしく引いておこう（笑）

「う・・・わあつたよ・・・ほれ。」俺は観念したフリをして財布を投げた。

「ふふん。あとついでにコイツやっちまおーずええええ!」 「お

おお!」

馬鹿共（5人）が跳びかかって来た。ので、

「つち!!（ドン・・・ドン・・・ドンドン!）」

「!!・・・逃げやがった!・・・つて速えええええ!」

五人全員にぶつかりつつ俺は『逃げた』、

・・・はい。逃げました。裏のルールには常識は通用しないの



そう思い、俺はコンビニの中に入る。そこで甘い系の菓子をあさっている……

『バターーン!!』

「!」 何ぞ!?

扉が勢いよく開かれた。そして、そこに居たのは……

『般若』だった。

あの『般若』が、そこにいた。

第二十五話 「十万PV記念」(後書き)

はい、すみません・・・次回に引っ張ってしまいました・・・  
零斗君は随分気が楽になっているようですね。

次回はいよいよです！  
お楽しみに！

第二十六話「十万PV記念 その二」（前書き）

ども〜！

こ ん か い はー！

戦闘シーンです！はい！

それはそうとアポリオン殿・・・なかなかに祥吾さんのキャラが・

・  
他の小説のキャラ書くって難しい・・・まじさーせん・・・  
多少の違和感は許して欲しいのです・・・多少じゃねーか。

ま、とりあえず読んでみてくださいだされ！



## 第二十六話「十万PV記念 その二」

『般若』だった。

あの『般若』が、そこにいた。

ピシッとしたスーツ姿で、もはや冗談としか言えない容姿で。

ピシッ・・・と、コンビニ内の空気が凍りつく。強盗だ。

そして、刹那の間を置き、一気に奴は動いた。レイピアと巨大な拳銃・・・

あれ『拳』銃じゃないよね??と言いたくなるような巨大な拳銃を取り出し、

「動くな。」と客達に突きつけた。そこでパニックになりかけていた客と店員の動きが

停止する。そのまま無言で歩き出し・・・あれ?こっち来た?

俺のほうにつかつかと歩み寄ってきた『般若(としか言い表せん)』は俺の近くの

棚に来ると、甘い系の菓子をごっそり盗りやがった。どうやら甘党らしい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・?・・・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

って!までや!それ俺が買おうとしてたやつ!!

「おいー」 「とりあえず納得いかったので話しかけてみることにし

た。

「そのチヨコのやつと飴一個ずつくれよ。俺が買おうとしたやつぞー？」

さて、どう出るかな？・・・？そう思っていると、

「・・・そんなに死にたいか。」

「！」 般若は呟き、そして

何のためらいも無く引き金を引いた。

『ズガアアン！！』『ツツ！』

どうやら相当いかれたやつらしい。だが、相当の実力者であることも伺える。

普通あんな拳銃、撃ったら反動で肩外れるぞ。

「ガシヤアン！」 俺はやつが引き金を引く一瞬、横に飛び、そのまま蹴りを放った。

この音は奴が柵にぶつかった音だ。

「おま、それはねーだろ。いーじゃん一個ぐらい。」

俺も結構甘いもん好きなんだよ。

あんま闘いたくもないんだよなあ・・・こいつ多分強いし・・・

「・・・イラツときた・・・殺す！」

だがやはり相手は納得しない。まあ当然といえば当然だが・・・

「だーまーれこのリーマン般若が！・・・ん。」

右手を前に出して催促する。いや、マジでそれくれよ。他人が持つてるものって

すげー美味しそうに感じるんだよ。分かるだろ？

だがやはり奴は応じてくれないようだ。

「オーケー。外で殺り合おうぜ。とりあえずそのむかつく顔面、地面に縫いとめてやるよ。」

「ふん。望む所だ！……でも言うと思ったか！とりあえず金払ってくんだろーな？」

なんとなく、直感である。コイツは金はちゃんと払ってくような気がした。

「当然だろ。」

「いや、だったら普通に入れや……」

「とりあえずそのうるさい口から潰すしかなさそうだな。」

「……やっぱそうなのか。まあ……」

「……分かった。だったらやろう。だがコンビニ内はダメだ。」

「当たり前だろうが。」

即答するリーマン般若（仮）。……うん、こいつやっぱ根は律儀なんじゃ???

そう言い、俺（達）はコンビニを出た。おそらく殺し合いになるだろう。

そんな予感を抱きつつ。

……きつちり半分ずつ金をレジにおいてから。

「……………」

コンビニの外に出て、一步、二歩、三歩……五歩歩いた所で。

「おらあああああああー!」

「っ」

リーマン般若(仮)が持っていた西洋剣レイピアで突きを放ってきた。俺はその突きをかわした……が、

「!」

頬から一筋、血が垂れた。完璧に避けたと思っていたのに、だ。

……コイツ……『結構』どころじゃない強さだ……これは本気でかからねーと命を落としかねんぞ……

「ちょ、待て、その菓子はどうすんだよ。後名前は？俺は空裂零斗。」

名乗る時は自分から。ね？

しかし、どうやら奴は俺の名前を知っていたらしい。

「ッ!……空裂……聞いたことある……そうか、

お前が・・・」

「・・・俺の名前を知ってるって事はどーせ暗殺業やってんだろ？ん？んん？」

フレンドリーに話しかける。

「・・・これは余談だが、俺がこんなにもこいつとの闘いを拒むのには理由がある。」

「・・・なんか、俺と同じがするからだ。コイツも多分過去に何かあったのだろう。」

根はいい奴だろう。あくまで根は、だが。

「馴れ馴れしい奴だ・・・まあ名乗っておくか。『岩見祥吾』だ。もう良い。とりあえず、殺すッ！」

そう言い、リーマン般若（仮）改め岩見祥吾が一瞬で間合いを詰め、西洋剣で

神速ともいえる突きを放つ。俺はそれを後ろに飛んで回避した。

もうこうなってしまうたからにはしょうがないだろう。

「・・・全力でかかる！！」

「っち。」

俺はポツケから打ち根を二本取り出し、構えた。

「ハッ、何だそのシャーペンみたいなもの。」

「おい！短気自重しろ。あと例えは上手いと思う。」

「そりゃどうも！はあああああ！！！」  
再び突っ込んでくる岩見祥吾・・・祥吾って呼ば。

・・・以外だった。案外会話が成り立っている。思ったより普通のようだ。

外見は例外としても。

「『キンツ！』甘い！」

俺は奴の突きの軌道を打ち根で逸らし、もう片方の打ち根で頸動脈を狙う。

が、祥吾は身体を回転させて避け、後ろに飛んだと同時にどこからか取り出した手榴弾を二個投げつけてきた。

「！！！」

流石に一瞬呼吸が止まる。そして、

『ド、ガアアアアアン！！』

爆音が、炸裂した。

「ふう、たいしたこと無かったな。何が最強の暗殺者、だか。」

溜息混じりに呟いた祥吾。

周囲は完全にパニック。悲鳴が飛び交っている。じきに警察も来るだろう。

「……………イライラは解消することができたが……………」

「……………変な奴だったな……………」

零斗の敵意が皆無だったことに少し引っかかりを覚えていた。

まあ死んだんだからしょうがないか……………と思いつつ、立ち去ろうとした所で

その時。

「派手にやりすぎだろ！オイ！！！」  
声がかけられた。声が。

「！！」

振り返ると……………」

近くのビルの壁に零斗がいた。どうやら拳を壁にめり込ませて事なきを得たらしい。

零斗は地面に降り立ち。

「なあにさらしてくれとんじゃあああああ！！ヴァーカヴァーカ！」

このリーマン般若！！！」

「『ブツッ！』……………ほお……………やっぱり自分の手で殺したくなつたぞ……………」

「……………せやあああああ！！！」

再び放たれた『リーマン般若』という言葉に切れた祥吾は西洋剣で再び突きを放つ。

そして、二人の第二ラウンドが幕を開けた。

↳ 数時間後↳

「せえいつ!!」

「うぐっ！」

俺の拳が祥吾の鳩尾に決まった。吹っ飛んでいく。

今、俺達は武器を捨て、完全に拳で闘っていた。  
何故そんな力オスな状況になっているか。

理由は『重い』から。

ただそれだけ。打ち根の軽さを持ってしてもやつにかするのが限界だった。

始めのうちは俺も祥吾も『暗殺者の闘い方』だったが、何時間たつても勝負がつかなかったもんで……相手……祥吾も同じことを考えていたらしいが。

お互いかなり疲労する所まで来ていた。俺も気をほとんど使ってい



たので、  
かなり疲れた。

周りではすごい人ばかりだ……一般人ではなく、機動隊の。  
あれ……うーん……俺達……なんで闘ってたんだっけ？

そんなことを考えていたものだから祥吾の拳が迫ってきていたのに、  
反応が遅れた。

「!!」 咄嗟に顔を限界まで気を込めた手でガードする。 が、

奴の拳は軌道を変え、顔ではなく、俺の鳩尾に綺麗に決まった。

「ガホッ!!」  
……まさに『かいしんの いちげき!』だった。意識が飛び  
かける。

二、三メートルは吹き飛ばされた……まだ何とか行けるか。  
綺麗に決まりすぎていたせいで肋骨も損傷してない。

今の俺達は完全に祥吾の言う『殺し合い』の趣旨からずれていた。  
これじゃ『殴り合い』だ……ガキみてーだな……

……だが、楽しい。こうしてただ純粹に、殺意なんか考えず、  
『ガキの喧嘩』  
をするのはものすごく楽しかった。

「へっ……お返し……だ。」

祥吾の、かすかに得意げな声が般若のお面の中から聞こえた。おい・  
・  
・  
何気にお前も楽しんでるような気がするぞ？

完全に俺達は満身創痍だった。俺もここまで食らったのは初・  
・  
久しぶりかな？

「そ・  
・  
ういえば・  
俺達、何で闘ってんの？・  
・  
・  
」  
素朴な疑問を口にしてみる。

「そりゃ・  
・  
お前がむかつくからだろ・  
・  
・  
・  
帰ってきたのは理不尽極まりない答えだった。」

「ひでえ・  
・  
・  
ちげーよ・  
・  
確か・  
・  
コンビニのお菓子・  
・  
」  
「  
・  
そっつい、同時にさっき祥吾がビニール袋を置いていた場所を見る  
と、

そこには巨大なクレーターが。

目を擦ってもう一度見てみる。

そこには巨大なクレーターが。

目を擦ってもう一度見てみる。

そこには巨大なクレーターが。

「あ……………」  
俺達はどちらとも無く声を発し……………」

「「Orz」」

同時にガクツと膝を突いた。

……どうやら、全国指名手配犯の連続殺人犯と素手で殴りあつた  
いうレアい経験は  
ここで終了らしかった。

## 第二十六話「十万PV記念 その二」（後書き）

はい。お気づきかと思いますが、今回は、零斗と祥吾、二人の『暗殺者っぽい雰囲気』を無くして見ようと思ってやりました。

・・・反省はしている。後悔はしていないw

ていうか・・・記念回って言って良いんだろうか・・・なんかすげー続きそうんだけど・・・

ま、今回は二人の・・・関係がちょっと和らぐかな？  
お楽しみに！

あ、今回コラボさせていただいたアポリオンさんの小説。

『とある死神の娯楽遊戯』はここです！

<http://ncode.syosetu.com/n6192u/>

読んでない人、ぜひぜひ読んでみてください！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6703x/>

---

まじこい！～『闇殺し』の少年の物語～

2011年12月11日02時54分発行